

とある科学のホワイト ルーム生

嫉妬憤怒強欲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホワイトルームから逃げ出し、学園都市で学生生活を満喫していたオリ主が学園都市内部外部問わず陰謀や策略に否応無く巻き込まれてゆく話。

とあるシリーズのアニメを時系列順に見ていると、衝動的に書いてしまいました。

目次

天の上に人を造らず人の下に人を造らず

— 福沢諭吉

プロローグ

妙なめぐりあわせ

夏休み初日が良い日とは限らない

45

二日目も無事とは限らない

副産物（前編）

副産物（後編）

幻想猛獣 ■■

もう一つの決着

おのれ鯖缶娘

192

166

148

128

99

72

祭に行くとは大抵知り合いと出くわす
215

乱雑解放編

噂も案外馬鹿にならない

夏祭り

深まる疑念

287

269

249

天の上に人を造らず人の下に人を造らず——福沢諭吉 プロローグ

人は皆平等であるか？

否、人は不平等なもの、存在であり、平等な人間など存在しない。

かつて過去の偉人が、天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず、という言葉を生み出した。だがこれは皆平等だと訴えているわけではない。

この有名すぎる一説には続きがあるのを知っているだろうか。

その続きはこうだ。生まれた時は皆平等だけれど、仕事や身分に違いが出るのはどうしてだろうか、と問うている。そしてその続きには、こうも書かれている。

差が生まれるのは、学問に励んだのか励まなかったのか。

そこに違いが生じてくる、と綴つてある。それが有名すぎる『学問のすゝめ』だ。

とにもかくにも、人間は考えることのできる生き物だ。平等という言葉は？ 偽りだが、不平等もまた受け入れがたい事実であるということだ。

そして、その教えは現代においても何一つ事実として変わっていない。

もつとも、学園都市では特に事態は複雑かつ深刻化しているが……

◇ ◆ ◇

『学園都市』

東京西部の多摩地域に位置する巨大な完全独立教育研究機関。あらゆる分野の教育機関、研究機関が犇めき合い、総人口230万人のうち八割が学生という学生の街。この街の科学は外よりも数十年進んだ最先端科学が運用されており、中でも人為的な『超能力』の研究開発の側面が強い。

通常の人間にはできないことを実現できる特別な力。

手から火を出す。電撃を操る。水流を操作、手を触れずにモノを動かす、相手の心を読んだりもすることができるといわれる。

この街で暮らす学生のほぼ全てにはそれぞれの学校の『時間割り』に超能力開発が組み込まれていた。

初夏真つ只中の七月中旬。

第七学区のとある高校。一年七組。このクラスになってもうすぐ一学期が経つ。

オレこと清原綾斗は未だに教壇はらにいる存在に慣れないでいた。

「では授業を始めるですよー。今日最後の授業だからって気を抜いたらダメですからねー」

このクラスの担任、月詠小萌つきよみこもえは教壇の前に立つと首しか見えなくなるといってもない教師だ。身長は135センチで、安全面の理由からジェットコースターの利用をお断りされたという伝説を持つ、誰がどう見ても黄色い安全帽に真っ赤なランドセル、ソプラノリコーダー標準装備の十二歳にしか見えない幼女先生だ。

「まずは先週の期末テストの返却をしますよー」

来週から夏休みという学生にとつての長い長期休暇が始まる。クラスの大半は浮足立つものと緊張をはらむものに分かれていた。

一学期で生徒がどれだけ学力がついたか確認するための期末テストの結果が今日わかる。点数次第では夏休みが補習でつぶれるのだ。

「おい。土御門つちみかど、青髪、清原。お前ら、先週言つた勝負の話忘れてねーよな？」

オレの前の席に座るツンツン頭の黒髪の男、上条当麻かみじょうとうまがオレと隣の席に座る逆立たせた金髪にサングラスをかけた男、土御門元春つちみかどもとはると青髪ピアスの学級委員（男）に声を掛ける。

「この期末テストで一番点数の低かった奴が、今日の飯代を奢るつちゆう話やろ？勿論

覚えてるでー」

軽快な似非関西で話す青髪（名前忘れた）は一言で表すなら変態だ。

以前に女性の好みについての話題で奴は……

『ボクあ落下型ヒロインのみならず、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツイントールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチュワードスウエイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様ニーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクール水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショツト水着バカ水着人外幽霊獣耳娘まであらゆる女性を迎え入れる包容力を持つてるんよ？』

と、どう反応すればいいかわからない回答をした。

しかも「パン屋の制服がメイド服に酷似しているから」という変態じみた理由から、現在は学生寮ではなくパン屋に下宿している。

「オレも覚えてるぜよ。そういうカミヤんこそ、今更無しって言ったって聞かないぜよ？」

「当然だ。なんとたつて、飯代がかかっているんだからな」

「よし！望むところだにゃー」

猫ボイスで、口調が軽いことこの上ない土御門は一言で表すなら変態だ。

なかなか話しやすく、もう気軽に遊んだり出来る仲だ。と思う。

だが義妹を愛し、メイドを愛する変態男だ。

「ふふん、今回の上条さんは違うのだよ」

得意げな顔をする上条は「不幸だ」が口癖で大小様々なトラブルに巻き込まれる自他に認める不幸体質の人間だ。非常に運が悪く、高い頻度で揉め事や厄介事に巻き込まれたり、不運な事態に見舞われるのは日常茶飯事だ。だが困っている人がいたら助けるいい奴だ。

上条が声を掛けてくれなかったらオレはコミュ障のボツチのままだった。

以来、デルタフォース（クラスの三バカ）というグループ名がつけられている土御門、青髪、上条の三人とオレはたまにつるむことがある。勿論馬鹿なことは率先して行わないのだが、流れに巻き込まれるときがある。今回もそれだ。

「なんだか盛り上がっているみたいですけど、上条ちゃん、土御門ちゃん、青髪ちゃんの三人は30点以下で赤点なので夏休み補習決定です」

「なっ、赤点!?そんな、なんでだ……!」

小萌先生から告げられた宣告に、上条は信じられないといった声を上げる。

配られた答案用紙を手にとって確認する。

三人の反応はバラバラだった。

「29点……完璧な調整やわ……！この点数なら、奢って貰える上に小萌先生の補習受けられるやん！」

うん……青髪の変態には触れないでおこう。

「オレは27点か……苦手な範囲のわりには惜しかったにやー。キヨポンはどうぜよ？」

「……オレは66点、平均点ギリギリだな」

せつかくの休みを補習で潰されてたまるか。

「カミヤんはどうだったぜよ？」

「……0点」

嘘だろ上条。あれだけ勉強してたのに。

「0点って、いくら何でもそれはないんじゃないか？ちよつと見せてみるにやー」

「どれどれ……あら……カミヤん、答えは結構合ってるのに解答欄がずれてますやん」

「……上条、あれほど記入したあと見直ししろって言うておいただろ」

「す、すまん清原」

上条の答案用紙を見たが、とんでもない記入ミスだった。

上条は不幸体質だが、ドジなどところがある。オレはそれを把握して一応忠告はしておいたんだが駄目だったか。

「ま、勝負は勝負。点数が一番低かったカミヤんが今日のメシ奢りだにやー」

「はいはい、そこ静かにー！授業を始めますよー」

「はあ……不幸だ」

哀れ上条。

「いやー食べた食べた。長居しすぎてすっかり日が暮れとるねー」

「カミヤん、今日はありがとうだにやー。すっかりご馳走になってしまったぜよ」

授業が終わり、いぎファミレスに行くと土御門と青髪は奢ってもらうのをいいことにデリシヤステーキやらチーズピザやらハンバーグやら高いメニューばかりを注文した。

オレはさすがに悪いので安いものにしたが……

「本当に奢らせやがって……今月どうやってやりくりしよう」

「これでも、もう一品いけそうなんを我慢したんよ？」

「メシはやっぱり賑やかなのが一番だにやー」

この二人は良い奴なのか容赦がないのかわからないな。

「はあ…不幸だ」

「なあカミヤん…カミヤんはオレの友人だからにやー。困ったときは、オレにできることならすぐに助けるぜい？」

「土御門…俺は今、お金で困ってる」

「えつと…上条、食事ならオレの冷蔵庫にあるのを少し分けてやっていいぞ」

さすがに可哀想なので、オレは救いの手を差し伸べると、上条は尊敬のまなざしでオレを見てくる。

「うう…すまん清原。…ああ、オアシスはすぐ傍にあつたんだな」

「男相手に何言い出すんだ？」

「変な意味じゃないからそんなに引かないでください!!」

引きつつあつたオレに上条はどうにか弁明をした。

「なあ、三人とも。ちよつとあれ見てみい」

「どうした青髪？あつ」

青髪がむいている方向に目を向ける。

4人のガラの悪い男たちが2人の少女を囲んでいた。

「あ、あの、やめてください…」

「いいじゃねえか。ちよつとくらい付き合ってくれてもよ」

2人の少女のうち、ウエーブのかかった栗毛の少女が反抗するが、恐怖で怯えてしまっていた。

「あれは……常盤台の制服の生徒だにやあ」

常盤台……確か学園都市でも五本の指に入るお嬢様中学校のものだった気がする。

世間知らずのお嬢様からしたら、いくら自分が能力を持っているとはいえ、見知らぬ男に絡まれるという体験は恐怖には違いないだろう。

「不良に絡まれてるのか？」

「どうします、お三方？」

「見て見ぬ振りっていうのは流石に寝覚めが悪いぜよ」

……助けに行く流れか。

「こういうのは助けに行くしかないよな」

上条が率先して行く。

「おい、彼女たち、困ってるじゃないか」

「あ？なんだおめえらは？」

「困ってる女の子を放っておけない男子高校生ぜよ」

「恰好つけてんじゃねえよ！おいやっちゃまうぞ！」

不良たちがお約束のセリフを言いつつ、オレたちに襲いかかってくる。これで正当防衛は成立したな。

数分後。

「そら！ 胴体がガラ空きだぜい！」

「ぐはあつ！」

土御門が最後の一人の腹部にボディアップパーをかける。もろに入ったらしく、腹を押えながら地面にうずくまった。

「ふう。口先だけで大したことなくてよかったにゃー」

襲いかかってきた不良たちは全員苦悶の表情を浮かべ倒れている。

起き上がって襲いかかってくる様子がないのを確認したオレは、呆然としてる常盤台生の二人に声をかける。

「大丈夫か？」

「あ、はい。あの……助けていただいて、ありがとうございます！」

「しつこく遊びに行かないかって声をかけられて、困っていたんです」

「常盤台の生徒なら、能力でなんとでもなつたんやないの？」

「その……私達の能力だと、大怪我させてしまうかもしれないので……」

「どこかのビリビリにも見習って欲しいもんですね…」

「びりびり？」

上条の言う単語に二人の常盤台生は小首をかしげる。恐らく上条は茶髪の常盤台生のことを言っているのだろう。どうも六月くらいに不良に絡まれてるのを上条が助けに行つたが、なんか女子の方に逆ギレされて電撃を放たれたらしい。それで、上条は右手でそれを防いでから度々勝負を挑まれてる。

成程、確かに見習って欲しいと思うだろうな。

「ぐっ……ナメやがって……こうなったら」

ん？

オレの後ろで倒れていた不良の一人がポケットに手をつこつみ、刃物のようなものを取り出していた。

「この野郎、覚悟しやがれ！」

不良が一番近いオレを狙って襲いかかってきた。

「あっおい清は——」

上条が叫ぼうとしたのと同時に、オレは振り向きざまにナイフを避け、

「なっ——」

片手でナイフを持った方の手首を掴み、背後に回つてもう片方の手で不良の肩を抑え

る。

「刃物は洒落にならないだろ」

「クソツ！おい離せこの野——いだだだだ！」

抵抗してきたため、肩に添えた手をスライドして相手の肘へ移行。と同時にもう片方の手でつかんでいる相手の手首を手前に引き、相手の肘にプレッシャーをかける。そして、相手の動く方向と同じ方へ更に圧力をかけながらうつ伏せ状態にし、相手の首の後ろに左膝で体重をかけて拘束した。

「ちよっギブギブギブギブ！分かった！分かったから！」

降参の意思を示すように不良は手に持っていたナイフを捨てた。

「うひゃー相変わらずキヨポンの護身術半端ないぜよー」

「やっぱりキヨポン、中学に柔道かなにか習ってたんやないの？」

「ピアノと書道を少々だ」

「あれ？前は茶道って言ってなかったか？」

「……茶道もやっていたんだ」

「…キヨポンの秘密主義も相変わらずぜよ」

秘密主義とは大げさな。オレは他の奴より自分を語れる要素が少なすぎるだけだ。

「それよりさつきと風紀委員に連絡してくれ」

「それには及びませんの」

「ん？」

後ろを振り返ると、盾をモチーフにした風紀委員の腕章をつけたツインテールの常盤台生がいた。

「風紀委員ジキツシメントですの。常盤台生が不良に絡まれていると聞き駆けつけましたが……」

「あつ、白井しらいさん！」

「おや、貴女たちだったんですの」

どうやら白井という風紀委員は二人の知り合いの様だ。

二人は自分たちが不良に絡まれてるところをオレたちに助けられたことを説明してくれた。

「…成程。それでナイフで襲いかかってきたので拘束していると」

「わかってくれたか」

「はい。傷害事件ですが、正当防衛なので注意だけで済ませますの」

それを聞いて安心したように上条たちは胸を撫で下ろす。

「ところで貴方は？」

風紀委員がオレに話しかけてきた。

「貴方、お名前は？」

「…清原綾斗だ」

一応は名前を名乗る。

「学生で貴方ほどの護身術を持つ者はそういません。その能力を街の治安維持に役立てませんか？」

つまりオレは風紀委員にスカウトされてるということか。

なら……

「悪いが興味ない」

「……そうですの」

「もう行くぞ。もうすぐ完全下校時刻だからな」

そう言っつて不良たちを風紀委員に引き渡し、オレたちはその場から去った。

「いやーええ気分やわー。あの子たち、最後までお礼言っつとったなー」

「女の子が無事で本当によかったにやー」

「なあ清原…風紀委員にスカウトされてたみたいだが断つてよかったのか？」

男子寮までの帰り道、上条がさっきのことについて聞いてきた。

「あそこは完全志願制だから何の問題もない。それに生活指導以外に大抵の仕事は交通整理やら地域の美化運動やら地味な仕事をやらされるみたいだぞ」

「確かにそんなんで夏休み潰されたらたまつたもんじゃないぜよ」

「というかキヨポンが風紀委員の腕章つけてる姿あんま想像つかへんわー」

「清原一見人畜無害に見えるしな」

「こいつら好き勝手言いやがって。」

まあ、確かに風紀委員はオレの柄じゃない。

あそこを抜け出したといのに、この街でも雁字搦めになるのは御免だ。

この街は広い。

風紀委員に目を着けられるようなことをしなければまた会う事もないだろう。

この時のオレはそう思っていた。

あの事件に興味を示すまでは……

妙なめぐりあわせ

能力者には6つの格付がある。

- ・生徒の六割を占める、測定不能や効果が殆どない能力を所有する無能力者⁰
- ・スプーンを曲げる程度の、日常では殆ど役に立たないレベルの能力を所有する低能力者¹

・低能力者と大差ない出力の能力を所有する異能力者²

- ・能力的にはエリート扱いされ始める、日常生活で役に立つほどの能力を所有する強能力者³

・学園都市外部の科学技術では到底再現不可能な超常現象を実現でき、戦闘面においては軍隊で価値があるほどの能力を所有する大能力者⁴

・単独で軍隊と戦えるほどの能力を所有する超能力者⁵

食物連鎖の生態系ピラミッドのごとく、ランクが上がるにつれて該当する能力者の数が減っていき、頂点に立つレベル5は全学生約180万人の内7人しかない希少な存在だ。

そのため学園都市中を歩いても遭遇する確率は極めて低いのだが……

「あつアンタ！」

「げっ」

行きつけのファミレスで注文をまっていたとき、そのレベル5の一人と出くわしてしまった。

彼女と最初に会ったのは数週間前のこと

「不幸だあーーーーー！」

その日の授業も終わり、ダラダラと、街を歩いていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。声のする方を見ればそこにはスーパリーの袋を地面に落とし、この世の終わりを見たような顔をする悪友、上条当麻がいた。

「何やってるんだ上条」

「あつ清原！聞いてくれよ！放課後急いで手に入れた特売セールのお卵が地面に落ちてグシャグシャに！」

上条が手に持っている卵パックの中では、卵の殻や卵白や卵黄やらがぐちゃぐちゃに

なつて無惨なものになつていた。

「……相変わらざるの不幸っぷりだな。はあ……後でオレのを分けてやる」

「す、スマン。この埋め合わせはいつかする」

「それはそうと……お前、今日は掃除当番だったんじゃない？」

「ぎくっ」

「……吹寄にまたどやされるぞ」

「う……」

「あー！アンタ！」

甲高い声が聞こえ、オレと上条はそちらを向く。そこにはお嬢様校である常盤台中学の制服を着た茶色い髪の少女がオレたち……というか上条を睨んでいた。

「あつ、ビリビリ中学生」

びりびり？

「ビリビリ言うな！私の名前は御坂美琴みさかみこと！今日こそ決着つけてやるんだから！」

「なんだ上条。知り合いか？」

「ああ。前にこいつがスキルアウトに絡まれていた所を助けに入ったんだけどな……なんかぶちぎれて電撃放つてきたのを俺の右手で打ち消してやったらんか目を着けられたんだよ」

「どうせいつもみたいにし礼なこと言ったんだろ？」

「なんで上条さんが悪いみたいになってるんだよ!？」

どうやらあのお嬢様は能力者としてのプライドを傷つけられたとして上条を目の敵にしているようだ。それにしてもこの二人かなりフランクな関係なんじゃないだろうか？ 軽口を叩き合っているように見えるし。

「……もしかしてオレ邪魔か？」

「そうよ」

……うん。関わるべきじゃないな。

「そうか……じゃあ、オレはこれで」

「いやいやいや！なぜここで立ち去ろうとするんですかね清原さん!？」

「いや、だってオレには関係ないし」

「そりやそうですけど!？」

面倒臭くなったので、思わず投げやりな態度を取ってしまったのが、運の尽きだった。

「はあ……痴話喧嘩に巻き込まないでくれ」

その一言は割と地雷だった。ピリッ……と、目の前のお嬢様から殺意が放たれる。それも、紛れもない大きなものだ。

自身に危機が近づいている事をすぐに察し、それは上条の方も同じだった。

「誰と、誰が痴話喧嘩だコルアアアアアツツ!!?」

直後、放たれた電撃に、オレは反射的に後方にジャンプして避けた。上条の方は右手で電気を打ち消した。

「……は?」

「つぶねえ……完全に死ぬ威力だったんだけど……」

「お前はその右手があるから大丈夫だろ」

お嬢様は上条が電撃を打ち消したのよりも、オレが難なく避けたことに驚いてるようだ。

さて、こつちに飛び火する前にさっさとお邪魔虫は退散するか。

「じゃ上条、後はがんばれ」

「あつ、ちよつ、清原さん!」

「ちよつ、ちよつと茶髪のアンタ!逃げるんじゃないわよ!」

二人のお呼び止める声を背に、オレはその場を走り去った。

まさか電撃を放った常盤台生がレベル5の第三位で、電気を操る『電撃使い』エレクトロマスターだとは思いましなかった。

あの後あの常盤台生とは遭遇することはないと（上条が人身御供となることで）思っていたが現実是非情で……

「あ、あんたは！」

「……違います、人違いです」

「そんなわけあるか！」

他人を装つても誤魔化すことはできなかった。どうやら影の薄いオレの顔を覚えていたようだ。なぜこんな時に（生贄として）頼りになる上条がいないんだ。

今日の放課後は補習の説明会で、上条、土御門、青髪補習組はいない。

「どうしましたのお姉さまそんなに大声を出して、って貴方は……」

短髪の常盤台生には3人の連れがおり、そのうち二人は柵川中学校の制服を着た女子学生、もう一人は一昨日の風紀委員の常盤台生がいた。

「あれ？この人って白井さんが調べてくれて言ってた人ですよね」

「え？え？御坂さんと白井さんだけじゃなく初春も知ってる人？」

花飾りを頭に乗せる黒髪ショートヘアの大人しそうな少女と白梅の花を模した髪飾りをつけている黒髪セミロングの明るそうな少女がこつちを見てくる。

「取り敢えず自己紹介を。わたくしは一七七支部で風紀委員を勤めています常盤台中学

1年、白井黒子しらいくろこですの」

「……同じく常盤台中学2年、御坂美琴みさかみことよ」

「し、白井さんと同じ一七七支部所属風紀委員で、柵川中学1年、初春飾利ういはるかざりです」

「同じく柵川中学1年、初春の友達の佐天涙子さてんるいこです」

自己紹介されたのだからこっちもしなくちやな

「……とある高校の1年、清原綾斗だ」

「なんであんたは学校名言わないのよ？」

「守秘義務ってやつだ」

だつて教えたなら校門の前で待ち伏せされそうだし……

「それより突つ立つてたら店員の邪魔になるぞ」

「それもそうですわね。さ、お姉さま、佐天さん、初春、席に座りましょうか」

「はーい」

「う、うん」

白井に言われ、御坂たちが移動する。

つて隣のテーブル席に座るのかよ。

「それでそれで、三人とはどういう知り合いなんですか？」

1人だけ蚊帳の外になっていた黒髪セミロングの少女、佐天がオレに声をかけてき

た。

「常盤台生の二人とは顔を合わせた程度で名前は今知ったぞ」

「じゃあどういふ経緯で顔を合わせたんですか?」

この佐天という女子中学生、グイグイ来るな。

「二昨日わたくしのクラスメイトが不良に絡まれていたところを助けて下さった方たちの一人ですの」

「へえー、そんなことがあつたんですね」

白井が代わりにオレと会つた時の経緯を説明してくれた。

「……で、なんでその後オレのバンクかプロフィールを調べたんだ?」

「えっ!? わ、わたくし……なにも言つてませんわよ!」

「いや、さつきその初春つて子が『この人つて白井さんが調べてくれつて言つてた人ですよね』つて言つてただろ」

「はわあつ!」

しまつたと言わんばかりに、花飾りの少女、初春が両手で自身の口を隠す。

「ひよつとして風紀委員で情報収集担当、もといハッカーか?」

「ど、どうしてわかつたんですか!?! はっ!」

「うゝいゝはゝゝゝ!」

「はわわわ、す、すみません白井さん！」

こころもかまかけに引つかかるとは。

「す、すごいですよ清原さん！名探偵コロンですか!？」

「いや、たまたま耳に入った情報からなんとなく思いついただけだが」というかそんな名推理してないだろ。

「……で、なんでそんなことしたんだ？」

口を滑らせた同僚の頬をつねっている白井に問いかけると、こほんと軽く咳払いをした。

「ご不快な思いをさせてしまったならお詫びします。実は一昨日貴方と対面したとき、只者ではないとわたくしの直感が告げておりましたので確認を、と」

野生の勘みたいなやつか。

「なにか期待させて悪いが、オレはどこにでもいるレベル0の平凡な高校生だ。調べてもなにも出てこなかっただろ？」

「確かにそうですが……」

そもそもオレのことは出てくるわけがない。学園都市に来る前のことなんか特に。

「……平凡な高校生があたしの電撃を避けられるわけないでしょ」

「ん？なにかおっしやいましたかお姉さま？」

「ううん、なにも」

御坂の小さな呟きは三人には聞こえなかったようだ。

「ところで、つかぬことをお聞きしますが清原さん」

「なんだ？」

佐天が本題と言わんばかりに目を輝かせて聞いてきた。

「御坂さんとはどういう経緯で知り合ったんですか？」

「ぶふう!?ゴホツゴホツ！」

「お姉さま!？」

御坂本人は予想外の質問だったらしく、飲んでいたお冷でむせた。

「…なんでそんなこと聞くんだ？」

「いやあ一応常盤台のお嬢様でレベル5の御坂さんと顔見知りになる機会なんてそうないですから気になって。あたしの場合には初春と白井さん経由で知り合ったんですけど」

この佐天という女子中学生、好奇心旺盛だな。

「つーえ、えつとー!たまたま会って……その…」

御坂が説明に困っている。そりゃ女友達に男子高校生をつけまわして勝負を挑んでる（しかも一回も勝っていない）話の部分は説明しづらいか。

「ここは助け舟をだすか。」

「あー…前にオレの知り合いがコイツに失礼なことを言って怒らせちゃったみたいだな。喧嘩してるところにたまたま居合わせてただけだ」

「ちよっ!」

?は言っていない。ただ少し説明部分を省いただけだ。

「へえーそんなことが。御坂さん、ちゃんとその人と仲直りしないとダメですよ?」

「えっ!?!」

「そうですよ御坂さん。そういうのを長くしていると逆に丸く収まるタイミングが無くなっちゃいますからね」

今の説明で御坂が初春と佐天に注意されでした。

「う、うん。そ、そうね…仲直りはちゃんとしないとね」

明るい声でそう言いつつ、御坂は流し目でオレのことをキツと睨んできた。

誤魔化しておいたから逆に感謝してほしいくらいだ。

「お待たせしましたー」

御坂からの視線に気づかないふりをしつつ、店員が持ってきた食事でありついたのであった。

今日の授業を終え、オレと上条はブラブラと道を歩いていた。

「いやあ、あと2日もすれば夏休みか〜」

「上条たちは補習だかな」

「ちよつ、やめてくれよ清原。人が現実逃避してたのに」

現実逃避しても補習は確定しているというのに。

「ま、現実逃避はほどほどにしておかないと宿題をやらないまま夏休みが終わってしま
うぞ〜」

「くそ！頭が良いやつ余裕ってものなのかー!？」

「要領がいいと言え」

ちなみにオレはもう夏休みの宿題に取り組んでいる。

「ん……」

「どうした？」

道端で上条が急に立ち止まる。何やら一点を見つめている様子なので、オレもその目線の先を追った。するとそこにはピンクのバッグを下げた小学生低学年ほどの小さな少女が、道の真ん中で右往左往していた。

「どうしたんだ？迷子か？」

上条が少女の方へ近づいていった。

「……………え？」

突然上条に話しかけられて驚いたのか、少女は少しきよんとした顔をしている。

「いや、道に迷ったなら案内してやろうと思って」

相変わらずのお人好しだな。

「……………もしかして、なんぼってやつ？」

「はあ?」

少女の口にした意外過ぎる言葉に口を開ける上条。

「上条……………お前本当はそれ目的だったのか」

まじ引くな。

「いやいやこんな小さい子をナンパなんてしたら、完全に口の字が付く人になっちゃうじゃねえか!!」

慌てて否定する上条だが、慌てている分余計に怪しく見えた。

なんとなくクラスメイトの青髪ピアスを思い浮かべてしまった。もし上条があいつと同レベルなら交友関係を改めないといけないな。

「まあ上条の変態疑惑は置いといて」

「おい!」

「それで、どうして道の真ん中で立ち止まっていたんだ？」

上条の代わりにオレが聞いてみる。

「えつとね……セブンミストってお店に行きたいんだけど道が分からなくて」

「一人でか？」

「うん」

セブンミスト。

それは学園都市内でも最近よく話題に上がる店舗だ。

主に女子中学生から高校生の間で流行し、名を売り始めている衣服を販売する、衣服販売の店舗が複合されたショッピングモールである。

「ふーん、じゃあそこまで案内してやろうか？」

「いいの？」

「ああ、どうせ完全下校時刻まで暇だしな。清原はどうする？」

「……まあ、オレも新しい服を見てみたいな」

「おしつ、そう来なくっちゃな」

「やったー！」

少女に洋服店まで案内してあげる事になったオレたちは共に通りを歩く。

歩くこと20分。目的地であるセブンミストへと到着する。そして店内の洋服店

に向かった。

「連れて来てくれてありがとうお兄ちゃんたち。私、行って来るねー」

「おう。転ぶなよー」

「うん！」

洋服店が見えると少女は一人で先に走って行く。

「これで一安心だな……くん？」

「どうした？」

「いやあそこにいるのって……」

上条が何かに気づく。上条が指を指した方向を見ると、そこには鏡の前で服のサイズが合うかどうか確認している御坂がいた。

「何やってんだビリビリ?」

「っ!?!」

上条が話しかけると御坂はビクツと肩を震わせ、慌てて服を後ろに隠した。

「な、何であんたたちがここににいるのよ!?!」

「何でって……いちゃ悪いのかよ」

「お兄ちゃん」

そこに服を持った少女が戻って来た。

「あ！トキワダイのお姉ちゃんだ」

「え？かなちゃん」

どうやら初対面ではないらしい。すごい偶然だな。

少女を見て、思い出すように言った御坂は、こちらに視線を戻した。

「え、どっちの妹？」

「違う違う。洋服店探してるっていうから、案内してきただけだ」

御坂の問いに、上条が答える。

「あのねー、おにーちゃんたちに連れてきてもらったんだー。私もテレビの人みたいに
お洋服でおしゃれするんだもん」

「そうなんだー。今でもじゆうぶんオシヤレで可愛いわよー」

「…短パンの誰かさんと違ってな」

上条、余計なことを口に出すなよ。

「なによやる気!?!だったら何時ぞやの決着を今ここで——」

「待て、こんなところで能力使うな。やるなら上条と外に出ろ」

「おい!?!なにちゃっかり上条さん差し出してんだよ!?!」

だつてオレには関係ないし。

「……あ、おにーちゃん。次あつち見たい!」

「あ、おう、分かった」

上条の服の裾を引つ張り、少女は催促した。

さて、オレもこの場から退散を……

「ちよつと待ちなさいよ」

「回れ右をしようとしたとき、後ろから御坂に肩を掴まれる。それにしても凄くドスの効いた声だな。」

「そういえば、あんたにちよつと話があつたのよね」

「……オレにはないがな」

「あれー？かっこいい方のお兄ちゃんはどうしたのー？」

「おう、あいつはビリビリとお話があるみたいだから先に行つてような」

上条の奴、売られる前にオレを売つたな。

「あれ？清原さんじゃないですか」

「こんなところで会うなんて奇遇ですね」

上条たちが離れた後、入れ替わるように佐天と初春がやってきた。すぐに御坂は手を離す。

「お前たちも買い物か？」

「はい。そう言う清原さんも？」

「まあ成り行き上な…連れにはついさつき見捨てられたが」

「え？じゃあ今ボツチなんですか？」

「ボツチ言うな」

相手にストレートに言われるとかなりくるな。

「あつ、よかつたら一緒に回りませんか？こうして会ったのも何かの縁ですし」

「え？」

突然佐天からそんな提案がされた。

「いやいや、中学生女子たちと男子高校生一人つて肩身が狭いだろ」

「えー？そこは喜ぶとこじゃないですか？」

「喜ぶべきなのか？」

土御門や青髪なら泣いて喜びそうだがな。

「悪いが、連れがいる」

「そうですか。あつ、ひよつとして彼女さんですか？」

「いやクラスメイトの男子だ。しばらくいるだろうから途中で会うかもな」

それだけ言つてその場から去る。流石の御坂も二人の前で手は出せないだろう。

何店舗か回ったが上条たちとまだ合流できていない。

しばらく歩いていると足元近くに、生徒手帳らしきものが一つ落ちていたのを見つけた。

拾って確認してみると、『枝垂桜学園』と学校名が記されていた。おそらく店内にいるその学生が落としたのだろう。

辺りを見渡せば、何やら床に目線を向けながら歩いている制服姿の少女がいた。多分少女のものだろうと考え、少女の方へ近づいて声をかける。

「なあ」

「ひゃい!？」

後ろから声をかけたためか、少女は跳び上がった。しかも同時になんか変な声まで出してしまう始末だ。少女がゆっくり振り返る。

「わ、わわわわたくしになにか?」

「この生徒手帳、お前のか?」

「え?」

長い黒髪をツーサイドアップにした上品そうな少女にさつき拾った生徒手帳を見せる。

「あ、そうです！それ、わたくしのです!!」

生徒手帳を受け取ると、少女はしっかりと胸に抱き安堵のため息を漏らした。

……幼い顔立ちしてるのに、デカいな。

「あ、ああありがとうございませう！わざわざ届けて下さって」

「たまたま拾ったからな」

さつさと、上条たちを探るか。

「それより、この辺で黒髪ツンツンウニ頭の男子高校生と黄色い鞆を持った小学生くらいの女の子を見なかったか？」

「いいいいえ、わたくしずつと手帳を探していたので……も、ももうしわけありません！」

「いや別に責めていないが」

落とし物を探すのに夢中になっていたのだから仕方ないし、広い建物だからもしかしたら遭遇しなかったのかもしれない。頭を下げる少女を責める要素はどこにもない。

責めるとすればオレを見捨ててさつさと行った薄情者のウニだけだ。

「お前はなにも悪くないから気にするな」

それじゃあと行って既に踵をそうとした時、突然館内放送が流れだした。

『お客様にご連絡いたします。誠に申し訳ございませんが、店内で電気機器の故障が発

生したため、誠に勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます」

店内の放送機器から、繰り返し同じ文言が流れる。

遠回しに店から出ると言っている。おそらくパニック誘発を防ぐべく、緊急時用にあらかじめ用意されていた文句だろう。

遠くで初春たちが客を外へと誘導している。その表情にはわずかだが焦りがあつた。

そういえばここ最近連続爆破事件が起こっていたな。

能力者が起こしている事件とされていて、原因はアルミを基点として重力子の速度を急激に増加させ、それを一気に周囲に撒き散らす事で起こる爆発である。ようは『アルミを爆弾に変える』能力といったところか。最近ではアルミ製のスプーンをぬいぐるみや子供用の鞆といった警戒心を削ぐ物に仕込み爆弾とするため、非常に悪質なものとなつてきている。

既に九人の風紀委員が大怪我を負っており、学校のホームルームで、不審な人物又は物を見かけたら離れ、近くのアンチスキルもしくは風紀委員は連絡すること、と注意勧告がされるほど深刻になっている。

ということとは、今度はここが爆破されるということか。

「あつ、かつ、いい方のお兄ちゃんだー」

後ろから声をかけられて振り返ると、上条と一緒にいたはずの鞆の少女が駆け寄ってきた。その手に、見知らぬカエルの人形を持って。

「あれー？こつちのお姉ちゃんは誰ー？お兄ちゃんのお姉ちゃん？」

「か、かかつかかかー!？」

「いや、さつき落とし物を拾ってやったただけだ。あのツンツンウニ頭はどうした？」

「うーんとね。ちよつとはぐれちゃったんだ」

なにやってるんだよウニ頭。まあ、はぐれてしまったものは仕方ない。

「それで、手に持つてるその人形はなんだ？」

「さつきね、眼鏡をかけたお兄ちゃんがね、この人形をじゃつじめんとのお姉ちゃんに渡して欲しいって！」

眼鏡をかけたお兄ちゃん……ね。

「ちよつと見せて貰ってもいいか？」

「?うん」

「か……か……かー……かー……かー……」

「カラスか」

顔を真っ赤にし、湯気を放ちながらずっとフリーズしている制服姿の少女を尻目に、鞆の少女から人形をもらい調べてみる。すると、背中の部分に最近できたばかりの縫い

目があった。縫い目を引っ張って中を覗いてみると、そこにはアルミ製のスプーンが一つ。

どうやらオレが当たりを引いてしまったらしい。

◇ ◆ ◇

数分が経ち、一階には避難誘導を行った初春と離れたところで鞆の少女、カナを探している上条と御坂以外、誰も人の影が見当たらなかった。

『初春！初春！聞きなさい！』

『今、全員避難したかどうか確認を……『今すぐそこを離れなさい！』』

初春は黒子からの電話に出る。黒子の口調は慌てており、緊急事態であるということが伺える。

『過去9件の事件の全てで風紀委員が負傷していますの！観測地点周辺にいる風紀委員！ 今回のターゲットはあなたですよ！初春！』

「っ!？」

黒子から犯人の狙いが自分であると知って初春は衝撃を受ける。

その時だった

「お姉ちゃん。眼鏡をかけたお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡してくれって」

カエルの人形を持ったカナが笑顔で初春に向かって行く。

カナの大きな声を聞いて上条と御坂は無事だったと知り安堵する。一方で初春はカエルの人形を見て何かに気づき、カナに飛びついた。初春が飛びついたことでカナの持っていたカエルの人形が落ちる。

「逃げて下さい！ あれが爆弾です！」

「っ!?」

初春が叫んだ瞬間とカエルの人形がメキメキと不気味な音を立てながら、少しずつ形を歪めていく。

（私の超電磁砲で！）

咄嗟に御坂はポケットからコインを取り出して、カエルの人形ごと破壊することを決める。

が、

（しまった！マズった！）

御坂は手を滑らせてしまい、コインを落としてしまう。

（間に合わない……!?!）

カエルの人形が限界まで収縮してしまい、御坂がもうダメだと思った瞬間、
パン！

風船が割れたような甲高い音が鳴って弾けた。

「は？」

「え？あれ？爆発しない？」

人形が破裂しただけで轟音や爆風がなにも起きず、三人は間拔けな声を思わず出して
しまう。

「もしかして不発？」

「そ、そんなはずは！既に何回も爆発のデモンストレーションをやっておいて今更失敗
なんて……」

「ねーじゃっじめんとのお姉ちゃん。さっきの音なんだったのー？」

御坂と初春が状況を呑み込めていないなか、上条のポケットから携帯の着信音が流れ
る。

「あつ、清原からメールだ。なんだこれ？」

「ん？どうしたのよ？」

上条が携帯の画面を見て眉をしかめており、変に思った御坂が横から画面を覗く。

「なにになに……『外に出てみたら一人様子がおかしい人物を見つけた。最近の爆破事件

の犯人かもしれない。写真を下に添付したから近くにいる風紀委員かミサカに伝えてくれ』ですって?」

メールの下部分を見ていくと、悔しそうに顔を大きく歪めた眼鏡の男子学生の横顔の写真があった。

「カナちゃん、カナちゃんに人形を渡した人ってこの人?」

「うん!この眼鏡のお兄ちゃんだよ!」

御坂がカナに確認を取るとビンゴだった。

「私、犯人を捕まえてくるわ!!」

「み、御坂さん!?!」

初春の制止も聞かず御坂は犯人を追って行ってしまふ。

「あ、あれ?上条さん、知らない雰囲気ですか?」

せつかく来たのに大した活躍もなかった上条当麻であった。

◇ ◆

連続爆破事件の犯人が警備員の車で連行された。

その様子を遠くで眺めていたオレは踵を返してその場から移動する。

「あつ、かつこいい方のお兄ちゃん!」

店から出てきた鞆の少女がオレに向かってきた。その後について初春と佐天、白井、

御坂がやって来る。

「怪我はないか？」

「うん！なんかお人形さんが破裂したけど全然大丈夫だったよ」

「そうか」

そりゃあ、爆発の威力をオレは最小限にまで押しとどめたからな。

これまでの爆破で風紀委員が相次いで入院レベルの重傷を負ったという情報と、鞆の少女に初春へ爆弾を間近に持ってこさせようとしたことから、標的が風紀委員であることはわかった。

危ないためすぐに処分してもよかったが、起こるはずの事象が起こらないことに風紀委員の注意がむいてしまい、爆弾魔は野放しになってしまう。

爆発の威力を考えるに、自身を巻き込んでしまう可能性もある為に安全な場所で起爆するだろう。そうなると、避難誘導に従って外に出た人ごみの中に紛れているだろう。なら顔も分からない犯人をあぶりだすためにやれる方法は一つ、相手の虚をつくことだ。

途中までは上手くいっていたのに、最後の最後に予想が大きく外れてしまえば動揺を隠せないだろう。

カエルの人形に手を加えた後、人形を鞆の少女に返して「初春が仕事を終えてから渡

せ」と誘導し、外に出てから周囲の人ごみの様子を観察するだけ。

鞆の少女を探しているであろう上条と御坂を見かけたため、発見したら情報を上条の携帯を通して風紀委員と御坂に伝えることも作戦に加えた。

そして結果は予想通り——セブンスミスは無傷のまま、誰も傷つけずに爆弾の爆発を防ぐことに成功した。

「いやーそれにしても清原さんが犯人を見つけちゃうなんて、やっぱり名探偵ですか？」
「たまたまだ。不審な人物を見かけたら通報しろってホームルームで言われてたからな。まさか本当に爆弾魔だったとは」

「えー？本当ですかー？」

佐天はどんだけオレを名探偵にしたいんだ？

「そういえばなんで風紀委員に直接通報しなかったんですか？」

「写真を送つても対応に時間がかかるだろうし、決定打にかけていたからな。現場にいた初春に伝えようにもメアド知らないし」

「た、確かに」

想定していた質問だったため、用意していた答えを初春に伝える。

「そういえばなんで今回だけ不発に終わったんでしょう？」

「それは追々調べればいいですわ。それより、今回犯人逮捕にご協力いただき誠にあり

がとうございます」

上品にお辞儀をする白井。

「協力とは大袈裟だな」

オレは礼を言われるようなことをしていない。

痺れを切らしたように鞆の少女がオレのズボンを引つ張つてきた。

「ねーねーさつきまで一緒にいた彼女さんはどうしたのー？」

「ん？あいつのことか？あいつなら」

「え？さつき連れは男子って言いませんでしたっけ？」

「彼女じゃない。店で生徒手帳を落としたのを拾ってやっただけでそれとは初対面だ。外に出た後すぐに別れた」

「あのねーそのお姉ちゃんおっぱいがすごく大きかったんだー」

「へー？清原さんって巨乳好き？」

「ちよつと待て。なんか勘違いしているみたいだから話し合おう」

鞆の少女が余計な一言を言ったおかげで女子勢の視線が軽蔑の色に変わった。

オレは誤解を解くのに時間を弄し、先に寮に戻っていた上条をシメる頃には完全下校時刻は過ぎていたのだった。

夏休み初日が良い日とは限らない

「ごめんくださいーい！清原さーん！」

扉の外から激しいノックの音と共に聞き覚えのある声が聞こえてくる。その音でオレは目を覚ました。

連続虚空爆破事件が終わってから2日後。今日から夏休みが始まる。

「清原さーん！清原綾斗さーん！頼むから起きてくださいーい！」

学校に登校する必要が無くなったことを記念し、ゆつくり寝ようと思っていたのに、目覚めが同級生男子のモーニングコールとは最悪の目覚めだ。

まだハッキリとしない意識のまままで重たい体を引き摺りながら玄関まで向かう。玄関の扉を開くと、そこには慌てた様子の上条が立っていた。

「よかった。やっと起きたか！」

「どうした？お前今日補習じゃなかったのか？」

「補習があるとかないとか、それどころじゃないんだって。早くこっちに来てくれ！」

何やら慌てた様子の上条。出席日数やらなんやらが危うい上条だが、理由もなく学校をサボるような人間ではない。多分、恐らく、きつと。少なくとも積極的にサボろうと

は思っていないはずだ。そんな上条が今ここにいるということは、何かあったに違いない。

「……わかった」

「こつちだ！」

上条に着いていくとすぐ隣の部屋へと案内される。

「なんだこれ……」

上条の部屋はめちゃくちゃ暑かった。冷房も扇風機も働かせていないのだろうか。さらに臭い。何かが腐ったような臭いだ。

「……その辺の文句はビリビリに言ってくれ」

「……お前またあいつと喧嘩したのか」

上条の部屋がこんなに暑いのは御坂とのいざこざで電気系統がイカれたのが原因だろう。臭いのも冷蔵庫の機能が失われたことにより、中の食材が……といった感じだ。隣のオレの部屋は何ともなかったというのに、相変わらずの不幸さといったところだ。御坂は間接的に上条に勝ったと言っても過言ではないのではなからうか。

それはさておき、だ。

部屋の中へと入るとそこには白い修道服を着た少女が上条のベッドに座っていた。

年齢は14歳といったところだろうか。幼い顔立ち、長い銀髪、そして緑色の瞳。一

度見たら忘れられないような印象的な容姿である。

「上条お前、部屋に連れ込んだのか？」

「違うわ！ 実は……朝、ついさっき気づいたらベランダに引つかかっていたんだ」

「なに言ってるんだお前？」

ベランダに引つかかっていた？ ここは7階だぞ？ 人が引つかかかってる訳が無い。確かにコイツは賢くはないが、決しておかしな頭をしているって訳じゃなかったのに

「……じゃ、そういうことで」

とりあえずなんか面倒な事になりそうなので、オレは踵を返し、自身の部屋に戻ろうとする。そんなオレの服を上条が掴み、行かせまいとする。

「ほ、本当なんだって！ そりゃ俺だってまだ信じられないですよ!? でも本当なんだ
！」

少女がベランダに気づいたら引つかかっていた。つくならつくにしてももつとマシな嘘をつけと言いたいところだが、どうやら本当らしい。嘘をついているようには思えない様子だ。

「それでとりあえずこういう事に縁がありそうな奴に声を掛けようと思ったんだ」

「……オレに声を掛けようとした理由に関しては後でじっくりと聞かせて貰うが、残念ながら何も知らない」

「そうか、じゃあ本人に聞くしかないか」

「最初からそうすればいいだろ」

「いやあ、ちよつとパニックになつてて。それにいざという時にお前を巻き込んだ方が良いと思つて」

「その件に関して、あとでゆっくり話し合おうか」

内容しだいではコイツとの交友は改めた方がいいな。

「……と、とにかく聞いてみよう。なあお前、何でウチの部屋のベランダに干されてたわけ？」

オレと上条はシスターへと視線を向ける。

「それはね……」

と、シスターが言い掛けた時だった。ぐうぐうと、腹が鳴った。音の源はシスターの腹部からである。

「それよりもお腹が空いてたんだよ。ご飯を振舞つてくれると嬉しいな」

はあ……。

上条の部屋にある食べ物が全滅していたのもあり、オレの部屋へと移動した。

「ご馳走してくれてありがとうなんだよ。あやとはいい人なんだね」

「食べさせなかったら外に出て監禁されてたって言うぞと脅迫しておいてよく言う」

昨日の残りをペロリと平らげたシスター。

「でさー、何だつてお前はペランダに干してあつた訳？」

何故か自分もオレの部屋で朝食を食べた上条は再びシスターに問い掛ける。

「落ちたんだよ。本当は屋上から屋上へ飛び移るつもりだったんだけど」

「飛び移る？」

この辺りは学生寮が建ち並ぶ一角だ。オレたちが暮らすこの八階建ての寮と同じようなビルがずらつと並んでいて、ペランダから見れば分かる通りビルとビルの隙間は二メートルぐらいしかない。確かに、走り幅跳びの要領で屋上から屋上へと飛び移ることも出来るだろう。しかしだ、

「八階だぜ？ 一歩間違えれば地獄行きじゃねーか」

上条の言葉通り、誤つて落下してしまった場合はタダでは済まないだろう。

「うん、自殺者にはお墓も立てられないもんね」

とインデックスは良く分からない事を言つて、

「仕方が無かつたんだよ。追われてたからね」

「追われてた？」

「そんな事より自己紹介しなきゃね！私の名前はね、インデックスって言うんだよ？」
は？

「禁書目録、正式名は『index—librorum—prohibitorum』
だけど、みんなはそう呼んでるんだよ」

「それ、本当に名前か？あきららかに偽名じゃねえか」

上条が疑わしそうに聞く。

なにかのコードネームか？

「……それで、お前は誰に追われているんだ？」

インデックスという名前が本名だとは思えないが、話を進めた方が先決だ。

「うん……何だろうね？薔薇十字か黄金夜明か。その手の集団だとは思うんだけど、
前までは分からないかも。……連中、名前に意味を見出すような人達じゃないから」

「連中？」

今度は上条が神妙に聞く。連中ということは相手は集団で、組織だ。うん、と追われ
ているインデックスは冷静に、

「魔術結社だよ」

これはまた意外な答えだな。

「まじゆつつて……、はあ、なんじゃそりやあ!!ありえねえっ!!」

「あれ？日本語がおかしかった？魔術だよ。魔術結社」

当のインデックスは、上条の予想外の反応に戸惑っているようだ。

「それって得体の知れない新興宗教が『教祖サマを信じない人には天罰が下るのでせう』とか言ってお薬飲ませて洗脳したりする危ない機関の事？いやいろんな意味で危険なんだが」

「……そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

「あー」

「……そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

どうにも胡散臭いものを見る目になった上条とそれを察知したインデックス。

「この街で超能力なんてものを研究してるんだから、魔術なんてのがあっても不思議じゃないだろ」

オレがあそこにいた時に『教材』の一つにそう言った力を使う者たちに関するものがあつた。

「そんな訳ないだろ？」

「むー！魔術はあるもん！」

オレの言葉をあり得ないと一蹴する上条。あつさりと魔術を否定した彼に対してインデックスもムキになって主張する。そんなインデックスに上条は怠そうに応える。

「——ゴメン、無理だ。魔術は無理だよ。俺も発火能力とか透視能力とか色々『異能力』は知っているけど、魔術は無理だ」

「……………」

インデックスは小さく首を傾げた。

「学園都市じゃ超能力なんて珍しくもねーんだ。人間の脳なんざ静脈にエスペリン打って首に電極貼り付けて、イヤホンでリズム刻めば誰だって回路開いて『開発』できちまう。一切適切が科学で説明できちまうんじや誰だつて認めて当然だろ？」

「……………よくわかんない」

「ようするに神話やオカルトの類は非科学的だから信じられないって言いたいんだよコイツは」

オレが上条の言葉を代弁すると、インデックスはふてくされた様子を見せる。

「超能力は信じるっていうのに魔術は信じないなんて変な話……ねえあやと、君は私の言ってること信じてくれるよね？」

「オレに振るなよ……………」

この街は学園都市。超能力を科学で作る街だ。だからこそ『魔法』『魔術』などのオカルトは信じられていない。

あるいは信じないように刷り込まれているのか。

「……まあ、論より証拠だ。お前がそこまで言うんだからオレたちを納得させる根拠を示してくればいいのかもな」

「そうだよ。そもそも魔術って何だよ？何ならいつちよ見せてみるよ」

信じて欲しいなら見せてみると気怠そうに要求する上条。するとインデックスの顔は少し曇る。

「……私には魔力が無いから使えないの」

「使えないんじや魔術なんかあるかどうか分かんないだろうが！」

「あるもん！魔術はあるもん！」

平行線を辿っているな。

「……それで、その魔術結社に追われているのに心当たりはあるか？」

「清原、お前……」

「口を閉じてろ上条。話が全然進まない」

「うっ……」

「私が追われていた理由はね、私が持つてる10万3000冊の魔導書が狙いだと思う」

「魔導書？10万3000冊？」

「うん。エイボンの書、ソロモンの小さな鍵、死者の書……代表的なのはこういうのだけ」

「……清原さんや、上条さんはもう頭がパンクしそうなんですが」

上条が口を開くが無視する。

「神話にも登場する本だな……それで、その本はどこにあるんだ？」

10万冊といったら図書館一つ丸々レベルの数だ。しかし、どう見てもインデックスがそんな数の本を持っているようには思えない。どうか一冊だつて持つていない。

「どっかの倉庫の鍵でも持つてゐるって意味なのか？」

上条が言う。確かにそれなら納得出来る。しかし、インデックスは「ううん」と首をふるふる横に振った。

「ちゃんと10万3000冊、一冊残らず持つてきてるよ？」

「は？」

オレと上条の声が重なる。そして上条は眉をひそめて、

「バカには見えない本とか言うんじゃねーだろーな？」

「バカじゃなくても見えないよ。勝手に見られると意味がないもの」

まあそりやそうだ。秘密の情報が誰かに見られた時点で秘密じゃなくなる。

本は本でも紙媒体のものじゃないということか？

「……まだ信じていないみたいだね。そんなに超能力つて素晴らしいの？　ちよつと特別な力を持つているからって、人を小馬鹿にしていいはずがないんだよ」

「ま、そりやそーだわな」

上条は小さくため息をつきながら言う。

「確かにインデックスの言う通り、超能力が使えるからって人の上に立てるって考え方は違う。こんな一発芸を持っていても人の上に立てるって考え方は間違ってる。けど、この街に住んでる人間にとっては能力を持つてゐる事が一個の心の支えになってから、そこら辺は大目に見て欲しいかな。ってか俺達も能力者の一人なんだけど」

「そうだよバカ、ふん。頭の中いじくり回さなくったってスプーンぐらい手で曲げられるもん。だいたいとうま達にだって何ができるって言うのさ」

確かに、インデックスから見れば超能力だつて上条から見ると魔法と同じかもしれない。上条が魔法を信じられないように、インデックスも超能力を信じられない。

「……えつと。何がって言うか、俺の能力はちよーつと説明しにくいと言うか」

上条は少し戸惑う。上条の右手の力について誰かに説明することは滅多にない。

「俺のこの右手……幻想殺してんだけど、この右手で触れた異能の力なら超電磁砲だろうが、多分神の奇跡だつて打ち消せません。はい」

「えー?」

「なんだその胡散臭い通販を見ているような目は」

「だつてー、神様の名前も知らない人にー、神様の奇跡だつて打ち消せませんとか言われて

もー」

驚くべき事にインデックスは小指で耳の穴をほじって鼻で笑った。

「ぐ……ムカつく……！こんなインチキ魔法少女に小馬鹿にされるとは……!!」

「インチキじゃないもん！」

「じゃあ何か見せてみるよ！それを右手でぶち抜きやあ、右手の事だつて信じるしかないよな!」

「良いもん！じゃあ見せてあげる！これ！この服！」

売り言葉に買い言葉。インデックスは立ち上がり、己の着ている修道服を上条に見せ付ける。

「これっ！この服！これは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだからっ！」

インデックスは両手を広げて自分が着ている白い修道服を強調してみせる。

「何だそれ。さつきから訳分かんない専門用語ばっかぶち込んで来やがって。意味分かんねーよ」

「むき……!!」

ただ主張しただけで上条が納得するはずもなく、軽くあしらわれるインデックス。遂にキレた彼女はオレの部屋の台所にダッシュ。そのまま柵を開けて包丁を取り出した。

「コレで私を刺せばわかるんだよ！」

などと自己主張の慎ましい胸を張って言った。ただし、包丁を渡しながら。それオレの包丁。

「うん、じゃあ刺してみる……ってなるか！アホかお前！少年院行きになるわ！」

「心配いらなんだよ！これはトリノ聖骸布をコピーしたものだから、強度は絶対なんだよ！物理、魔術を問わず全ての攻撃を受け流し、吸収しちゃうんだから!!」

「……つまりあれだ。それが本当に魔術で異能の力だってんなら、俺の右手が触れただけで木っ端微塵って訳だな？」

「君の力が本当な……ら……ね♪」

相手の主張は信じないのに自分の話が信じて貰えない事でムキになっている上条とインデックス。

「上等だ……らあぁっ!!そこまで言うならやってやろうじゃねえかあぁ!!」

遂に堪忍袋の尾が切れた上条はその右手をインデックスの着ている修道服に向けて伸ばす。

て、インデックスの話が本当なら上条の右手が触れた時点でとんでもないことになるな。

嫌な予感がしたオレは上条の右手がインデックスの肩に置かれる直前に後ろを向く。

パリーンとガラスの割れたような音とともに服が裂けるような音が発生し、

「ギャアアアア！」

「ギャアアアア！」

一人の少女と一人の少年の悲鳴が部屋に響いたが、オレは決して振り向かなかつた。もうこいつらオレの部屋から出て行ってほしい。

◇ ◆ ◇

上条が魔術証明の尊い犠牲となった後、インデックスに変わりの服（オレの寝巻）を着せ、上条共に部屋から追い出したオレは外を歩いていった。

本当に追手が来た時の緊急避難もあるが、長いようで短い夏休みを満喫するためだ。とはいえ外に出たのはいいものの、やる事がなくて暇だ。熱いしどこか涼しいところに行くか。

「おーい、清原さんー！」

不意に聞こえる声に周囲を見回す。すると日陰の下にあるベンチで手を振っている佐天とその隣で座る初春が居る。

「また会いましたねー」

「ああ、凄い偶然だな」

「清原さんはどこかにお出かけですか？」

「いや、いざ外に出たもののやることがなくてな」

「あーたまにありますよねーそういうの。あつ、よかつたらどこかのお店に入りませぬ♪実は昨日すごいものを見つけたんですよ♪」

「すごいもの？」

「ふ・ふ・ふそれはですね〜……じゃーん！」

上機嫌に佐天がポケットから取り出したのは小さな機械だった。

「？ただの音楽プレーヤーだよな？」

「中身が重要なんですよ中身が！それはですね〜……後で教えてあげます♪」

勿体ぶるな。相当なシロモノが入っているのか？

「それじゃあ行きましょうか♪」

「ちよつ、佐天さん！私、この後風紀委員の仕事が……って早いですよ、待つてください！」

佐天の後を初春が急いで追いかける。

この前誘いを断り、二度目も断るのは悪いため、オレも佐天たちの後をついていくことにした。

冷房の効いた喫茶店に入った後、佐天がプリンパフェを食べながら今話題の都市伝説の話をし始めた。

「幻想御手？なんだそれは？」

「清原さん知らないんですか？学園都市の都市伝説の一つですよ。簡単にいうと、能力者は簡単にレベルを上げられて、無能力者は能力者になるっていう何かのことです」

科学の街に都市伝説か。

「それで、一昨日の爆弾魔はそれを使っていたというのか？」

「たぶんですが……白井さんの話だと威力は大能力者並⁴だったのに、書庫に載っている犯人のレベルは異能力者²だったって昨日言っていました」

「さ、佐天さん！駄目ですって部外者に話したら！」

「いいじゃん初春。あたしも一応部外者なんだし。それに清原さんならまた名推理で事件解決しちゃうかもしれないじゃん」

オレにそんなのを期待されてもな。だいたい、事件解決は風紀委員とアンチスキルの仕事だ。

それにしても幻想御手か。

学園都市において超能力を発現させるプロセスである「開発」とは時間割^{カリキュラム}とも表現

され、具体的には薬物投与、催眠術による暗示、脳や首筋への直接的な電気刺激、五感の遮断など様々な手段で脳を開発することで脳の構造を変化させ、パーソナルリアリティ“自分だけの現実”という独自の認識・感覚を獲得させているのだ。

そんなカリキュラムを受けてそれでも能力が発動しなかった生徒が能力を使えるようになるというのは都合がよすぎる。

自分だけの現実に干渉しているのか？

あるいは――

「あら、初春に佐天さん……と清原さん？」

「な、なんであんたが佐天さんたちといえるのよ!？」

「……さつきそこで会ったんだ」

思わぬ来客が入った。現れたのは御坂、白井、そして白衣に身を纏い、栗色がかつたロングヘアのなんか目が死んでる女性だった。

「その人は……?！」

「脳学者のきやまはるみ木山春生だ。よろしく。君達は……」

「あ、佐天涙子です」

「初春飾利です」

「……………清原綾斗です」

「?きよはら?」

オレの名前を聞いた途端、木山先生が怪訝な表情をしだした。

「どうかしましたか?」

「いや……………前にどこかでその名を聞いた気がしたんだが……………私の勘違いか。すまない」

「……………いえ」

何やら意味深な反応をする。少なくともオレの記憶の限りでは面識はないはずだ。

嫌な予感しかしないな。できれば勘違いであってほしい。

「それにしても脳の学者さんなんですかあ……………はっ!まさか、白井さんの脳に何か問題が!」

初春、なにをどうしたらそういう発想に至るんだ。

「幻想御手の件で相談していましたの」

初春の失礼な問いに白井は青筋を浮かべながら答える。幻想御手という単語を聞いた途端、佐天はパフェを食べていた手を止める。

「幻想御手ですか? それならあたし……………」

「幻想御手の所有者を捜索して保護することになるかと思われまますの」

佐天はポケットから音楽プレイヤーを取り出したが、白井の言葉を聞いた途端、動きを止めた。

「え？どうしてですか？」

「幻想御手の詳細な情報を得るためっていうのもあるが……ここまできたら、幻想御手に重大な副作用があるのは、ほぼ間違いない。だから、出来る限り使用前にそれを回収したいんだ」

「それに、使用者が容易に犯罪に走る傾向もみられますしね」

佐天は先程までの笑顔を固まらせ、ゆっくりと音楽プレイヤーをポケットに戻す。

まるで白井達から隠すように。

「どうしました佐天さん？」

「あ、いや」

と慌てて手を引っ込めるようにテーブルの下へと滑り込ませるが、不意にアイスコーヒーの入ったグラスにぶつかってしまい、中身が近くにいた木山先生の足へと零れてしまった。

「ん？」

「い、いめんなさい!!」

「いや、気にしなくて良い。かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば……」

えっ？なにやってるんだこの人？

木山先生は平然としながらまるで自室にいるかの如く身に着けていたスカートを外して穿いていたストッキングを脱ぎだしていく。

ちよつと待てここは公衆の面前的喫茶店だぞ。

「だから、人前で脱いじゃダメだと言ってますでしようが！ええ!!」

「しかし……起伏に乏しい私の体を見て、劣情を催す男性がいるとは……」

「趣味嗜好はそれぞれですよ！」

「つて、いつまで見てんのよアンタはー!!」

顔を真っ赤にした御坂が「変態ー」とオレに強烈な右フックを与えた。

痛い。

◆◆

自分が居てもしようがないと、綾斗がウエイトレスから貰った氷袋で左頬を冷やしなから喫茶店から出て時間が過ぎ、本日のレベルアップーに関する意見はひとまず置いておくことにして本日は解散となった。

喫茶店から出ると白井は木山にお礼を言う。

「今日は忙しい中、ありがとうございます」

「いや、こちらこそ色々迷惑をかけてすまない……………それより、彼女の方こそ大丈夫か？」

「あイタタ…あいつどんだけ頑丈なのよ」

「大丈夫ですか御坂さん？」

綾斗を殴った御坂は氷袋で腫れた右拳を冷やしていた。

「大丈夫ですかお姉さま!?!おのれえ!あの野郎お姉さまを傷物にするなど許すまじ……！」

「いや、殆ど御坂さんの自滅だと思えますけど。平手打ちならともかく、グーはないでしよ。グーは」

「うっ……………」

お姉様LOVEの白井に対して放った初春のツツコミが御坂の方に突き刺さる。

木山は御坂たちのやり取りを見て、どこか懐かしく思い目を細めた。

「教鞭をふるっていた頃を思い出して楽しかったよ」

「教師をなさってたんですか？」

「昔……………ね」

と何処か遠くを見つめるように言う木山は、「そういえば」と話の話題を変える。

「……………さっきの彼とは友人かい？」

「いえ、時々ぼったり会う程度でよく知りませんけど……あの人がなにか？」

「いや……やはり彼の名前をどこかで聞いたことがあつてな……まあ名字が同じ人間がいてもおかしくないし私の思い違いであることを願うよ」

それだけ言うと、木山は踵を返すようにして帰路へと向かった。

「変わった方ですわね」

「白井さんよりもですか？」

「あ？」

「あはは……」

その時、初春がふと気づく。

「あれ？ 佐天さんは？」

◇ ◆ ◇

喫茶店から出た後、冷房の効いた図書館で読書をして気付けばもう夕方だ。

ファミレスで食事を終えて寮に戻ったのだが――

「……なんだ？」

学生寮が大勢の野次馬に囲まれ、消防車やら救急車やらが集まっていたが、どうやら火は既に消し止めていたらしく緊迫した空気でもない。

今朝のシスターの件もあり、嫌な予感がしたオレは近くにいた消防隊員に尋ねる。

「あのすみません。ここに住んでいる生徒なんですけど……火事かなにかあったんですか？」

「ああ。スプリンクラーが作動してすぐに火が消えたみたいだね。幸い夏休み期間で無人だったみたいで人的被害はでていないよ。ただ……」

「ただ？」

「不思議な点が多くてさ、焼け跡からみて、相当な高温で焼けたのは間違いないが、不思議な事に被害がほとんど出ていないんだよ」

「……ちなみに火元は何階で？」

「7階だね」

消防隊員に頼んで中に入れて貰うと、現場は悲惨なものだった。

歪んだドアノブ、溶け落ちた窓ガラス、上半分が消失した扉に、そこから覗く黒焦げの玄関。

部屋の中は奇蹟的に無事だった、なんてことはなくスプリンクラーで水浸しになっていた。

一番焼け跡が酷かった隣の部屋に住んでいる住人の姿が綺麗さっぱりないことから原因がなにかは明らかだ。

おそらくインテックスの言っていた追手がここまで来たのだろう。

そして誰かと戦闘になり、今のこの有様になったというところか。

ポケットからスマホを取り出し上条に連絡を取ろうとするがなかなか出てこない。

不幸体質のあいつのことだから単に携帯を壊してしまつて連絡が取れないかそれとも……まあゴキブリ並みにしぶといあいつなら大丈夫だろう。

「おいそこのお前。現場は関係者以外立ち入り禁止じゃん」

「……」応こはオレの部屋なので関係者に当てはまりませんがね」

背後から聞き覚えのある声がかかり、オレは振り返りながらツツコむ。

「あれ？清原じゃん」

黄泉川愛穂^{よみかわあいほ}。オレや上条が通う高校で体育教師を勤める警備員だ。

わがままボディを持って余す大人の女性だが、一年中ジャージを着てたり、暴走した学生を盾やヘルメットでどつき回したりと、あらゆる意味を込めての残念美人でもある。

「あ、あの黄泉川先生……彼は？」

黄泉川先生の横にいるなんか気の弱そうな眼鏡の女性隊員が口を開く。

「ああ。こいつは小萌先生さんところの不良生徒の清原じゃん」

「え？不良？」

「失礼な。オレは一度も校則を破ったことのない模範的な生徒ですよ」

「でもあの三バカといつもつるんでいるじゃんよ」

それでもあの変態どもと同列扱いされるのは心外だ。

「え、えつと自己紹介がまだでしたね。黄泉川先生の相棒をしていますてっそつづり鉄装綴里です」

「…黄泉川先生が勤めてる高校の生徒の清原綾斗です」

眼鏡の女性、鉄装先生が丁寧に自己紹介してくれたのでこちらも丁寧に返す。

よかった。黄泉川先生みたいな大雑把な人間じゃなさそうだ。

「おいこら清原。今黄泉川先生みたいな大雑把な人間じゃなさそうだって思っただろ

？」

「……なんのことやら」

なんで分かった。

「……まあいいじゃん。ここでボヤ騒ぎがあつたみたいだがお前にか知らないじゃん？」

「いえ、今帰つて来たところなので詳しくは…」

インデックスや魔術結社の話をしてても科学サイドの人間は信じないだろう。

「い、今帰つて来たつて、完全下校時刻過ぎてるじゃないですか!?!夏休みだからつて校則

破っちゃ駄目ですよー！」

「あのもしもし鉄装先生、重要なのはそこじゃないと思いますが……」

「そのおかげで火に巻き込まれずにすんだんだから特別にいいじゃんよ」

「う……た、確かにそうですけど」

どうやら鉄装先生は真面目な性格の持ち主のようだ。

「ところでお前部屋がダメになったみたいだが今日の寝床はどうするじゃん？」

「……まだ考えていませんね」

無論ここで寝るつもりは無い。しかしホテルは遠いし、気軽に払えるほど安くない。

夏休み初日の今日ではカラオケも満席だろう。

「泊めてくれる友達とかいないんですか？」

「泊めてくれる友達……ですか……」

寄宿が頼めそうなほど仲が良い奴……。

「……………」

「……………」

「……………」

駄目だ変態以外全然思いつかない。

「……………いませんね」

「答えるのに結構時間がかかったじゃん」

「だ、大丈夫ですよ。気をしっかり持って……」

鉄装先生に滅茶苦茶気を遣われた。

「はあ、仕方ないじゃん……清原」

「なんですか？」

野宿か土下座でもして土御門か青髪に頼もうか考えていたとき、黄泉川先生がなにか提案してきた。

「お前……しばらく私のところに泊まるじゃん」

……ん？今なんて言った？

鉄装先生まで固まっている。

「あの……誰が？」

「清原が」

「誰のところ？」

「私のところ」

「……………」

マジかよ。

二日目も無事とは限らない

黄泉川先生が住んでいる教員用マンションへと連行され、一夜が明けた（流石に女性の寝室ではアウトなためソファで寝た）。

目を覚ました時には既に黄泉川先生の姿はなく、テーブルに朝食用の食パンと『部屋は1週間で直るようだからしばらく泊っていけ。出かけるのはいいが完全下校時刻までには戻るように』という書き置きと、マンションの合鍵のようなものが置かれていた。世話する気満々だ。

とはいえ他に頼れそうな相手はいないため受け入れるしかない。

朝食を終えた後、外に出たオレは上条の足取りを追うことにした。

一度男子寮のところに行ったがやはり戻っていなかった。

もしあいつが魔術師と交戦し、生き延びたと仮定するならどこか知り合いのところに匿ってもらっているかもしれない。そうなると浮かぶ候補がかなり絞られる。

確認のために何人か連絡を取ってみると、青髪から『夜遅くにカミヤんに小萌先生の住所を聞かれたんさかい』と有力な情報をくれた。

何故あいつが小萌先生の住所を知っているのかはこの際触れなくておこう。

オレはすぐにスマホで目的地までのルートを検索し、それを頼りに歩きだす。
だがその道中、最近顔見知りになった女子中学生がただならぬ様子で走っているのを見かけた。

◇ ◆ ◇

人気がない解体予定の廃ビル前。

見るからに不良という輩達三人が、喧嘩もしたことがないだろうという風体の青年に暴力を振るっていた。

そこにたまたま居合わせた佐天は一度はそこから逃げ出した。

(しょうがないよね……あたしが何かできるわけじゃないし……あつちはいかにもな連中が三人。こっちはちよつと前まで小学生だったんだし)

そう自分に言い聞かせていたが、結局戻って来てしまった。

「や、やめなさいよ。……その人……怪我してるし……すぐに、警備員が来るんだからっ！」

だが、佐天は無力だった。

勇気を振り絞って吐き出した言葉が、女の子の震えるような健気な言葉が、不良を改心させるような、微笑ましい青春ドラマは起こらなかった。

リーダーの金髪は、その欠けた歯並びを見せつけるように不快に笑い——佐天の顔の真横の壁を蹴りつけた。

「ひっ！」

「あく、いまなんつった〜？」

思わず頭を抱えしやがみこむ。蹴られた部分の壁は工事中に使う仮初めの敷居とはいえべつこりと凹んでおり、手加減など微塵もしていないことが窺えた。

「いいかあ？ よ〜く覚えとけ、お嬢ちゃん」

蹲った佐天の頭を、金髪は片手で手荒く掴み上げる。

「何の力もねえガキが、ゴチャゴチャ指図する権利はねえんだよ」

「お前らにはその権利はあるのか？」

「っ！」

「ああ？」

声が出た方をみると、佐天が出てきた場所からもう一人現れた。

◇ ◆ ◇

様子がおかしかった佐天が気になって後をつけると、どんどん人気のない方へと進んでいく。一見して、女子中学生が近寄りそうもないところだ。

「きゃあー！」

「っ！」

突然聞こえた、甲高い叫び声。気のせいか、何かを叩いた、あるいは蹴ったような鈍い音も聞こえた。確実なのは、今叫んだのは明らかに女性だ、ということ。

解体予定の廃ビル前に向かうと、佐天がいた。武装無能力集団と見受けられる男達の一人に髪を掴まれている。

「何の力もねえガキが、ゴチャゴチャ指図する権利はねえんだよ」

「お前らにはその権利はあるのか？」

「っ！」

「ああ？」

危ない状況だったため前が出る。

「あつ……清原さん」

「昨日ぶりだな佐天」

「ああ？なんだテメエは？」

前歯が2本折れた、頭の悪そうな金髪の男が近づきながらそう言った。

「ただの通りすがりだ。その子から離れろ」

「はあ？かっこつけんなよ雑魚が。さっさと消えねえと痛い目見るぜえ？」

なにが面白いのか、後ろの2人が声を出して笑い始めた。

確かに人は暴力の前には屈する。その理屈は分からなくもない。ただ、その理論を貫き通すには常に相手の力量を上回る必要がある。

この場にいる3人じゃ、オレは止められない。

オレは男たちを無視し、佐天に声をかける。

「怪我はないか佐天？」

「え？あつ、はい」

「てめえシカトしてんじやねえよー」

男の一人がオレに向かって拳を振り上げる。ただ無造作に、まるで無抵抗な赤ん坊を殴るかのように。

小学生や中学生でも避けられるような単調なモーション。

大振りに繰り出される右拳をオレは左手で受け止める。

「あ………？」

「やるなら本気でやった方がいい」

一度だけ警告をする。だが、拳を止められてもピンと来ていない様子だった。

止められても仕方ない動き。止められても無理のない無理のない威力だったからだろう。

オレは受け止めたままの男の右拳を、左手の握力で握りしめる。

「お？あ、つ、え………っ!？」

男の表情が段々と硬くなつていき、両膝が震え始める。

「お、おいどうした？」

「あ、つ、っ！た、たんま、やめっ！」

身体を支えきれなくなり、両膝から崩れ落ち、地面に膝がつく。我慢できなくなったのか、自分の左手で必死にオレの腕を掴み引きはがそうとするが無駄だ。

男の頬を右手で打ち抜くと、男が頰れた。

………まずは一人。

「てめえ！」

仲間がやられたことで危機意識が高まったのだろうか、細い目をした男が虚空で手を動かせば、それに呼応するように壁に立てかけられていた廃材が勝手に浮かんでいく。

能力者か。

男の手の動きに合わせて廃材が飛来してきたため、上体のみを仰け反らしてギリギリで回避する。的を失った廃材はそのまま通りの方へと転がっていく。

「なんだ、今の気持ち悪い動きはー」

「気持ち悪いは余計だ」

男が追撃にと工事現場に豊富な鉄筋、鉄パイプを浮かせ、オレに投擲してくる。

武装無能力集団みたいな奴が能力を使ってきたのは想定外だった。

だが能力を使いこなしていないのだろう。その攻撃はまさしく只の投擲。軌道も単調で、それぞれの部品も一ヶ所に固まっていた。

オレは鉄パイプや鉄筋を最小限の動きで避けながら能力者の方へと距離を詰め、右拳を眼前へと突き出した。

「ぐは!？」

……これで二人。残っているのはただ一人。

その光景を目撃する佐天と知らない奴は、言葉を発することもできないようだ。

「はっはあ!英雄気取りか死にたがりの馬鹿かとおもったが、結構やつてくれんじゃねえか!」

「生憎とオレは英雄願望なんてないし、自殺志願者でもない。ただ無能力者のオレでもお前らに勝てると思っただけだ」

「は?勝つ?お前が俺に?ははは傑作だ!どんだけ喧嘩慣れしていようが、幻想御手ででええ力が手に入った俺に無能力者のお前勝てるわけがねえんだよ」

最後に残った金髪は顔に浮かべた笑みを崩さず、大型のナイフを懐から取り出し、腕を振りかぶって突進してきた。

さつき幻想御手と言っていたからこいつも能力者なのだろう。

ギリギリまで攻撃を観察し、相手の能力を見極めたほうがいいだろう。

狙いは顔面ではなく腹部。

オレは腕の軌道を見て紙一重で躲そうとするが——金髪の腕があり得ない角度で曲がり始め、ナイフの刃先が左腕をかすめた。

「っ……」

後方に飛び、距離を取る。切られた箇所から血が流れだし、指を伝って地面に滴り落ちた。

「清原さん!?大丈夫ですか!?!」

「……ちよつと掠った程度だ」

「クツクツク……おいおい女の前だからって強がるなよ」

おかしい。

躲せたとはずの攻撃を躲せなかった。

いや、さつき軌道が捻じ曲がってるように見えた。奴自身が捻じ曲がっているのか。それともオレが見ている景色が捻じ曲げられてるのか。

試しに地面に転がっている小石を拾い、投擲する。

まっすぐ金髪に向かって行った小石は、空中でぐにやりと捻じ曲がるように軌道を変えた。

腕があり得ない角度で曲がる、投げたものが不自然な軌道を描く。

コイツの周囲だけ光の進み具合がおかしい。

……そういうことか。

「お前の能力……自分の周囲の光を捻じ曲げて、相手に違う位置にいるように誤認させているようだな」

「ヒューっ！まさか一発で気づくか」

蜃気楼と同じ原理だ。

光は通常直進するが、密度の異なる空気があるとより密度の高い冷たい空気の方へ進む性質がある。

だが金髪は能力で強引に光を捻じ曲げて誤った位置に像を結ばせているのだろう。

トリックアート
 「【偏光能力】っていうんだけどなあ……けどよお、分かったからってお前に何ができる？自分の目しか頼ることはできないだろうが」

馬鹿な奴だ。

「オレにできること、そうだな……」

タネは分かった。思ったよりも単純だ。ならオレにできることといえば……

「お前に一発入れるくらいだな」

「ははっ！馬鹿かお前？お前は俺に触れることもできずに終わるんだよー」

笑いを咬み殺すように金髪はオレに向かって来る。挑発した甲斐はあったようだ。

——ジャリ

そこか。

避けも受けもせず、オレは何もない空間に向かって突進し、金髪より速く拳を突き出した。

「ぐぼおっ!？」

目には何も写っていない。しかし、拳には確かに固い骨の感触を感じる。それを追って響く生々しい音。今まで目の前にいたはずの金髪の姿は消え、拳の先に姿を現した金髪が宙を飛び廃ビルの壁に突っ込んだ。

「…な、なんで」

「ん？さっき言っただろ。お前に一発入れるって」

「違う…そうじゃなく、て…」

そこまで言って金髪ガクンと崩れ、ピクリとも動かなくなる。呼吸はしているようだ

し大丈夫だろう。

「風紀委員ですよ！全員大人しく投降を——つてあら？」

なにもない空間から白井が現れ、風紀委員の腕章を見せてキメ台詞を言おうとするが、周りの状況にポカンとしている。

オレ、白井の出番奪っちゃったか？

「まったく……夏休み二日目になにスキルアウトと殺り合ってるじゃん」

「……まあ、成り行きで」

数分後。現場に警備員の人達が現れ、オレは現在進行形で黄泉川先生からのありがたい説教と手当てを受けていた。

「というか清原、お前喧嘩強かったのか？」

「……いやあ火事場の馬鹿力ってやつですかね」

「もうホント清原さんすごかったんですから！あたしと同じ無能力者なのに！どうやって相手の能力破ったんですか？」

さつきまで呆然としていた佐天が元気よくオレに詰め寄って来た。

「あ……しいて言うなら足音だな」

「足音?」

「ああ、あいつは目に見える場所は誤魔化せても足音までは誤魔化せなかつたみたいだからな」

視覚が頼りにならないならそれ以外の五感に頼るしかない。

耳を澄まして、走ってきた時の足音で大体の位置を把握し、一撃で仕留めた。

「…という感じだ」

「へー」

「ぐっ、わたくしが間に合ってれば十秒も経たずに全員を倒したというのに」

佐天がオレに尊敬の眼差しを向け、隅で白井が悔しそうな顔を浮かべている。

「白井はもしかして空間移動の能力者か?」

「ええ。わたくしの能力は自身と触れたものを瞬時に指定した座標に移動させるものですが」

「目標座標の指定は視覚に頼ってるのか?」

「?…そうですか…あつ」

やっぱりか。

「あー…白井さんの能力、滅茶苦茶さっきの人のと相性悪いですね」

「うぐっ!」

「確かにいつも通り事件発生の現場に駆けつけていたら苦戦していたんだろうじゃん」
「がはっ！」

佐天と黄泉川先生の一言がグサグサと白井に突き刺さった。

これは最初に質問をしたオレが悪いな。

「…ま、まあいいですの。ようやくと幻想御手の手掛かりを掴んだことですし」

そう自分に言い聞かせるように呟く白井の手元には音楽プレーヤーが握られていた。

「よし。取り敢えず応急処置は済んだじゃん」

「ありがとうございます」

黄泉川先生に礼を言い、オレは包帯に巻かれた腕の具合を確認する。

「痛むのなら途中で病院によつてやってもいいが……」

「いえ、特に問題ありません」

「……ひよつとしてお前痛み感じてないのか？」

「は？」

「何故そんなこと聞くのですか？」

「いや、お前いつも鉄仮面みたいに無表情だから実はロボットなんじゃないかと時々思っていたじゃん」

失礼な。

「そんなことないと思いますが」

「いやいやいや、昨日御坂さんに殴られた時も清原さんまったく表情に変化ありませんでしたよ」

「そうか？」

「は？なんでお前常盤台の超電磁砲に殴られたんじゃん？」

「簡潔に説明すると喫茶店で女性脳学者が突然服を脱ぎだした時に居合わせてそうになりました」

「は？」

オレの説明に黄泉川先生が何言ってるんじゃないこいつ、と言いたいような表情をする。

「あー…実はあたしもそこに居合わせまして……あの時は本当にびっくりしました」

「あの先生、変わった御方でしたの」

「そ、そうか」

佐天と白井が証人となってくれ、黄泉川先生は信じてくれたようだ。

「まあとにかく、オレの皮膚の下はちゃんと骨と肉がありますし痛みをちゃんと感じますよ。ただ少し感情を表情に出にくいみたいですね」

そういうえば上条たちから何考えてるかかわらないと言われたことがあるな。

「ふーん……まあ、たまには笑ってみせたりしたら愛嬌があつていいじゃんよ」

「はあ……一応、努力はしてみます」

「一応つてなんだ一応つて」

今ここで笑つて見せるとオレの両頬を引つ張つて口角を上げさせようとする黄泉川先生に抵抗していると、鉄装先生が話しかけてくる。

「黄泉川先生、三人を護送車に詰め込みました。怪我を負っていた少年は痣だらけでこれから病院に運ぶところです」

「そうか、それじゃあこつちも事情聴取が終わつたし、お前らもう帰つていいじゃん。白井は明後日まで始末書を提出するじゃん」

「ちよつ!?!」

「許可なく管轄外の事件に首を突つ込むのは立派な規則違反じゃん。これで何回目じゃん」

常習犯かい。

そう言い残して黄泉川先生と鉄装先生は警備員の護送車に乗り、その場から去つた行つた。

「それじゃあオレはこれで」

「あ、はい。本当にありがとうございます!」

茫然自失している白井を残し、オレは佐天と別れ廃ビルを去る。さて、寄り道したが今度こそ会いに行くか。

◇ ◆ ◇

歩いて十五分という所に、それはあつた。

何というか、見た目十二歳な小萌先生にしては意外なことに、それは東京大空襲も乗り切つたという感じの超ぼろい木造二階建てのアパートだった。通路に洗濯機が置いてあるところを見ると、どうも風呂場という概念は存在しないらしい。

黄泉川先生のところとは大違いだな。

一つずつドアの表札を確かめ、ボロボロに錆びた鉄の階段をのぼり、二階の一番奥のドアまで歩いて『つくよみこもえ』というひらがなのドアプレートを見つけた。

ぴんぽーんと一度チャイムを鳴らす。

「ど、どちらさまでせうかー?」

「お前の隣人の清原だ」

ドアががちやりと開いて、ツンツン頭が顔を出した。

「よ、よう……」

「生きていたようだな……インデックスも」

扉の向こうにある部屋に、淡い緑色のパジャマを着た銀髪シスターが布団布団の上で横になっていた。昨日上条の右手によってビリビリに破かれた修道服は安全ピンまみれの状態で壁にハンガーでひっかけられている。

「あ、あやとだ。久しぶりなんだよ！」

「久しぶりって、昨日会ったばかりじゃないか」

傍に水を張った洗面器とタオルがあつた。夏風邪でも引いたのか？

「インデックスもいるとはな……ということは昨日あの場にはインデックスもいたということか」

「な、何の話でございましょう」

巻き込むまいと白を切るつもりか。

「とぼけなくていいぞ上条、昨日の夕方追手が男子寮まで来て戦闘になったんだろ？あんな話を聞いた後に不自然な火事が起これば誰だつてそう思う」

「え、えつと……」

「しかもオレの部屋はスプリンクラーから出た水でずぶ濡れ状態だつたぞ」

「ぎくっ」

やっぱり火災報知機押したのこのウニか。

「あ、あれはやむを得ない状況だったと言いますか……その件についてはホント、すみませんでした!」

頭を下げる上条に対し、オレは冷静に次の一手を考えていた。

「なら昨日、なにがあつたかを教えてくれ」

「……いや、言つたら巻き込むことになる。だから言えない」

「もしもし警備員の黄泉川先生ですか? 今日の前に教師の家に上がり込んで幼女を監禁してる男の人が——」

「ちよつと待て!?! その冤罪はシャレにならないって! はいはいはい喋ります喋りますから通報はやめてー!!!」

スマホを片手に持つオレの前に、上条が土下座しながら懇願した。

その後、涙目になりながら上条はその日あつた出来事を話した。

「……んで、IDもないから病院にも行けず。しょうがないから怪我をしたインデックスを抱えて、俺は小萌先生の家に来たんだ」

「なんで小萌先生の家なんだ? 怪我はどうした?」

「えつと……小萌先生が魔術でインデックスを治したんだ」

「は?」

あの先生が魔術を？

「ねえ、二人共きつきからなんのはなしをしているの？」

事情を聞いている間に、インデックスは布団から起き上がってきた。

「昨日のことを聞いていた。追手から受けた傷を小萌先生が魔術で治してくれたってところまで」

「うん、でももうこもえはこれ以上魔術を使っちゃダメ」

「どういうことだ？」

「魔導書っていうのはね、危ないんだよ。そこに書かれてる異なる常識『異常識』に、見える法則『違う世界』って、善悪の前に『この世界』にとつては有毒なもの」

『違う世界』の知識を知った人間の脳は、それだけで破壊されてしまうとインデックスは言う。

「…まるでこことは違う世界…：ファンタジーで言うところの異世界が存在するみたいな言い方だな」

「な、なに言ってるんだよ清原。そんなの本当にあるわけ——」

「そうなんだよ！」

「あるのかよ!?!」

「すごいよあやと！とうまに何回説明しても全然伝わらなかったんだよ！」

「そりや上条だからな」

「そうか、とうまだもんね」

「……あの、なんか二人の間で上条当麻イコール馬鹿が成立してると思うのは俺の気のせいですかね？」

「安心しろ、気のせいじゃない」

「安心する要素がどこにも見当たりませんが!？」

「不幸だ……」と上条はいつもの口癖を呟く。

さて、この辺にしておくか。

「それじゃあ無事を確認したことだし、そろそろ帰る」

「帰るって男子寮のところ使えないんだろ？」

「……黄泉川先生のところに泊めてもらってる」

「えっマジで？」

「マジだ。ちなみに教員用の4LDKマンションだ」

「なんだよそれ!?!ここは天と地の差じゃねえか!?!」

「ねえとうま、よんえるでいーけいってなに？」

「え、えつとだな……」

上条がインデックスの相手をしてる間に、オレは玄関へと向かう。

すると、オレがドアノブに触れる前に扉が開いた。

「あれー？清原ちゃんじゃないですかー？」

目線を下に向けると、買い物袋を持った合法ロリの月詠小萌先生がいた。

「すみません。先生がいない間に上がり込んでしまい」

家主の留守中に家に上がりこんだので先に謝罪しておく。

「いえいえ大丈夫なのですよー……ってあれ？清原ちゃん、その腕の包帯どうしたんですかー？」

「ええ……ついさつきオレも少し怪我をしましてね」

「怪我、ですか？」

もの凄く心配そうな顔をしている。なんだこのかわいい生き物は。本当に年上か？

「怪我といつてもかすり傷ですよ。痛みもそれほどではないですし」

「そうですか……」

かすり傷、と聞いて小萌先生は安堵の表情を見せた。

「……そういえば先生に質問なんですが」

「先生に質問ですかー？」

「ええ、音楽……特に音だけで能力を引き上げるとは可能ですか？」

「音だけで、ですかー？」

うーんと、可愛いらしく唸る小萌先生。

「ん〜難しいですねえ【学習装置】システムならいざ知らず」

「……学習装置ですか」

学習装置とは、技術や知識を電気信号として、脳に直接インストールする装置で、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感全てに対して電氣的に情報を入力できる。

だが、あれに能力のレベルアップなんて効能はない。

「あれ？清原ちゃん学習装置を知ってるのですか？」

やば。

「上条の頭の悪さを治す方法を探してるときにそれ関係のを見つけまして」

「そうだったんですかー」

すごい。今考えた適当な嘘をあっさり信じた。

「学習装置のことはひとまず置いておいて、それじゃあ音自体に五感に働きかける効果があったとしたらどうですか？」

「うーん、それなら共感性ですねー」

きょうかんかくせい？

「なんですかそれは？」

「簡単に言えば一つの刺激で複数の感覚を得ることですねー例えば、風鈴の音を聞いて

音を感じるだけでなく気温も涼しく感じたり、赤系の色も見たら色を感じるだけでなく温かみも感じたり、といった風にそれを応用すれば出来ると思えますよー」

つまり、感覚がイメージを連想し、別の感覚を刺激するということか。

「そうですか。とても参考になりました」

「いえいえー生徒の疑問に答えるのは先生として当然なのですよー」

ふふんと胸を張る小萌先生に礼を言い、オレはその場を後にした。



太陽が真上にのぼり、そろそろ昼飯を食べようかとマップで近くにいい店がないか検索しているとき……

「「お——っ——」」

昼下がりの公園で少女達が感嘆の声を上げているのを見かけた。手を掲げる少女と、その先、空に浮かぶ一人の少女。

「スゴイよルイコ！ 私紙コップ持ち上げんのがやつとだったのに！」

と能力を使っているだろう少女が、先程別れた顔見知りに向けていた。

「佐天？」

「あれ？清原さん？」

佐天もオレに気づいてこつちを向く。他の少女たちもオレの方を向いた。

「ルイコ、知ってる人？」

「さてはコレか？」

「いやいや！そんなんじゃないから！」

慌てながら佐天が他の女子三人にオレとの関係を説明しだす。

「なんか右の小指を上げていたがどういう意味だ？」

「それで清原さん、こつちはあたしの中学の同級生のアケミ、むーちゃん、マコちゃんです」

「「こんにちは」」

「あー……どうも」

最近女子中学生とのエンカウト多いな。

「それで、お前たちは公園でなにやってるんだ？」

「あはは……いやあ実はあたし幻想御手を手に入れました……使ってみるとほら！」

オレに見せつけるように、佐天は両手を掲げれば、小さな旋風が巻き起こり公園に散らばった葉っぱを巻き上げた。

「昨日見せた音楽プレーヤーに入っていたやつか？」

「おっ、やつぱり分かっちゃいましたか名探偵さんや」

能力が使えるようになって嬉しいのか、佐天はさつきよりテンションが高い。

オレと違い超能力者になるために彼女達は学園都市に来たのだから、この姿こそ学園都市の学生らしいものなのだろう。

それにしても凄いな幻想御手は、どんな副作用があるかはまだわからないが……。

「それで、能力者になった感想はどうだ?」

「最っ高です!!? あたし、ずっとずっと能力者に憧れてて! もう……嬉しい!!!」

「って奴です! 本当はもつと白井さんや御坂さんみたいにバーっと凄い能力使いたいんですけどね……」

「勝手な憶測だが、そういうのは一度コツを掴めばそのうち上手くなっていくんじゃないか」

「そうですかね?」

「誰だって初めから自転車を漕いだりできないだろ。とりあえず、佐天の能力は気流操作みたいだから風関係でイメージしやすいのを頭に思い浮かべたらどうだ?」

超能力の源は『自分だけの現実』という平たく言えば妄想・思い込みに近く、非常識な現象を現実として理解・把握し、不可能を可能に出来ると信じ込む意志の力とも言われる。

であるなら、今の佐天の場合出来るのだと一度認識してしまえばより上手く能力が使

えるはずだ。

別に研究者でもないオレのアドバイスに、佐天は「うーん」と悩む姿勢を見せる。

少しの間佐天は悩んだ後、何か納得したように小さく頷くとスツと腕を前に出す。

ゆつくりと息を整え、次の瞬間サツと腕を動かした。その動きは洗練されていた。やり慣れた動きと言つていい。ただそれは攻撃的な動きというわけではなく、ただなにかを払うような動き。

なにが起きるのか。急に突風が吹いたり竜巻でも呼んだのかと少し期待したが、特になにも起きない。肌を感じる風は佐天が能力を使う前と変わりなく、失敗したのかと思つたが、少し離れているところにいる佐天の友人三人の内、スカートを穿いている子の絶対領域が絶対ではなくなった。つまり勢いよく、それはもの見事にめくれ上がった。

は？

「やったあ！あたしコツ掴めたかも！見てましたよね清原さん！」

「見てたが……佐天、今のなんだ？」

「いやあ一番に思いついたのがいつも初春にやつてるスカート捲りです」

なにやつてるんだよ。

スカートが捲れあがった少女は、悲鳴を上げながら慌ててスカートを抑えつけ佐天の

方を睨んで叫んだ。

「ルウイコおお!!」

「ごめんマコちゃん!でもあたし手を使わずにスカートを捲れましたよ!これなら初春にも使えそうです!」

「あー……うん、よかったな」

佐天の能力が変な方向で発揮してしまい、これにはオレも反応に困ったのだった。

副産物（前編）

突然だが、バルニバービの医者を知っているだろうか？

ジョナサン・スウィフトの有名な著作、ガリヴァー旅行記の第三篇で、ガリヴァーが空飛ぶ島ラピュータの後に訪問するのがバルニバービという国だ。

バルニバービのある医者は、対立した政治家を融和させる方法を思いつく。

対立する二人の脳を二つに切断して、再び繋ぎ合わせるといふ手術だ。これが成功すれば、節度のある調和のとれた思考が可能になるといふ。この世界を監視し、支配するために生まれてきたと自惚れている連中には、何よりも望ましい方法だとスウィフトは書いている。

では学園都市にいる能力者達の脳、特に自分だけの現実を繋げたら一体どうなるのだろうか？

◇ ◆ ◇

あれから三日が経った。

佐天へのアドバイスが思いのほか上手くいつてしまったおかげで、佐天を含めた四人の女子中学生の夏休み中の能力補習の手伝いをする羽目になった。

最初断ろうと思ったのだが、幻想御手の経過を見たいのと、引き受けなければやるこ
とがない。夏休み三日目でそれは非常に困るので結局引き受けることにした。

「凄い凄いつ！見て見て！こんな重いものまでここまで上げられるよ！」

「なにを〜！私だつて負けないんだから!!」

レベルの上がった能力で遊ぶ少女達は本当に楽しそうだ。

今のところ幻想御手を使って以降別段何か変わったことはなかった。白井達は実害があると言っていたがその兆候も見られず、この二日間目に見えて発現した能力を彼女達は楽しんでおり、特に不調を訴えることもない。

「ところで清原さんは本当に使わなくていいんですか？」

何もせず木陰のベンチに座っていたオレに、佐天が幻想御手を勧めてきたが、必要ないと手で断りの姿勢をとる。

「悪いが遠慮しておく」

「む……やっぱり清原さんはズルはダメだつて思ってるんですか？」

「いや、能力にズルもへつたくれも無いだろ。この街では普通の人間が投薬や催眠暗示で人工的に超能力を発現している。能力のレベルが上がる道具が出てきたところで今

更だろってというのがオレの正直な感想だ……ただ、どんな副作用があるか気になつてな」

「もう、清原さんは心配性だなあ〜見ての通りなんの問題もありませんよ」
自覚症状がない場合があつたら手に負えないが。

「まあ、なにか違和感を感じたらすぐに言え……とここでお前は練習しなくていいのか？」

「うーん……したいのはしたいんですけど捲るためのスカートがなくて」

「ただスカート捲りに執着してるんだこのセクハラ女子中学生は。」

「この前のことがあつて、被害にあつた子は今日はズボンを穿いていた。」

「うう……どこかに練習台となるスカートはないだろうか」

「取り敢えずスカート捲りから離れろ」

「これオレが悪いのか？」

「はっ！そこだ！」

「はうあああ!?!」

突然佐天がなにかに反応し、能力を使った。

すると、公園の入り口付近から少女特有の甲高い悲鳴が聞こえてきた。

「おい、なにやってるんだ」

「あつ、しまった……すみません大丈夫ですかー!？」

「あつ、はい。だいじょうぶで……す」

「あれ？お前は……」

公園の入り口に目を向けると、そこには見覚えのある人物がいた。

「(ハ、ハハハ)、(ハハハ)っ——!」

鶏か。

「こ、こんなところで奇遇ですね!」

「清原さん、知り合いですか?」

「ああ、この前セブンスミストであいつの落し物拾ってあげたんだ」

「ああ、あの靴ちゃんと言っていた人ですね」

「そ、そそその節はどうも!」

向こうもオレを覚えていたようで、少女は直立した状態からオレに向かって腰を90度の角度まで曲げる。

「ふむ、確かに立派なものを持ってますな」

「おい」

確かに凄いがそういうことは口に出すなセクハラ中学生。

それにしてもコイツ、公園の入り口にいたのに気配がまったくしなかったな。

「ほら清原さん、私にも紹介してくださいよ」

「いや紹介するもなにも名前知らないし……」

「し、ししし失礼しました！わ、わたくし弓箭ゆみやう獵虎らつこといます！」

「オレは清原綾斗だ。とりあえず頭を上げてこっちにきたらどうだ？」

「よ、よよろしいのですか？」

「そこじや日差しが強いだろ？」

「は、はいい！」

ずっと頭を下げたままだった少女、弓箭がピシツと顔を上げて公園に入ってきた。

緊張してるのか彼女の顔は真っ赤だ。

「と、とととところで清原さん、と、とと隣にいるかたとはい、いったいどういったご関係で……」

「あつ、自己紹介まだでしたね。あたしは清原さんの教え子の佐天涙子です。あつちにいるのはあたしのクラスメイトのアケミ、むーちゃん、マコちんです」

「？教え子って……き、清原さん学生ですよね？」

「能力補習の手伝いをやらされてるだけだ。と言つても、少しだけ指示するだけで役に立たないがな」

「いやいやいや、清原さんのアドバイスののおかげで幻想御手で使えるようになったあた

しの能力も更に上達しましたし」

空力エアロハンド使いをスカート捲りに利用するのはどうかと思うが。

「れ、幻想御手って最近噂になってるあの…?」

「そうですね。なんと正体は音楽で、聴いただけで能力が上がるんです」

「音楽で、ですか? な、なんか不思議ですね」

「最初はあたしも半信半疑だったんですけど、使ってみると無能力者のあたしでも能力を使えるようになったんですよ」

弓箭に見せるように、掌の上で小さなつむじ風を生み出し、落ち葉を浮かばせる。

「ほ、本当に能力が……?」

「はい! よかったら弓箭さんも使ってみますか?」

「え?」

そう言うてはいと佐天が音楽プレーヤーをポケットから出す。

弓箭は佐天の掌にあるそれを、大きく見開いた目で見たまま固まっていた。

「よ、よろしいのですか?」

「はい!」

音楽プレーヤーから目を離さずに佐天から了承を取り、恐る恐ると手を伸ばし始める弓箭。

「能力………わたくしにも………いるかちゃんみたいに………」

なにかブツブツ呟きながら、あともう少して届こうとしていた。

その時——

ガンツ！

突如、何かの落下音が響き、弓箭は驚いて手を引つ込めた。

「び、びつくりしました……」

「なんだ？」

落ちたのは、先程まで念動力で支えられていたベンチ。

「アケミ!？」

「アケミちゃん、しつかりして！アケミちゃん！」

そこでは、佐天の友人のアケミが意識を失い倒れていた。

「なにがあつた？」

「わ、分かんないです。アケミが急に倒れて……」

倒れている子に近づいて様子を見る。

顔色が悪いというわけではない。脈もある。呼吸も乱れていない。瞼を開けても、瞳

孔は問題なく反応している。

眠っている。そんな風にしか見えなかった。

これが白井の言っていた幻想御手使用後の副作用か？

「とりあえず救急車を呼ぶ。それまで日陰のベンチに寝かせる」

「あ……あの清原さん、アケミは？」

「今のところ身体に異常は見当たらない。病院で診察してもらえばなにかわかるだろう」

白井があんな風にぼかしたという事はまだ解決法は見つかっていないのだろう。

あの医者に頼むか。

「弓箭」

「は、はい!？」

「オレは今からコイツを運ぶ。悪いが運ぶの手伝ってくれないか？」

「わ、わわわかりましたわ!」

「佐天はこの番号に連絡してくれ。相手はオレの知り合いの医者だから事情を説明すればすぐに病院に受け入れてくれる。後の二人は呼びかけを続ける」

「は、はい!」

佐天にオレのスマホを渡し、オレはアケミの上半身を起こしてなるべく密着し、脇の下から手を差し入れ、一方の肘及び手首付近を持って頭部側を抱える。弓箭には足部側を抱えてもらい、同時に持ち上げた。

足部側から歩幅と歩調を合わせながら日陰のベンチまで運んでいき、むーちゃんという少女が持つてきていたタオルを頭が乗る部分に敷いてからゆつくりと下ろした。

「はい……はい……はい、わかりました今代わります。清原さん、電話を代わってほしいと」

「わかった」

佐天からスマホを返してもらおう。

「もしもし」

『やあ、話はさつき女の子から聞いたよ。患者の容態はどうかね？』

「頭部は勿論、身体はどこにも外傷はありません。どこにも異常はなく、友人たちに声を掛けられても反応する様子はありません」

『こつちの病院にも似たような症状の患者が次々と運び込まれてきてるね』

「こつちのにも、ということとは他の病院にも運び込まれるという事ですか？」

『そうだよ』

ということとは幻想御手使用者のほとんどが同じ症状を発症しているという事か。

「治療法は見つかっていますか？」

『…情けない話だが今のところまだだね。原因思しきものは大体は掴み始めているんだが……』

もうそこまでいってるのか。流石だな。

「では幻想御手について今知っていることを説明するので、代わりにその掴み始めているものについて詳しく」

『ああ、構わんよ』

情報変換した後、通話を切る。

「ごめん皆……」

ベンチの方を見ると、佐天が二人に謝罪していた。

「幻想御手を使ったら倒れちゃうなんて……あたし……知らなくて……何で……こんなことに……違う……こんなつもり……あたし……こんなつもりじゃ——」

「涙子ちゃんが悪くないよ！別にわざと勧めたわけじゃないし！」

「そうだよ！もし私が手に入れてたら同じことになっていたかもしれないし」

「でも……アケミが倒れちゃったのはあたしのせい……っ！やっぱり……ズルして力を手に入れようとしたから……罰が当たったのかな？」

頬に流れる雫の跡からして、幻想御手を持って来た佐天は大分責任を感じたのだろう。さっきのオレとの受け応えでの動揺からそれはなんとなく分かった。

コミュニケーション能力の低いオレに言える言葉は少ない。

「……気休めになるかどうかかわからないが、医者の話だと昏睡状態になってすぐに症状

が悪化するような事例は確認されていないそうさ。あと治療法はもう少しで見つかりそうだからすぐに起こせるだろう……」

佐天から返事がない。

「お前が今どう思ってるかは分からない。けど後悔してるのは分かる」

「あたし……ホントは……」

「何も言わなくていい。泣くほど反省しているんだろ？悪いと思ってるなら起きた時にちゃんと謝れ。心の底からごめんと謝って、仲直りして、くだらないことで笑い合えるのが友達というものなんだろ？」

駄目だ。これ以上は上手く言葉が見つからない。

「あはは……清原さんは、優しいですね……こんなあたしにそんなこと言うなんて……あたし初春に電話します。ちゃんと全部話してから……罰を受けます」

「ルイコ……」

「涙子ちゃん……わたしも一緒に謝るよ！」

「そうだよ！あたしたちもズルして能力を上げようとしたんだから同罪だよ！」

「むーちゃん、マコちゃん……」

「涙子だけに背負わないよ……あたしたち友達じゃん？」

「……ごめん」

それから三人は少し離れ、初春へと電話を掛け始める。

「さて…悪かったな弓箭、関係ないのに手伝ってもらって」

「い、いえいえいえ！お、おお役に立てたようで何よりです！」

運ぶのを手伝ってくれた弓箭に礼を言う。

「あ、ああの！ほ、ほほ他にわたくしにできることはありませんでしょうか！」

「いや、お前にも友達と待ち合わせとか予定があるだろ？」

正直これ以上彼女が手伝えることはない。

「し、ししし心配いりません！わたくし、ポツチなので予定はありません！」

……。

「え？」

「えっ………はわあああ!？」

自分で言ったことに後から恥ずかしくなったようで、弓箭は茹蛸のように真っ赤になった顔を両手で覆い、その場で蹲ってしまった。

「あの清原さん、初春が代わって欲しいと……って弓箭さんどうしたんですか？」

「あー………うん、武士の情けで聞かないであげてくれ」

「「？」」

弓箭をこのまま帰すのもあれだったため、彼女には四人の搬送に付き添ってもらっ

た。

◇◇

◆◆
今現在オレは初春と無人バスに揺られていた。向かっているのは、初春達に捜査の協力をしてくれている木山先生の勤めるA I M解析研究所だ。

救急車に乗った佐天たちを見送る少し前、オレは佐天の携帯越しに初春から捜査協力を要請された。親友の佐天と電話で『必ず治療法を見つけて起こしてあげる』と約束したようで、一刻も早く事件解決の糸口を見つける為に使えるものはなんでも使うという意気込みでオレを指名したとのこと。

ちなみに病院への通報などの手際の良さから、オレが副作用があることを把握していたことを初春は見抜いた。

「…いいのか？見方によればオレは知ってたのにあいつらを止めなかった無責任な奴だぞ？」

「確かに、白井さんから佐天さんを助けってくれたって聞いた時、いい人なんだと思ったのに、あなたは非道い人です」

声は荒げず、ただ淡々とオレを否定してくる初春の言葉。

「けど、佐天さんが自分を責めた時に励ましてくれたって話を聞いて悪人ではないと思えました。それでも私はあなたを許せませんけど」

ツンとそっぽを向く初春。だがどうも初春自身に迫力がない。

「ですから、罰として清原さんには事件解決のために協力してもらいます。有無は言わせませんよ?」

「……………まあ、オレができることなんてそんなじゃないと思うがな」

木山先生の研究所がある付近のバス停にバスが止まり、オレ達は降車をする。

すると同じタイミングでポケットに入れていたスマホからメールの着信音が鳴った。

オレはすぐに取り出し、メールの内容に目を通す。

……………成程。そういうことか。

「どうかしましたか?」

「病院から検査結果が来た」

「っ!? なにかわかったんですか!?!」

「詳しい話は木山先生と一緒にした方がいい。行くぞ」

「は、はい!」

思っていたよりも早く済みそうだな。

「そうか、この間の彼女まで…………」

木山先生の部屋に着いた後、初春の話を聞いて木山先生はそう言い、小さく肩を落と

した。隈をこさえた切れ長の目を細める姿は表情に合っていて悲痛に見える。それに呼応するように今一度初春も肩を落とした。

「私のせいなんです……」

「あまり自分を責めるものではない。少し休みなさい、コーヒーでも淹れてこよう」

「そんな悠長なことしてる場合じゃー!」

「コーヒーを淹れる前に、脳の専門家である木山先生にどうしても報告したいことがあるのですが……」

「報告したいこと?」

オレの言葉に木山先生は眉をピクリと動かす。

「はい。報告したい上で木山先生の意見を聞きたいんです」

「……聞かせてくれ」

手に持っていたコーヒークップをデスクに置き、木山先生と初春が聞く姿勢に入る。

「最近音楽ソフトとして出回っている幻想御手についてですが……どうやら能力者のレベルを上げるためのものじゃないようです」

「え? え?」

「——ほう?」

オレが述べた結論に初春はチンプンカンプンになっているが、木山先生は興味を引い

ているようだ。

「そう考える根拠は？」

「理由は簡単です。能力が発現しない、或いは育たない人間の一番の要因は能力の処理能力です。これはいくらか共感性で五感に働きかけたところで格段に上がるわけではありません」

「で、でも実際それを使ってレベルが上がった人は大勢いますよ？」

「ああ、そしてどういいうわけかその大勢が共通して昏睡状態に陥っている。気になって知り合いの医者他に共通点がないか調べてもらった……主に脳波を中心に」

「……」

最後の単語に木山先生の眉が一瞬ピクリと動いた。

「共通点は見つかったのかね？」

「はい」

オレは先程医者から送られてきたメールの一部を画面に出して二人に見せる。

「……複数の脳波パターングラフだね」

「これがどうかしたんですか？」

「これは幻想御手使用者の脳波パターンだ。脳波は指紋なんかと同様に各人異なり、同じなんてありえない。だが幻想御手使用者には、共通パターンが見てとれる」

そう言いながら、オレは其々の脳波の画像を重ね合わせる。

「……確かに、かなりの部分が重なり合っているな」

「でも、それが何か事件と関係あるんですか?」

「脳波パターンがここまで酷似しているのはまずありえない。このデータから共感性は能力レベルの向上ではなく、能力者の脳波をある特定の人物のパターンに弄るためのものだと考えた方が妥当だ。そしてそのパターンで無理矢理脳が動かされているとしたら……」

「……人体に多大な影響が出るだろうな」

「つーそれが、幻想御手使用者の昏睡状態の原因ですか!?!」

人間には、それぞれ特有の脳波パターンが存在している。それは別の呼び名で云えば思考パターンだ。このパターンは今までの経験から形作られている。通常であれば、長い時間を掛けて変化していく脳波のパターンを短い時間で強制的に変化すれば……自分を自分たらしめている脳波はなくなり、別の誰かに思考を機械的に行うだけだ。

心臓を動かす、息をする等の生命維持に必要な場所以外は全て乗っ取られてしまうことを意味する。

「……成程。能力者のレベルを上げるためのものじゃないという君の考えはほぼ合っているだろうな。だが、なぜ幻想御手を使うと同一人物の脳波が組み込まれる?しかも能

力のレベルが上がる理由についてまだ説明していないぞ」

木山先生からのこの質問に対し、オレはこう答えた。

「さあ？脳波を同じにされてるってことは、無意識のうちにコンピュータのように並列演算をして処理能力を上げているんじゃないかと考えましたが……それ以上のことは専門家じゃないオレには分かりませんでした」

「ちなみにその脳波パターンの解析はしたか？」

「いいえ、オレはしていません。メールはさつき届いたばかりですし」

「そうか」

話を聞き終えた木山先生は、机に置いていたコーヒークップを再び取る。

「……解析結果はまだだが、君の考えはあながち間違っていないのかもしれない。そこまでいけば治療法を見つけるのもそうかからないだろう」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ、だがその前に初春君は一度気を楽にした方がいい。お友達が目覚めた時に君が倒れていては元も子もないだろう」

「あ……」

「大丈夫。最後はきつとうまくいくさ」

木山先生は笑顔を残して部屋を出て行き、今はオレと初春の二人きりだ。

「……初春」

「は、はい。なんですか？」

「そういえば書庫には研究者のデータもあるのか？」

「は、はい。能力開発を受ける学生の他に病院の受診や職業適性テストを受けた大人のデータも保管されています……はっ！特定の人物の脳波パターンがわかっているなら！さっきのメールを送ってください！」

オレの意図を理解した初春はポケットから端末を取り出し、書庫への検索を始める。さて、オレの方もこの部屋を調べるか。

オレが脳波パターンに関しての説明をしているとき、木山先生の視線が僅かに一つの本棚の方に向いていた。

席を立ててその本棚に向かうと、引き出しから一枚の紙がはみ出していた。

これみたいだな。

「えっ、どういうこと……？」

オレが引き出しを開けて中であつたファイルに目を通しているとき、初春は端末の画面を見ながら絶句していた。

「どうした？」

「あの、書庫の検索結果が出たんですが……」

横から初春の端末を覗き見る。

画面には『99パーセントの確率で木山春生の脳波パターンと一致』と出ていた。

「これは……いったいどういうことなんでしょう？ なにかの間違いじゃ……」

「間違いじゃないと思うぞ」

「え？」

初春に引き出しから出した例のファイルを見せる。

ファイルにはびつちりと入れられた資料を纏められており、どの資料も共感覚と脳に關してのことが書かれていた。一つファイルを手にとってパラパラと捲っていた初春は冷や汗を流し、驚愕に声を詰まらせる。

「これも……これも……『共感覚性』についての論文……どうということ？ だって木山

先生、あの時気付かなかったって——」

「——いけないな」

背後から木山先生の声がかかる。後ろを振り返るとコーヒーマシンを淹れに行つたはずなのにカップを持っておらず、代わりに手に持った拳銃をオレたちに向けていた。

「他人の研究成果を勝手に盗み見ては」

「……木山先生、あなたが——」

「こうも早くバレるとはな。ふむ……まあ、頃合いだろう。思わぬ収穫も手に入ったことだし計画を早めても良いか」

「つ、何を言ってる——」

「とりあえず二人共一緒に来てもらおうか、少しドライブしよう」



「……あの、この状況どうにかならないんですか？」

「我慢してくれ」

今の状況を説明する。木山に拳銃を突き付けられながら駐車場に向かったが問題が発生した。木山の車はランボルギーニ・ガヤルドという高級スポーツカーで、二人乗り仕様だった。

普通なら一人留守番になるのに木山はそれを許さず、オレが助手席に座り、その上に初春が座ることになった。

「初春、頭のそれどうにかならないか？ チクチク刺さってますごく鬱陶しい」

「私も以前から気になっていたんだが頭のそれは何なんだい？ 能力に関係あるのかな？」

「答える義理はありません！ 清原さんも動かないでください！ 変なことしたら逮捕しますからね！」

「人質になつてるときにそんなことするか」

そう言われてももう凄い首とか顔に当たるんだが。ただの飾りならば取つて欲しい。「そんなことより、幻想御手はいつたいなんなんですか？ どうしてこんなことをしたんですか？ 眠つた人たちはどうなるんですか？」

「矢継ぎ早だな……まず幻想御手だが、彼の仮説通り複数の脳波を同一化することで高度な演算を可能にするものだ」

「繋げる？」

「ああ、能力者が無意識に放出しているA・I・M拡散力場を媒介としてネットワークを構築し、複数の脳に処理を割り振ることで高度な演算を可能としている。——つまり、能力の向上はただの副産物……。同じ脳波のネットワークに取り込まれることで、一時的に能力の幅と演算能力が上がっているだけに過ぎない。ただの一過性のものだ」

一過性。ただの副産物。木山はそう言い切った。それを聞いた初春は怒りに打ち震える。

「ふ、ふざけないでください！ じゃあ、なんですか!?! あなたはたくさんの人達をぬか喜びさせる為に、こんな大それたことをしたんですか！」

初春は激昂する。佐天の思いを弄び、裏切った彼女に、己の怒りをぶつける。

しかし、木山は全く動じずに、初春の方を向く事すらせず前を向いて運転し続けている。安全運転を心がけている。

「落ち着きたまえ。言つたらう、レベルの向上は只の副産物だと。他人の能力には興味はない。私の目的はもつと大きなものだ」

「え？」

木山は淡々と言った。それこそが全てで、他の全ては全て些事だと、言外に告げるように。

「あるシミュレーションを行うために『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』の使用申請をしたんだが、どういうわけか却下されてね。代わりになる演算装置が必要なんだ」

それで学生の脳を部品扱いするとは発想がぶつ飛んでるな。

「そんなことのために能力者を……？」

「一万人ほど集まった。十分代用してくれるはずだ」

結構多いな。それだけの学生が能力に悩んでいるということか。そして、そこには佐天達が含まれ、装置の一部にされている。初春の顔が険しくなり、木山を睨んでいる。

「そう睨むな。今言ったように、私はあるシミュレーションをしたいだけ。それが終わ

れば全員解放する」

「信用できません。こんな大事件を引き起こした犯罪者を、そう簡単に信じられると思いませんか？」

「思わないな。なら、これを君に預けておこう」

そういつて木山は白衣のポケットから一枚のメモリーカードを渡す。

「これは？」

「幻想御手をアンインストールする治療用プログラムだ」

「っ！」

「もちろん後遺症は残らない。全て元通りになる。誰も犠牲にはならない」

「……何の臨床試験も行われていないものを安全だと言われても、何の説得力も感じません」

「はは、手厳しいな。しかし、情報処理能力に長ける君になら分かるだろう。ウイルスとというのは、拡散性と同じくらい——あるいはそれ以上に除去性も良くなければ意味がない。そうだろうか？」

「……コンピュータ・ウイルスと幻想御手を一緒にしないでください」

その時、カーナビのディスプレイに何か文字列が表示された。

「……思ったより早かったな。君たちとの通信が途切れてから動き出したにしては早す

ぎる。清原君、ひよつとして君なにかしたか？」

「さあ、何のことやら」

どうやら研究所に入る前に黄泉川先生に送ったデータのおかげで警備員が動いてくれたようだ。

「間一髪といったところか。……所定の手続きを踏まずに機材を起動させると、データが全て消去されるようにプログラムしてある。部屋に残していた書類は共感性に付いてのものだけだし——これで幻想御手使用者を起こせる可能性は、君のもつそれだけということだ」

「ッ!!」

淡々と呟かれた言葉に初春が驚愕を露わにしていると、木山はここで初めて、初春の方に目を向けた。

その表情は、どこか影がありつつも、優しさが込められた笑みのようにも見えた。

「大切にしまえ」

「それはいいんですが、アレはどうします?」

そのまま高速道路をぐんぐん進んでいると、前方の道を機動隊のような装備の連中が一列に立ち塞がって封鎖していた。車で突破するのは不可能だろう。木山先生もそう考えたようで、幾分か距離を取って車が止まる。

『木山春生だな。幻想御手散布の被疑者として拘束する。おとなしくお縄につくじゃん！』

拡声器を通して黄泉川先生が木山先生に投降を呼びかける。

あつ、黄泉川先生と鉄装先生がオレに気づいて何やつてるじゃんと言いたげに呆れた表情をしている。

「……警備員か。上からの命令があつたときだけは動きが早い連中だな」

ウンザリするように木山先生はそう吐き出した。

「……どうするんです？ どうやら年貢の納め時のようですよ」

完全武装の警備員集団。一介の研究者でしかない木山にこの包囲網を突破できるとは思えない。……と、初春は考えているのだろう。

だが木山は笑っていた。

「……先程も言った通り、幻想御手は人間の脳を利用した演算機器を作るためのプログラムだ。だが同時に使用者にある副産物をもたらしてくれる」

——面白いものを見せてやろう。

そう言って木山は散歩にも出掛けるように車を降りる。両手を頭の上で組みゆつく

りと警備員達に向かって歩いていく。

「確保じゃん！」

黄泉川先生の掛け声で徐々に近づく警備員。その時だ。

「ぐあああ！」

「貴様なにを?!」

「ち、違う俺じゃない?!」

突然一人の警備員が銃で隣の警備員を撃った。だが撃った警備員は否定した。まるで催眠にかかったように。

直後、木山が手を前にだすとそこからハリケーンに匹敵するほどの突風が警備員に襲いかかった。

「バカな！能力者だと?!」

黄泉川先生を含む警備員たちが木山が能力を使うのに驚く中、さらに重ねるように木山は風の次は大量の水を放射した。

それから炎や念動力……多種多様な能力を使って警備員を無力化していく。

「あうっ！」

その余波で初春は気を失った。まあかえって好都合か。すぐにオレは初春を持ち上げて運転席側に座らせる。

さて、ここまでは想定通りか。

一人もの能力者をネットワークという名のシナプスで繋いだシステムは、言わば一つの巨大な脳だ。もしそれを操れるのなら、人間の脳ではありえないことも可能になる。

今の木山は実現不可能と言われた『多重能力者』デュアルスキル——いや、あれとは別の方式で

動いているから『多才能力者』マルチスキルと呼ぶべきか。

「初春さん！」

警備員が全滅すると聞き覚えのある声が…

「御坂か…」

「あんた!!?なんで初春さんと一緒にいるの!?!」

「初春に捜査協力を頼まれた後流れで……」

「は?」

「それより、初春は気絶してるだけだ。お前はあれをどうにかしたほうがいいんじゃないのか?」

「!」

オレに言われて御坂は木山の方を向く。木山も御坂の存在に気付いてこつちを見ていた。先程とは違い、木山の左眼の結膜が赤くなっていた。

「御坂美琴……学園都市に七人しかいないレベル5。さすがの君も私のような相手と戦ったことはあるまい。君に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

「止められるかなですって？・当たり前でしょ！」

かくして学園都市最高レベルの超能力者と、複数の能力を持った多才能力者の戦いの火ぶたが切って落とされたのだった。

副産物（後編）

車から降りたオレは陸橋のような高速道路の下で起こっている戦いを傍観していた。

電撃という一つの手札を工夫して使うレベル5の御坂は、観測しているのでも既に10以上の手札を披露している多才能力者木山に少しばかり苦戦しているようだ。

まあ、木山を殺してしまえば治療法が手に入らないのを考えて気絶させる程度で威力を加減しているのだろう。もともと、治療用プログラムは今初春が持っているがまだ伝える必要はないな。

「……もうやめにしないか。私はある事柄について調べたいだけなんだ。君の目的は私を捕えて昏睡状態となった学生たちを助ける方法を私から吐かせることだろうか？安心してくれたまえ。私の用が終われば学生たちを解放するつもりだ。誰も犠牲にはなることはない。だから退いてくれないか？」

「ふざげんじやないわよ！誰も犠牲にしない？あんたの身勝手な目的にあれだけの人間を巻き込んでおいて……人の心を弄んで……こんなことしないと成り立たない研究なんてろくなもんじやない！そんなの見過ごせるわけないでしょうが！」

木山の言葉に御坂は怒りを露にする。言いたいことはわかるが、オレは御坂の言葉に

は賛同できないな。レベル5とはいえ、所詮世間知らずのお嬢様か。

「…君たちが日常的に受けている能力開発——あれが100%安全で、人道的なものだと、本気で思っているのか？」

「……………どういうことよ」

「学園都市の上層部は能力に関する重大な何かを隠している。ほとんどの人間はそれを把握していない。普段、子供達の脳を掻き回している教師達ですら……それが、どれだけ危険なことだか分かるだろう？」

「……なかなか面白そうな話じゃない。アンタを捕まえてゆつくりと調べさせてもらうわ！」

御坂は木山の言葉には少し引つかかっても、後で“調べると、戦闘を続行した。

電気の力で地面から黒い砂——おそらく砂鉄を操り、複数の槍を作り上げて木山を攻撃する。だが木山は念動力かなにかで瓦礫を展開して槍を防いだ。

「残念だが、まだ捕まるわけにはいかない」

木山は近くの大量の缶が入ったゴミ箱を念動力で自分の上で移動させた。そして中身の入った缶を御坂に向かってばら撒いていく。

虚空爆破が来ると御坂は気付いたようで、電撃を飛ばして缶を破壊していく。

だが空間移動で飛ばされた缶が一瞬で御坂の背後に現れ、大きな爆発が起こった。

爆発により舞い上がった煙でよく見えないな。仕方ない。下りるか。

◇◆◇

能力で作った壁の先に広がるのは、更地に近い乾いた景色だった。

「もつと手こずるかと思つていたが……こんなものかレベル5。恨んでもらつて構わんよ」

そこに横たわる御坂に対し、開き直るように木山は告げて踵を返す。

だが

「捕まえた」

「っー」

背後から腹に手をまわされ、ゾクつと背筋が伸びる。振り返ると倒れたと思つていた御坂だった。

「馬鹿な！あの威力で立っていられるはずが！」

「磁力で即席の盾を作つたのよ！」

直後、ゼロ距離で電撃使いの一撃が流れ込む。

「うあああああああ！」

御坂の一撃が効いて木山は叫び声を上げた。手加減はしたが、これで戦闘不能なはずだ。

その時だった。

『センチ』

「!?」

『木山センチ』

子供の声と姿が、御坂の頭の中に流れ込んできた。

(これは……木山春生の記憶!?)

そこはどこかの研究所の執務室のような場所だった。目の前には白衣を来た老齢の男性がいる。

『私が教師に?何かの冗談ですか?』

『いやいや、君は教員免許を持っていたよね?』

『はい……』

『なら教鞭を執っても何もおかしくないじゃないか』

『しかし、あれはついでに取っただけで……』

『研究から離れると言っているわけではないよ。それどころか統括理事会肝いりの実験を任せたいと思っっているんだ』

『本当ですか！』

老人の視線が部屋にある窓の外へ向く。そこでは小さな子供たちがサッカーをして遊んでいた。

『あの子供たち……彼等は“置き去り”チャイルドエラーと言っつてね。なんらかの事情で学園都市に捨て

られた、身寄りのない子供たちだ。そして今回の実験の被験者であり、君が担当する生徒になる。実験を成功させるには被験者の詳細な成長データを取り、細心の注意を払って調整を行う必要がある。だったら、担任として受け持った方が手間が省けるでしょう』

『それは、そうかもしれません……』

『なに、なにも君が初めてのケースではない。私のかつての助手も街の外で同じ事をしている。確か今は研究と子育てと教鞭を両立していると聞いているな』

『はあ……』

『まあ、気長にやるといい』

厄介なことになった。だがこの実験を成功させる為の辛抱だ

『あー……今日から君たちの担任になった木山春生だ……よろしく』

『『よろしくお願いいたしまーす！』』

子供は嫌いだ。騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、馴れ馴れしいし、すぐに懐いてくるし。

『センセー。私でも頑張ったら大能力者とか超能力者になれるかな？』

『今の段階では何とも言えないな。高レベルの能力者に憧れがあるのか？』

『んー、それは勿論それもあるけど……私たちは学園都市に育ててもらってるからの街の役に立てるようになりたいなーって』

『……』

研究の時間がなくなってしまった。本当にいい迷惑だ。

子供は……本当に、嫌いだ。

『やーい、引つかかったー』

『先生彼氏いないんでしょ？俺の彼女になんなよ』

騒がしいし、デリカシーがない。失礼だし。論理的じゃないし。

『『『せんせー！お誕生日おめでとー！』』』

子供は……。

月日は流れ、実験に日になった。

AIM拡散力場制御実験。長い時間をかけて何度も計算を繰り返して準備してきた。何も問題はない。これで先生ゴツコもおしまいだ

『怖くないか？』

『全然。だって木山センサーの実験なんですよ。センサーのこと信じてるもん。怖くないよ』

『これでおしまい……。』

『ドーパミン値、低下中！』

『抗コリン剤投与しても効果ありません！』

『早く病院に連絡を！』

そう思っていた。だが実験の途中でアクシデントが起きる。研究者たちが慌てる中、あの老人だけは笑みを浮かべながら端末の画面に表示されているデータを眺めていた。

『あー、いいからいいから』

『しかし、このままでは！』

『浮足立ってないで、データをちゃんと集めなさい。この実験については所内に箝口令を敷く。実験は恙なく終了した。君たちは何も見なかった。いいね？』

『は、はい……』

老人が何を言ってるのか、木山の耳に入っていないかった。教え子たちが実験の途中で昏睡状態に陥ってしまったのである。木山はあまりのショックに顔を真っ青にしていた。

『木山君。よくやってくれた。彼らには気の毒だが科学の発展に犠牲はつきものだ』

老人が邪悪な笑みを浮かべながら木山の肩に手を置いた。

『今回の事件は気にしなくていい。君には今後も期待しているからね——』と失礼、電話だ』

老人は木山から離れ、ポケットから携帯を取り出す。

『ああキヨハラ君久しぶりだね。私は元気だよ。今ちようど実験も終了してね。そっちは息子さんの方はどうかね?』

◇ ◆ ◇

陸橋の端にあつた階段を降りて下に到着すると様子がおかしかった。

「い、今のは……?」

「ッ!? 観られた、のか……っ!?」

傷だらけの手で頭を押さえる木山の様子は、とても痛々しく見えた。ダメージを与えたであろう御坂の方はなにかにショックを受けているようで固まっていた。

「なんで、あんなことを……?」

「あれは表向き、A I M 拡散力場を制御するための実験とされていた。が、実際は暴走能力の法則性解析用誘爆実験だ……! 能力者の A I M 拡散力場を刺激して条件を探るのが本当の目的だ」

「じゃあ……!」

「暴走は意図的に仕組まれていたのさ。もともと、気づいたのは後になってからだがね」

「人体、実験……」

「あの子たちは一度も目覚めることなく、今尚眠り続けている。私たちはあの子たちを使い捨てのモルモットにしたんだ!!!」

何が起こったかは知らないが、ようやく合点がいった。

幻想御手で昏睡状態となった学生を誰も犠牲にしないと木山は言った。木山からすれば昏睡状態になった学生を治す必要はどこにもないはず。用意するにしても捕まった時の交渉材料にするべきになのにそれをせずに初春に渡した。

それにオレたちを拐ったのにも関わらず人質にして警備員を突破しなかった。人質

にすれば簡単に突破できるはずなのに。

自分の能力を無闇に使えば道路が壊れて逃走できなくなる可能性が充分にあるのに、も関わらず能力を使った。バリアを展開したまま自分を軽くしてスピードを上げて直接攻撃で戦って制圧した方が道路が壊れて逃げられなくなるという最悪の事態は回避できる。

それをしなかったのは木山自身が自らの手で人を傷つけることにトラウマがあるからだ。

これらとさっきの話を内容から一つの答えが導き出された。

木山は過去に子供たち、おそらく生徒を実験で傷付けてしまい、そのせいで自らの手で直接、人を傷つけることができなくなった。今回の騒動は子供たちを目覚めさせるのに必要な演算システムを作るために必要だった。学園都市には『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』があるが――

「で、でも！そんなことがあったのなら警備員に通報すれば！」

甘いな御坂。

「23回」

「え？……」

「あの子たちの回復手段を探るため……そして事故の原因の原因を究明するためのシ

ミュレーションを行うために樹形図の設計者の使用を申請した回数だ。樹形図の設計者の演算能力を持つてすれば……あの子たちを助けられる筈だった。もう一度太陽の下を走らせてあげることも出来ただろう。だが却下された！23回とも全て！統括理事会がグルなんだ！警備員が動くわけがない！」

統括理事会まで関わってるか。思っていたよりこの街の上層部は腐っているらしい。「でもそれじゃああなたのやってることも同じになっちゃ……」

「君に何がわかる!!あんな悲劇を二度と繰り返させはしない!!その為なら私は何だつてする!!この街の全てを敵に回しても止まる訳にはいかないんだ!!」

木山は声を荒らげる。御坂は木山の言葉を聞いて、何も言い返せないでいた。

「うっ……ああ……ぐうっ!!」

突如、木山は両手で頭を抑えながら苦しみ始める。

「ちよ、ちよつと……!!」

「ネットワークの暴走……いや、これは……虚数学区!?! あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、!!」

木山は返事をする事もできず絶叫を上げていた。そしてそのまま地面にうつ伏せの状態で倒れてしまう。

その直後、木山の頭からねばりとした半透明の液体のようなものが出て来る。

それは徐々に形を変えていき、歪な突起物が生えてきて、やがて手足の形に整っていき、まるで生を受けたばかりの胎児のように。

『ギ、イ』

『何か』の進化は続く。

エメラルドの帯が何本も伸び、口が、耳が、鼻が、そして眼が、刃物で切ったように浮き出してくる。木山と同じ真っ赤に染まった双眸が爬虫類のようにぎよろぎよろと蠢き、焦点が定まっていない。さらに頭上に天使のような光の輪っかが形成される。

「なに、これ……？」

突然現れた、理解し難い存在を眼前に御坂は言葉を失っている。

さすがのオレもこれは想定していなかった。

『ぎっ？？ギ？？キイ、アアアアアアアあああツツツ!!』

咆哮、或いは慟哭の如き産声が響き渡る。それだけで衝撃波が発生し地面が裂け、大量の瓦礫が吹き飛んでくる。

とマズいな。

気を失った木山が前方から衝撃波によって飛ばされていた。オレはすぐに駆け出し、跳躍して木山をキャッチする。

が、空中で衝撃波を避けきれず、木山を抱えたまま橋脚に叩きつけられた。

「？」

御坂が胎児のような化け物の方を見るが、胎児の方は見向きもしなかった。

胎児は御坂を追いかけもせず、その場で触手を振り回している。闇雲に暴れてるだけなのか……？

「まるで、何かに苦しんでるみたい……」

初春がそういうが、たしかにそうかもしれないな……

「とりあえず比較的安全な所に避難したらどうだ？」

気絶した木山を肩に乗せ、オレはそう二人に提案する。

「つて、なんでアンタもここに!?!しかもいつの間にも木山を!?!」

「さっき衝撃波で吹き飛んできたのを受け止めたんだよ」

「そ、そういうえば清原さんさつき壁に思いつきりぶつかったみたいですけど大丈夫なんですか!?!」

「ええ!?!」

初春に見られていたか。

「あ……まあ身体は頑丈にできてるから問題ない。そんなことよりさつきと行くぞ」



そのころ、幻想御手の患者が收容されている病院では異変が発生していた。

「グっ……あ……あああああ!!」

病室に響く喚き声。それは隣のベッドの患者からも発せられ、連鎖的に周辺の病室から同様に連鎖する。

「どうしました!?!」

「それが……例の患者さんたちが一斉に苦しみだして!」

看護師たちが患者をベッドに押さえつけようとする。しかし、いくら抑えても収まる心配がない。

「意識が戻ったんですか!?!」

「いえ、さつきまで昏睡状態だったのに、全員同時に!」

「……………いったい何が起こっているんだ」

◇ ◆ ◇

「()ならいいだろう」

柱の側に木山を寝かせる。

離れた所では、いまだ胎児が暴れている。

時折、銃声が聞こえることから、意識を取り戻した警備員の何名かが、あの怪物と応戦しているのだろう。

「う……………ん……………」

「っ！ 目が覚めたみたいね」

「……………！」

「あつ、まだ起きない方が——」

すぐに意識を取り戻した木山は御坂の制止の声を無視し、或いはそもそも聴こえていないのか虚ろな目で見晴らしの良い場所へと向かう。

そして、高く昇る土煙の中から、あの胎児のような異形の姿を確かに捉える。

「ククツ、アハハハ……………凄いな……………凄いな……………学会で発表すれば表彰ものだぞ……………」

泣くような乾いた笑い声をあげ、木山はその病的に細い手で目を覆い、柱に力無く身を預ける。

「もはやネットワークは私の手を離れた……………おしまい……………」

木山は懐に手を入れようとしていた。オレはその手を掴み、ぐつと自分に引き寄せた。そこには拳銃が握られていた。その銃が自分達ではなく、木山自身に使うつもりだったのだろう。

「アンタが自決したところで何の解決にもならない」

拳銃から弾倉を抜き、スライドを引いて弾丸を排出する。御坂と初春がそれを見て何か言いたげだが無視する。

木山はオレの顔をぼおと見つめていたが、やがて吐き捨てるように言った。

「じゃあ、どうすればいい？あの子たちを取り戻すことも回復させることも叶わなくなった。それにあれを止めることは誰にも——」

「諦めないでください！」

一人絶望している木山に初春が喝を入れた。

「できないかどうかなんてやってみないと分からないじゃないですか！教えてください」

木山先生、アレは一体なんなんですか？」

「……………」

しばらく初春の目を光を失った瞳で見つめていた木山だが、大きく息を吐いた後、ずるずると柱を背に座り込み、話し始めた。

「アレか……………虚数学区を知ってるか？アレがそうだ」

アレが？現物は初めて見たな。

木山が口に出した単語に、御坂と初春は目を見開いている。

「虚数学区？それって都市伝説じゃなかったの？」

「実在したんだ。まあ、噂のようなものではなかったがね」

ぼつりぼつりと、木山は説明を続ける。

「学園都市最初の研究機関、学園都市の運営を陰から掌握しているとも噂されるその正体はA I M 拡散力場の集合体だ。アレも恐らく原理は同じ。A I M 拡散力場で形成された怪物——『幻想猛獣』^{A I M ベースト}とでも呼んでおこうか。幻想御手のネットワークによって束ねられた一万人のA I M 拡散力場が触媒になって生み出され、そしてそれらを取り込んで成長しようとしているのだろう。そんなモノに自我があるとは考えにくい、ネットワークの核であつた私の感情に影響されて暴走しているのかもしれない」

つまりあれが暴れているのは『幻想御手』使用者が共通して抱える劣等感や欠落感、木山が抱える怒り等のマイナス感情を攻撃性が反映されているからということか。ただし「やられたらやりかえす。倍返しだ！」ぐらいの知性はある様子。

「どうすればアレを止めることができるの?」

「それを私に聞くのかい?今の私が何を言つても、君たちは信用……」
聞かなくても方法は大体察してるが。

「信じます」

初春は間髪入れずに言い切つた。

「子供たちを助けるのに、木山先生が嘘つくはずありません。だから信じます」

ずいっと木山に顔を近づけた初春がにっこりとそう言い放つた。呆氣にとられた木

山先生は目を見開いて初春の顔を覗いた後、しようがないなど言いたげに苦笑した。

「預けたものはまだ持っているかい？ アレは幻想御手のネットワークが産んだ怪物だ。ネットワークを破壊すれば止まるかもしれない」

「幻想御手の治療プログラム！」

「試してみる価値はあるはずだ」

予想通りだな。あとやるべきことは役割分担だな。

「それじゃあアレの相手は御坂、ネットワークの切断は初春、オレは初春の護衛だな」

「ちよつ、それ私が言おうとしたのに……」

どうやら御坂の台詞を奪ってしまったようだ。

「……アンタに初春さんを任せていいのよね？」

「ああ、任せろ」

「……いいわ。初春さんに傷一つでもつけたらただじゃおかないわよ！」

そう言つて、御坂は脱兎の如く胎児の方へ走つて行つてしまふ。

「……さて、こつちもこつちで動くか。それで、ワクチンプログラムのインストールは具体的にどうするんだ？」

「……ワクチンプログラムは幻想御手と同じく音を使っている。使用者にそれを聞かせるだけでいい」

「あつ、それなら警備員の車には通信機器があります。その端末から幻想御手使用者が入院している病院の放送システムにアクセスすれば——」

「いや、未だ病院に搬送されていないのもいるだろう。確実に全員に聞かせるなら学園都市中に流した方がいい」

「あつ、そうですね！」

オレの案に初春が賛成する。

こつちの方針が決まったところで、オレと初春は再び上へと上がっていく。

だが、その途中で胎児からレーザー光線のようなものが放たれ、オレの視界は光に包まれた。

幻想猛獣 ■ ■

「……なあ初春、もう少しペースを上げられないか？」

「……はあ……はあ……す、すみません……はあ……これでもペースを上げてるんですが……」

オレと初春は非常階段の踊り場で立ち止まっていた。

最初は急いで駆け上がっていた。だが息を切らしている初春は運動神経がいい方ではないのかトコトコ登っているようにしか見えない。

別に物凄く時間が掛かっているわけではないが、あまり時間がなさそうだ。

幻想猛獣の方を見ると、警備員が幻想猛獣へと絶え間なく銃弾を撃ち込み続けている。

弾幕は幻想猛獣を正確に捉え、その体に次々と風穴を空けていたが、その風穴は数秒で再生、より肥大化していつている。体表も半透明ではなく、灰色がかかった薄汚い紫に変わっていた。頭上にあるオレンジ色のリングも、先ほどより光量が増しているのが目に見えて分かる。

幻想猛獣は変化を続けながら少しずつ移動していく。向かっている方向を目で追う

と建物があった。

その建物は高い壁で囲まれており、その壁には大きな黄色と黒の放射線記号がイラスト化された鉄板が打ち付けてあった。おそらくあそこは原子力実験炉なのだろう。

これは非常にマズい。もし御坂の足止めが失敗し、ワクチンプログラムのインストールが間に合わなければこの学園都市、そして近くにいるオレたちはおしまいだ。

御坂が幻想猛獣の前にたどり着くと電撃を放つ。触手が飛び散るが、すぐに再生してしまう。再生しきると同時に幻想猛獣が御坂をターゲットに捉えた。そして、黄色い光線を何発も御坂へと撃ち出した。

御坂は跳躍して避ける。

幻想猛獣は当たらないのに痺れを切らしたかのように、今度はリングの上に青白い物体を生み出した。それは直径3メートルほどの球体に形を整え、そして爆散する。

「つて、マズい」

放射状に吹き飛んだ光線の一発が初春の方へと向かっていた。

「初春、しやがめ」

「えっ……きやあつ?!」

今からでは避けられないと判断し、オレは初春に飛び付き、力任せに押し倒す。

その次の瞬間にはオレの視界は光に包まれた。

- 右上腕部に問題発生。一部の筋肉組織、血管共に損傷。出血多量を予測。
- 自然治癒による回復は不可能と判断。
- 自己修復／オートスタート。
- 変更履歴から損傷前の状態をリード。
- リードした構造情報をもとに修復箇所を転写。
- 修復開始。
- 完了。

危なかった。普通の人間だったら今のは確実に死んでいた。

光線が右腕に直撃したが、無事怪我をしなかった状態へと復元されており、元に戻っ

た右腕もちゃんと動く。

「大丈夫か初春？」

覆いかぶさった時、手で視界を遮ったために初春にはさつきのは見えていない。

「あつはい。へ、平気です」

少し顔が赤いが無事のようにだ。

「あ、あの……さつきの光線は……」

「ああ、危なかった。もう少し下だったら確実に二人共無事じゃなかった……それより急いだほうがいいぞ」

さすがにもうあれを喰らうのは御免だ。

「うえあ!?!あ、え、清原さん!?!」

「何だ?」

「何じゃなくて!!えつとその!」

呆気にとられている初春を無視し、オレは強引にその体を持ち上げた。俗に言うお姫様抱っこだ。別にこれをやって悦に浸る趣味は無い。急いで初春を上につかせるにはこっちの方が早いと判断したからだ。

「あつ、ああああのつ、私強引なのは嫌いじゃないですけど私まだあなたのこと何も知らなくて……!」

「口を閉じていろ。舌を噛むぞ」

「え？」

若干の抵抗を見せる初春を無視し、階段を駆け上がる。踏面を何段か飛ばし、踊り場にある手摺を踏み台にして勢い良く跳躍する。一分も経たないうちに高速道路に辿り着いた。

「下ろすぞ初春」

「あ、あの…」

「呆けるのは後だ」

初春を下ろして通信車両を探すが、いくつもの車両が横転していて、どれがそれだか判別しにくい。

「清原！無事か!？」

「……黄泉川先生」

さつきまで幻想猛獣の相手をしていた黄泉川先生と鉄装先生がボロボロな状態で声を掛けてこつちの方へ駆ける。

「事情は御坂美琴から聞いた！こつちに来るじゃん！」

「助かります」

黄泉川先生に通信車両を案内される。

幸い方が一に備え特別頑丈に作られているのか車両は横転すらしておらず、中の通信機器も健在だった。

「いけそうか？」

「はい。この機器のスペックなら、十分ここからアンインストールワークチンを流せます」

「……そうか」

初春は、一度目を瞑り、大きく深呼吸する。

そしてカッと目を開き、キーボードに指を走らせる。

オレはその様子をしっかりと記憶に焼き付けるのに徹した。

◇ ◆ ◇

「何だ……この曲は？　まるで、五感全てに働きかけているかのような……」

「先生！」

その医師は先程まで馬車馬のごとく働いていたが、突然院内アナウンスから曲が流れた途端ピタリと動きを止めた。

その曲によるフリーズが解ける前に、病室に別室を担当していた看護婦が息を切らして駆け込んでくる。

「突然……患者さんの発作が、止まりました！」



「……この音、治療プログラム！初春さんやったんだ！」

幻想猛獣にも異変が起こっていた。

御坂の放った電撃が幻想猛獣の触手の一本を破壊した。ここまでは、幾度となく繰り返された光景だったが、辺りにあるスピーカーから不思議なメロディが流れ始めてからその触手は再生されなかった。

「だったら今がチャンスってことね！」

これでゲームオーバーだと言わんばかりに、御坂は幻想猛獣へと向かって雷撃の槍を放った。体表面が真っ赤に焼け焦げて、幻想猛獣は形を保てずにもがき苦しみながら倒れた。

「はあく間一髪ってやつ……」

「気を抜くな!!」

「え!?!」

御坂が振り向くと、そこには足を引きずっている木山春生がいた。

「ちよ、アンタなんで——」

「まだ終わっていない！」

御坂が驚きの声を上げる前で、木山は幻想猛獣を見上げた。

御坂も幻想猛獣を見つめると、焼け焦げて倒れていた幻想猛獣がゆっくりと体を起こした。

「そんな！」

「ネットワークの破壊に成功しても、あれはAIM拡散力場が生み出した思念の塊。普通の生物の常識は通用しない！」

「話が違うじゃない！だったらどうしろって言うの!？」

「核だ。力場を固定させている核のようなものがどこかにあるはずだ。それを破壊できれば」

立ち上がった幻想猛獣から突然声が漏れた。

『n t s k 欲 g d t』

『d 羨 k n 苦 j p j』

『w d 遭 d n h だけ b p』

ノイズのようなそれは、徐々に言葉として、しっかりとした形を成して御坂の耳へと届く。

『努力は積み重ねてきた……。けど、幾千幾万の努力が、たった一つの能力に打ち砕かれ

る！……これがこの学園都市の現実だツ…!!』

『どれだけ慕ってくれてても……自分が相手の能力を超えたら、もう用無し。もう格下。……この学園都市では、人の優劣がはつきりと数値化して現れる。……上に上がったら、下には用無し。もう、おしまい』

『本物の超能力。それは馬鹿馬鹿しいまでに無茶苦茶で、悪い冗談としか思えない出鱈目な力。そこに行くには突破の足掛かりすら掴めない高くて厚い壁がある。……それを目撃した、あの瞬間。それを実感した、あの日から。上を見上げず、前を見据えず、下を見続けた。……それしか、出来なかつたツ』

それは、ネットワークから漏れ出した思念。被害者たちの嘆き、慟哭、この学園都市の現実に打ちのめされ、虐げられ、幻想御手に手を出した者たちの怨嗟の声――。

『毎日が、どれだけ無気力か』

『あんたたちには分からないでしょうね』

『その期待が、重い時もあるんですよ』

その中に佐天の声も混ざっていた。

「……………」

御坂は、前に進む。

一步、前に。掌に紫電を纏わせながら。

「下がってて。巻き込まれるわよ」

「構うものか！ 私にはアレを生み出した責任がある！」

「あんたが良くても、あんたの教え子はどうするの!?!目を覚ました時、あの子たちが見たのはあんたの顔じゃないの!?!」

木山は御坂に最もな事を告げられて、口を噤む。

「こんなやり方しないなら、私も協力する。そう簡単に諦めないで」

御坂は木山に、まっすぐ見据えてそう告げた。

その背中に、幻想猛獣は触手を飛ばす。

木山が危険を告げる前に。

触手は御坂に触れることすらできずに、木端微塵に吹き飛んだ。

「あとね……あいつに巻き込まれるんじゃない。私が巻き込んだじやうって、言ってるのよー」

御坂は振り向きざまに電撃を放った。

誘電力場を発生させ、地面に逃がすことで直撃を避けていた幻想猛獣だったが、御坂はそんな事をモノともせずに出力を上げ続ける。そして誘電力場に守られているはず

だった幻想猛獣の体が焼け焦げ始める。

(電撃は直撃していないのになんで……。そうか、……。強引にねじ込んだ電気抵抗の熱で体の表面が消し飛ばしているのか!? ……まさか、私と戦った時のアレは全力ではなかったのか!?)

「——ごめんね、気付いてあげられなくて」

木山が驚愕している中、御坂が幻想猛獣に向かって声をかけた。幻想猛獣はそれに応えるように触手を束ねて大きな手にすると、御坂に向かってその手を叩きつける。御坂はその触手を砂鉄によって弾き飛ばした。

『誰だって』

『能力者に』

『なりたかった』

なおも幻想猛獣が御坂に向かって氷柱を繰り出す、それを砂鉄の壁で難なく打ち破る。

「頑張りたかったんだよね」

『しょうがないよね』

『あたしには何も……』

『なんとかして……』

『力を』

幻想猛獣が鳴き叫び、それと共に学生の叫びが木霊する。

『……なんの力もない自分が嫌で。でも、どうしても憧れは捨てられなくて』

「うん、でもさ。だったらもう一度頑張ってみよう」

御坂はポケットからゲームコーナーで使われるメダルコインを取り出し、親指の上に乗せて、それを天へと高く弾いた。

「こんなところで、くよくよしてないで。自分で自分に、嘘つかないで——もう一度！」
弾いたコインが手元に落ちてくると、御坂は笑顔でそう告げて自分の能力の代名詞である超電磁砲を放った。

凄まじい閃光と共に幻想猛獣の体を貫き、それは少しの狂いもなく幻想猛獣の核である三角柱を体から弾き出して撃ち抜いた。

核のようなものを砕かれた幻想猛獣は、その体からエメラルドの光を漏らしながら崩壊を始め、まるで幽霊だったかのように跡形もなく消えた。

いや、《帰った》というべきか。



日が傾き始めたころ。

木山春生は手錠をかけられて警備員の護送車へと歩いていった。

「あのー！」

そんな木山に御坂が声をかけた。木山が振り向くと、御坂が気まずそうな顔をしていった。

「……どうするの、子供たちのこと」

「もちろん諦めるつもりはない。もう一度やり直さ。刑務所だろうと世界の果てだろうと。私の頭脳はここにあるのだから」

木山が自信たっぷりと言うと、御坂と初春は安堵して微笑む。

「ただし」

だが次に放たれた木山の一言で、怪訝そうな表情をした。

「今後も手段を選ぶつもりはない。気に入らなければその時はまた邪魔しに来たまえ」

警備員の護送車に乗せられた木山は黄泉川先生と共に去っていく。

「やれやれ、懲りない先生だわ」

さて、ここでの用は済んだことだしオレは退散するか……。

「ねえちよつと」

踵を返そうとしたところで御坂から声をかけられる。

「……………なんだ？」

「私……………木山の記憶を見た時、あんたと同じ名字が聞こえたのよ」

なに？

「それに、初春さんを抱えて走っていたあんたの動きは普通じやなかった」

よくもまああんな戦いでよそ見る暇があったな。こっちは一度腕が千切れかけたんだぞ。

「あんた……………一体、何者なの？本当に無能力者なの？」

「……………」

御坂の問いにどう答えようか考えていると、タクシーが一台近付いてきた。降りてきたのは白井だった。

「お……………ね……………え……………さ……………まあう!!」

「ぐへえ?!……………な、何?!黒子!!」

何が起こったかというと、白井はタクシーから降りるとともに空間移動をして距離を

詰めて御坂に真正面から抱き着いたのだ。

御坂はその衝撃で唸り声を発しながら、地面に背中から激突する。

「黒子は心配しましたのよ！心を痛めておりましたのよ！……ハッ！御髪に乱れが！お肌は無数の擦り傷が！へっへっへ……どうやら電撃を放つ体力も残っていない様子。ここは黒子が？隅々まで見てさすって癒してあげますの!!」

なんだこれ。生真面目そうな感じの時とはまるで別人だ。

「……なあ初春。ひよつとして白井は……」

「ああ、清原さんは知らなかったんですね。白井さんは御坂さんLOVEの変態さんなんですよ。風紀委員の仕事をしているときはノーマルなんですけど、御坂さんが絡むともう凄くて」

つまりあの三バカと同類か。マジ引くわ。

まあ、白井の変態のお陰で上手く誤魔化せそうだな。

「じゃあお邪魔虫は退散するからあととはごゆっくり」

「ちよつ、こらつ、逃げんな——!!」

後ろから御坂がなにか叫んでいるが無視してその場から立ち去る。

それにしても虚数学区の正体があんな怪物だとはな。

AIM拡散力場とは能力者が無自覚に発してしまふ微弱な力のフィールド。いわば『自分だけの現実』という能力者が持つ独自の感覚・認識、現実の常識とはズレた世界の一端が現実には僅かながらに干渉している。

能力者一人程度ならなんということないが、数百以上となると相互干渉を起こして現実には大きな影響を与える。塵も積もれば山となるとはまさにこのことだ。

それに生まれたてとはいえ、幻想御手に束ねられた1万人分であればどの力を振るつたのだ。

もしも学園都市満ちる能力者180万人分のAIM拡散力場が相互干渉を重ね束ねられればいったいどうなるのか……。

木山が学園都市上層部は能力開発に関してなにか隠していると云っていたが、ひよつとしたら幻想猛獣のようなのが関係しているのかもしれない。

その一端に触れてしまったとなれば木山に何もしないと到底思えない。

それに、御坂の話だと木山はキヨハラの名を知っているようだ。いったいどこまで知っているか確認しようにも既に連行された。面会なんかすれば記録が残って上に目をつけられるリスクもある。仮にリスク覚悟で面会したとしても素直に教えてくれそ

うにない。

釈放の方はまあなんとかなるだろう。

あとは……………。

オレはスマホの画面を操作し、ある人物に電話を掛けた。

幸いにも、その人物はすぐに出てくれた。何かを言われる前に、オレは素早く話を切り出す。

「頼みがあります」

◇ ◆ ◇

同時刻。

学園都市第七学区の一角に鎮座する、窓の無い奇妙なビル。

巨大なガラス容器の中で逆さまに浮かぶ長い銀髪に緑眼の『人間』が、笑っていた。

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』が見ているのは、空中に直接表示された四角い画面だ。

その画面には高速道路で起こったある現象がスロー再生されていた。

とある少年の腕に光線が掠り、肉が抉れて中の筋組織が見えてしまっている。

だが、直後に傷口にノイズのようなものが走ったように思えた次の瞬間には、彼の身体には傷一つ残っていないかった。それどころか焦げた服すら元の状態に戻っていた。

「オートリパリス肉体再生とは原理が違う。まるで時間が巻き戻ったようだな……………」

普通ではありえないような現象に、『人間』の笑みはさらに深くなったのだった。

もう一つの決着

幻想御手事件が収束し、三日が経った。残っていた夏休みの宿題をほぼ終わらせにかかったり、偶然鉢合わせた御坂からの追及を逃れたりと忙しい日々は過ぎ、小萌先生のアパートに向かったのだが……

「不幸だ——!!?」

開けた扉の先では、包帯まみれの上条がインデックスにお粥を頭からかけられていた。

「つて、え?うえ!!? 清原!!?なんで!!?」

「……悪い。邪魔したな」

「おい! おい清原さん!!? なんで扉を閉めているんでしようか!!? ちよつと!

ちよつと待ってコラ!!?」

「ごゆつくりと」

「ごゆつくりじゃね——つ!!?」

これ以上騒がれても面倒なので部屋に入る。

「ところでお前のその怪我……魔術師にやられたのか?」

「……………ああ、まったく歯が立たなかつた」

話を聞くと、幻想猛獣を倒された日の晩に銭湯に行く最中に女魔術師に襲われたらしい。

その女魔術師の戦い方は肉弾戦中心であるため、上条にとって相性が悪かつたそう
だ。

「……………お前異能を使う相手以外だと本当にクソ雑魚だな」

「怪我人相手にもう少しオブラートに包んで言つてほしいんですけど!？」

怒られた。だがこうはつきり言つてやらないとこいつちゃんと自覚しないだろう。
言つても無駄だろうが。

そんな話をしていると扉が再びノックされる。「こもえ、かな?」とインデックスは
言つたが、それはない。わざわざ自分の部屋に帰つて来るのに客がいようと扉をノック
することはない。

扉の前にいるのは二人……………いや気配が一つ増えた。

「上条ちゃん、なんだか知らないけどお客様みたいですよー」

ボロい扉はがちゃんと音を立てて開いた。

「あれ? 清原ちゃん来てたんですかー」

「お邪魔します」

挨拶を交わしながら小萌先生の後ろにいる二人組みを見る。

一言で表すなら凄いい格好だ。見るからに不審な空気を放っている。一人は燃えるような赤毛に黒い神父服。もう一人は………露出狂女か？長い髪をポニーテールに括り、へそ出しの白いTシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、腰のウエストベルトには日本刀という格好をしている。木山といいなんでこう露出趣味の女が学園都市にいるんだ。

二人はまずインデックスを見て、次に上条を見る。赤い神父がなんかほくそ笑んでいる。そして最後にオレを見ると二人揃って誰だこいつと言いたげな顔をする。

「なんか影の薄いのがいるんだけど………誰だい君は？」

出会い頭に失礼な奴だなこの赤髪神父。

「……このウニ頭とは同級生で友達だ」

「あつそ。どうでもいいけど」

聞いといてその態度はないだろ。

赤い神父はオレが動かないことを確認すると再び上条の方を見る。完全に舐められている。

「その体じゃ、簡単に逃げ出すこともできないみたいだね」

赤い神父の言う通り上条の体はボロボロだ。本当なら病院のベッドの上にいた方が

いい。

動かない魔術師二人と動けない上条。

膠着状態が続くが、そんな中インデックスだけがずっと魔術師二人の前に出る。

「帰って、魔術師」

魔術師二人の顔が歪んだ。

「どういうことだ。その顔は敵に向けるものではない。インデックスとは顔見知り：いや、それ以上の関係なのか？」

「お願いだから、もうとうまを傷つけないで」

一度言葉を口にしたからか、インデックスはより強く拒絶の言葉で魔術師二人を殴りつける。その悲痛な叫びがトドメになったようだった。女が唇を噛み締める。赤い魔術師の瞳から光が失せた。

「リミットまで、残り十二時間と三十八分」

赤い神父は意味深な言葉を告げる。

「その時まで逃げ出ささないかどうか、ちよつと足枷の効果を見たかったのさ。予想以上だったけどね。そのオモチャを取り上げられたくなかったら、もう逃亡の可能性は捨てた方がいい。いいね？」

二人の魔術師は要件だけを言って部屋を出ていった。

上条は奥歯を噛み締めている。インデックスの方は涙と安堵でボロボロになっている状態で上条の方を向く。

「大丈夫だよ、私が取引すれば……とうまといこの日常はこれ以上壊させない、これ以上は絶対に踏み込ませないから平、気——」

意識を失って倒れるインデックス。

上条さんはそんなインデックスを抱えて先ほど自分が寝ていた布団へと運んだ。しゃがんだままインデックスを見ている上条の表情は心配と言わんばかりだ。

そして何かを悩んでいる。

「……………上条、病み上がりだろうが少し外の空気吸わないか？」

「え？」

何言ってるのでしょうか？と言わんばかりの顔をしている。

「いや、部屋に籠ってばかりはあまりよくないからな」

「清原ちゃんの言う通りです。シスターちゃんのこととは先生に任せてください。上条ちゃんには息抜きもたまには必要です！」

オレの意図を察してか、小萌先生が援護に入る。

「あついやね小萌先生、そのこの状況で」

「時間ならまだあるだろ」

オレは上条へと寄って耳元でボソボソと話す。

「良いから……それにリミットのことを小萌先生の前で聞いていいのか？」

そう言ってからようやく現状を理解したのか、頷く。

魔術師たちもまだ上条やインデックスに手を出すことはないようなので問題ないはず。

オレと上条の二人で小萌先生のアパートから出て、近場の喫茶店に入ることにした。

オレはとりあえず黄泉川先生に『変なコスプレ衣装の男女二人組の不審者を小萌先生のアパート付近で見かけた。男の方は男子寮での放火、女の方はうちの学校の生徒に暴行を働いた疑いあり』と通報しておいてから上条に話を切り出す。

「……単刀直入に聞くんが、あいつらはインデックスと知り合い……いや友人か？」

「っ!? な、なんでそれを!？」

「声を落とせ。周りに聞かれる」

「あつ、すまん」

周りがかつちを向いているのに気づき、上条は軽く頭を下げて謝罪する。

「……で、なんであいつらがインデックスの仲間だつてわかつたんだよ？」

「さっきの二人の反応に違和感があったからなんとなく……どういうわけかインデックスのほうは敵と認識していたが」

「……………」

後半の言葉に上条はまた辛そうに奥歯を噛み締める。反応から見てあいつらからなにか聞いたようだ。

「……………ああ、実はインデックスを追ってる魔術師っていうのがインデックスと同じイギリス清教の奴らだったんだ」

そうして上条はこれまでのことを話してくれた。

結論から言うと、ステイル（赤い神父）と神裂（変な格好の女）がインデックスを付けた理由は、彼女の延命措置のためであった。

インデックスには、自らの目で見た光景を全て記憶することのできる完全記憶能力がある。生まれながらの天才であった彼女は、その能力をもつてして、10万3000冊の魔導書を寸分違わず記憶した。

魔力を作れない体質ゆえに、その魔導書を使うこと自体はできなかったが、それでも果てしない危険性だけは孕んでいた。本人にその自覚はないだろうが。

しかし、1冊でも膨大な情報量を持つ魔導書を、10万3000冊も記憶したのが祟ったらしい。結果、彼女の脳の85%は圧迫され、残る15%で日常生活を送っている。

インデックスという少女の特異性がそうさせるのか、15%しか働いていない脳で

も、凡人としての生活はできるらしい。

だが、ここでネットクになってくるのが、完全記憶能力だ。忘れるというメカニズムで容量を確保できる凡人とは違い、インデックスはそこに情報が追加されていく。

だからこそ、一年置きに記憶を消す措置が必要になった。記憶を消さなければ、インデックスの脳は容量を超え、死を迎えてしまうのだから。

そのために、ステイルと神裂はイギリスの魔術結社『必要悪の教会』から逃げ出したインデックスを追い回していたのだ。

そしてその周期は、今日の午前零時に迫っていた。

「……ということなんだ」

全てを聞き終えたオレの頭は——嫌に冷めた。

「あいつらはそう主張してるのか？」

「ああ、神裂が言ってたんだ。とても嘘ついてるようには見えなかった」

それは本当のことなのか、なんて聞く必要も無い。

はつきりした。

上条もステイルも神裂も——みんな揃ってバカだ。

「……お前、そんな適当な？よく信じたな。それでも学園都市の住人か？」

「は???どういふことだよ?」

「科学的根拠から言つて、負荷のかかる演算処理ならともかく、何から何まで覚えるだけで、その記憶が脳を圧迫する事なんてまずありえない」

「―は?」

「小学生でもわかる計算だ。脳を15%使つてたつた一年分しか記憶を保持できないなら100%だと人間は何年しか保持できないことになる?」

「そ、それくらい俺にもわかるわ!100%は15%の約6倍だから6年になる……つてあれ?」

「それだとインデックスは六歳か七歳までしか生きられないことになる。だがインデックスはどう見ても十代の少女だ。仮に記憶を消して延命してるとしても、他の完全記憶能力者がそんな不治の病じみた体質なら、普通はもつと有名にならないか?」

仕方ないのでオレは人間の脳について内容を噛み砕いて説明する。

人の脳というのには140年分の記憶が可能になっている。さらに、記憶する場所も違う。

言葉や知識を司る意味記憶　運動の慣れなんかを司る手続き記憶、そして思い出を司るエピソード記憶など……。それぞれの記憶は入れ物が違う。

つまり、どれだけ本の内容を覚えて意味記憶を増やしたところで思い出を司るエピソード

ソード記憶が圧迫されるなんてことは脳医学上絶対にありえないのだ。もしそこまでヤワなら能力開発や幻想御手なんて実現するはずがない。

「これでわかったか？」

「……ああ、けど神裂はなんであんな？を……？」

「多分あいつらも騙されてるんだろう。考えてもみる。10万冊以上もの魔道書の知識を自由に扱えるような奴なんて、管理する立場からすれば危険極まりない爆弾のようなものだ。何らかの制限を設けて自由に動けなくさせるのが普通だ」

「……それが、魔術が使えないのと、記憶の消去だつて言うのか？」

「都合の悪いことを知られたり反意を持たれたとしても、記憶を消してしまえば何ら問題無いからな。少女一人に魔道書の知識を詰め込むことを強いるような連中だ。充分に有り得る話だろ」

「？をつくらなもつとましな？をつくとその上層部に呆れるが、こんなことにも気付かず？を鵜？みしたあいつらにも相当呆れる。ググレカスと言つてやりたいな。」

まあそれはともかく、仮に真実だとしたら、あまりにも残酷な内容。上条は握り拳を作り、その顔に怒りを滲ませる。

何故、彼女がこんな目に遭うのだと言いたげだ。

だが今問題にすべきなのは、インデックスを苦しめてきた教会の制限は一体なんなの

かということだ。オレたち能力者を統べる学園都市が『科学』の最先端なら、魔術師を統べる必要悪の教会は一体『何の』最先端であるか。

「魔術でインデックスを苦しめていることになる。それなら後は」

「俺の出番か!!？」

ガタツと上条が席を立てて店を出ようとする。

「落ち着け」

「ぐえ!？」

オレはすぐに上条の襟を掴んで席の方へ引き戻した。

「なんで止めるんだよ!？」

「ここまでえげつない手段を取るような奴のことだ。解呪しようとする者が現れた場合に備えてなんらかの防衛装置くらいは付いてると考えるのが普通だ。うかつに解呪してそれが働いたら大惨事になる」

「ツ……だけど、このまま放置なんて出来るかよ……!？」

「やるなどは言っていない。ただそれなりの準備が必要だ。幸いタイムリミットまで時間はある」

それに学園都市は広い。人気のない場所なんて調べればいくらでも見つかる。

◇ ◆ ◇

日が沈みかけている完全下校時刻。

オレたちはインデックスを森におおわれた空き地に連れていった。

インデックスはベンチに寝かせているが、容体は悪化の一途をたどっている。まるで熱病に魘されてるように全身を汗でびっしょりにして、吹けば消えてしまいそうな浅い呼吸をずっと繰り返している。口の中の呪いの影響が出始めたのだろう。

だがそれも今日で終わりだ。

「……………なあ清原、本当にあいつら来るんだろうな？」

「律儀に一年おきに記憶消去をやっていた連中の事だ。リミットが迫ってる中標的から目を離すわけがない。もう少ししたら追いついて来るだろう」

あとは待つだけだ。

「それじゃあオレはここまでだ。あとはお前だけで頑張ってくれ」

「ああ」

オレはその場から離れたように見せかけ、近くの草むらに身をひそめる。

上条がインデックスの側に座って待ち続ける事10分。二人に近づくと人影が見えた。

「……………まったく、こんなところまで逃げるなんてね。手間を取らさないでくれるかな。

道中毎回職質されてこっちはイライラしてるんだよ」

こつちの意図に気づいていないステイルは気だるそうに上条に文句を言う。

「はっ、逃げる？俺はお前たちが出てくるのを待ってたんだよ」

「は？」

「こつちはお前らに色々と言いたいことがあつてな。小さな女の子を散々追い回して傷付けるだけじゃ飽き足らず、でたらめな？をついて返せと要求して拒否したらオレをポコポコにする始末だ！まじでふぎけんじゃねえぞこら！」

上条はオレが用意したセリフ通りに叫ぶ。妙に感情がこもってるのは本人が実際に怒りを抱えているからだろう。

「え？ちよつと待ってください。？とはなんのことですか？」

「だから！記憶のし過ぎで脳が圧迫されて、インデックスが死ぬなんて？だよ！インデックスが苦しんでるのはお前らがこいつに仕掛けた魔術のせいだろうが！」

「え？え？」

なにを言っているのか二人は理解できていないようだ。

「いったいなんの話をしているんだ君は？」

「まだとぼけるのかよ！インデックスの口の中をたまたま見た時、なんか変な紋章があつたんだぞ！こいつがタトウーを入れる趣味持つてないなら何だつてんだよ!!」

「——っ!?!」

上条の言葉に二人は目を大きく見開く。そしてすぐにインデックスの口を開かせて中を確認した。

「これは…呪印!?!しかも定着させて身体への負荷の効果を継続的に与え続けるもの!?!」
「どうして彼女にこんなものが?」

「まだしらばつくれるのかよド素人が!」

混乱している二人の側で上条が怒鳴りつける。

「お前らほんとふざけた趣味してるな?インデックスをこれで苦しめるだけ苦しませてから記憶を消していつてるなんて…」

「ちよつと待つてくれ。僕たちもこれがあるなんて今知ったんだ!」

「この状況でまだしらばつくれるか。じゃあそれともなにか?お前ら以外の誰かがこれを仕掛けて、お前らには完全記憶能力が原因だなんて大?を吹き込んでこんな茶番劇を強いてきたってことか!?!」

「——っ!?!」

「そんな——」

どうやら二人は答えにたどり着いたようだ。

なぜこんな三文芝居をしているのかと言うと、オレたちが導き出した答えをそのまま二人に伝えたところで素直に信じるかどうか考えた場合、ノーという結論に至った。学

園都市の住民とはいえオレたちはただの高校生。脳医学の医師免許を持っているわけではないし、何より魔術師との関係は敵と呼んで他ならない。こっちの言葉をあいつらが信じるとは思わない。

なら、二人に自発的に呪印を見つけさせ、責めるような態度で少しずつ同じ答えへと辿り着くよう誘導すればいいだけのこと。

そして最後に共通の目的を持たせる。

「二人の女の子にふざけたのつけやがって！こんな俺の右手で消してやる！」

「ちよ、おいなにをー」

スタイルの制止を無視して上条はインデックスの口の中に右手の指を差し込む。

バキン——ツという音が響いた瞬間、上条の右手は勢いよく弾かれて後ろへ突き飛ばされた。

「がっ……!?!」

地面の上を何度かバウンドし、ようやく止まる。

「あいたたた……」

痛がっているようだが、上条はすぐに起き上がった。無事なようだ。

問題はインデックスの方だ。

「——警告、第三章第二節。Index—Librorum—Prohibitor

u m o o o 禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全境界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、十万三千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

ベンチからゆつくりと立ち上がり、翡翠色の瞳を真っ赤に染め上げ、そこに無機質な魔法陣を輝かせるインデックスがいた。

「――書庫内の十万三千冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術を組み上げます」
これまで心優しかった少女がまるで糸で操られる人形のように小さく首を曲げた。

「――侵入者個人にたいして最も有効な魔術の逆算に成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

インデックスの瞳から黒い亀裂が辺りの空間にヒビのように走る。
そして亀裂の奥から凄まじい光の柱が放たれた。

レーザー兵器のように光り輝く純白の『光の柱』が発射されて、それを上条は右手で真っ向から受け止めた。しかし光線は手のひらで止まっただけで、かき消えるどころか右手を押し返してくる。たまらず左手で右手を掴んだ上条。右手の処理が追い付いていないようだ。

光の奔流が迸り、余波がこつちにも流れていく。

「『龍王の殺息』なんてそんな、あの子が魔術を使える筈は……」

ステイルたちはこの状況を？み込めていないようだ。

「んなの考えればわかることだろ！インデックスはこうして魔術を使ってる、それなら教会の『インデックスは魔術を使えない』なんて話も？だったってことだ！冷静になれよ。冷静に考えてみる！禁書目録なんて残酷なシステム作りやがった連中が、テメエら下っ端に心優しく真実を全部話すとか思ってるのか！目の前にある現実を見ろ！」

呆然とする二人を余所に、インデックスが新しく言葉を発した。

「——『聖ジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。他の術式へ切り替え、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

インデックスが呟いた瞬間、インデックスから放たれるエネルギーの質が大きく変化した。

じりじり、と上条の足が後ろへ下がる。

未だに呆然としている魔術師二人に上条が一喝する。

「ボサツと突っ立ってんじゃねえ!!これで全部分かつただろ!!インデックスを助けるにはお前達の力も必要なんだ!!」

いくら異能の力を、神の奇跡すら打ち消す右手があっても全ての魔術に的確に対応する事は出来ない。専門家の知識と助言が必要だ。

「テメエら、ずっと待ってたんだろ!? インデックスの記憶を奪わなくて済む、インデックスの敵にならなくて済む、そんな誰もが笑って誰もが望むハッピーエンドってヤツを!!」

インデックスの顔の前に現れた魔法陣から魔術が発動され、不規則な起動の弾丸が発射される。しかしそれは吸い込まれるように上条の右手へと次々と着弾しては砕けるように消えていく。

「ずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！英雄がやってくるまでの場繋ぎじゃねえ！主人公が登場するまでの時間稼ぎじゃねえ！他の何者でもなく他の何物でもなく！テメエのその手でたった一人の女の子を助けてみせるって誓ったんじゃねえのかよ!?!」

無理矢理に光の柱を押さえ続ける上条の右腕から鮮血が吹き出す。

「ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！絵本みてえに映画みてえに、命を賭けてたった一人の女の子を守る、そんな魔術師になりたかったんだろ！だったらそれは全然終わってねえ！始まってすらいねえ!!ちつとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ!!」

必死の防御を続けていても語るのをやめない。例え上条が一人でインデックスを救い出せたとしても、それでは意味がないのだ。あいつらが自ら立ち上がらなければ。

「手を伸ばせば届くんぞ！いい加減に始めようぜ、魔術師！」

魔術師二人の瞳が揺れる。上条の必死の訴えが届いたようだ。

グギリ、と上条の右手の小指が不自然な方向に曲がる。折れたとわかった時には凄まじい勢いで襲い掛かる光の柱は、ついに上条の右手を弾き飛ばした。

上条の右手が、大きく後ろへ弾かれる。

完全に無防備になった上条の顔面に、凄まじい速度で光の柱が襲い掛かる。

で、オレがやる前によく動いた。

「救われぬ者に救いの手を
Salvare!!!」

光の柱がぶつかると直前、叫んだ神裂が二メートル近い長さの日本刀を振るった。すると七本のワイヤーが音を引き裂くような速度でインデックスの元へと襲い掛かる。

だがそれはインデックスの身体を狙うものじゃない。インデックスの傍にあったベッチがワイヤーによって引っ張られ、インデックスにぶつかる。突然にバランスを崩した彼女はそのまま後ろへと倒れ込む。インデックスの眼球と連動していた魔法陣が動き、上条を狙っていたはずの光の柱が大きく狙いを外す。

まるで巨大な大剣を振り回すように木々が避け、夜空に漂う漆黒の曇りが引き裂かれた。おそらく大気のさらに向こう、宇宙まで届いただろう。

引き裂かれた木々から葉や枝が落ちてこない。代わりに、破壊された部分が光の柱と

同じく無数の「白い光の羽」となって舞い散っていた。暗闇の中で仄かに光りを放っている。

「これは、魔王の殺息——伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！ それにたつた一枚にでも触れてしまえば、いかなる力があるうとも大変な事になります！」
神裂が叫んで警告する。だが光の柱の束縛から逃れた上条は、地面に倒れ込んだインデックスの元へ一気に走ろうとする。

だが、それより先にインデックスが首を巡らせた。

巨大な剣を振り回すように、夜空を引き裂いていた光の柱が再び振り下ろされる。

「——イノケンティウス魔女狩りの王!!」

と、身構える上条の前で炎が渦巻いた。

巨大な火炎の塊が人の形を取り、上条を守るように両手を広げて真正面から光の柱を受け止めた。

「行け！上条当麻!!」

「ああ！ 分かってる！」

上条が全速力で駆ける。距離は短い。障害が無ければ数歩跳べば上条の手が届く。

「ダメです——上!!?」

もう手を伸ばすだけのところで神裂が叫んだ。空を舞っていた光の羽根はその数を

増やし上条の行く手を阻むようにその身をくねらせる。アレは危険だな、見た目以上に危険な匂いが相当強い。

だが上条は前へと突き進んだ。そして、そこにある黒い亀裂、さらにその先にある魔法陣へと右手を振り下ろし、あつさり切り裂いた。

「——警、告。最終………章。第、零………。『首輪、』致命的な、破壊………再生、不可………」

そう呟いたのを最後に、自動書記の——インデックスの瞳から光が戻り、糸が切れた人形のように倒れ込んだ。

上条は直ぐ様倒れた禁書目録を抱き寄せ、その無事を確認して穏やかな笑みを浮かべる。

光の柱も消え、魔法陣もなくなる。

だが、上条へと舞い落ちる光り輝く羽根は消えることはない。

上条の右手ならばどんなものも掻き消せる。だが気づいていないし手が足りない。

仕方ない。一つ貸しだぞ上条。

—— 既に対象物のリード完了。

—— 未知の構造物と法則性を検知。

—— リードした対象を“異物”と認識。

—— 空中に舞う全対象を分解開始。

—— 完了。

◇◆◇

「あつ聞いてよあやと！とうまったら非道いんだよ！私が本気で心配したのに！」

「それで制裁を与えたのか？」

「うん、噛み付いちゃった」

「見ればわかる」

「おい！少しは怪我した友人を心配しろよ！」

大学病院の病室に入ると、プリプリと不機嫌そうなインデックスと真っ白なベッドの上でポロポロ（包帯まみれと歯型付き）になっている上条がいた。大怪我の割には元氣そうさ。インデックスにジュースでも買って来るといいと言つて小銭を渡して病室から出してから、上条に話題を振る。

「昨日の晩はあの後どうなった？」

本当は一部始終を見ていたが、その場にいなかったように装うことにする。

「ああ、死ぬような思いをしたが……とりあえずインデックスの問題は解決したな」

ステイルからの手紙によると、あの後教会の方に脳と魔力に関して騙してたことに説明を求めたら様子見、回収は先送りになったらしい。普通首輪外れたら着け直す為に連れ帰りそうだが、教会に不信感を募らせている現状では抵抗されるのを想定して大きく出れないのだろう。

「ということはインデックスは学園都市にしばらくいるってことか」

「ああ、なんかそうなるな」

「ちなみにどこに泊まらせるんだ？」

「……………あつ」

上条はなにも考えていなかったようだ。

インデックスは学園都市の住人じゃない。ちゃんとした手続きを取らないで入ったとなれば警備員にお世話になってしまう。ならばどこかに匿うしかない。しかもできるだけ目の届く範囲で。

「うーん、ここは小萌先生のところに——」

「あほか。小萌先生は黄泉川先生と飲み仲間なんだぞ。アパートで出くわしたら言い訳のしようがないぞ」

「た、確かに……っ？ つか、なんで小萌先生と黄泉川先生が飲み仲間って知ってるんだ？」

「……この前黄泉川先生に飲み屋に連行された」

「マジかよ。つてあの時か」

あの時は本当に大変だった。

幻想御手事件収束の少し前に「これから小萌先生と鉄装と飲みに行くじゃん？ ついてくるじゃんよ」と連行された。それでいいのか警備員。

その後飲み屋についていき、焼き鳥とオレンジジュースをいただきながら先生たちの愚痴を延々と聞かされた。小萌先生には「かすり傷です」と言っていた不良との一件も鉄装先生と黄泉川先生は喋ってしまい、「なんで黙ってたのですかー！」とぼかぼかアタックを貰った。

そしてべろんべろんに酔った小萌先生と鉄装先生が言葉を発しなくなった頃、小萌先生を背負い、鉄装先生を背負った黄泉川先生と共に小萌先生の家へ向かって上条に小萌先生をパスした。

まあそれはともかく、

「残る候補は一つしかないな」

「な、なんだよ清原？ そ、その残る候補って……」

インデックスをどこに泊まらせるか。正直常識的に考えて色々問題があるだろうが仕方がない。

「……………上条、退院したら同居人ができるな」

「ちよつと待て。どういう意味だ？」

「だから、お前の部屋にインデックスを居候させるんだよ」

「いやいやいやいや！ちよつと待て！それはいくらなんでも不味いでしょうが！」

まあ、そりゃあそういう反応をするだろうな。思春期真っ盛り of 未成年が歳の近い異性と同居とは問題大ありだ。

「だがあいつを外に放逐するのも不味いだろ？」

「ぐっ……………確かにそうだが」

「お前らの問題だ。後はあいつと二人で話し合うんだな」

「って、そんな他人事みたいに!？」

「だって他人事だからな。ま、オレもできる限りは手を貸すさ。できる限りは」

これでも譲歩してる方だ。それだけ伝えてオレは病室を出る。『クツソお、不幸だあああああ!!』という叫びが病室から聞こえたが気にしない。

昨日までのインデックスを巡る一件から色々と分かったことがあった。

どうやら学園都市の上層部は魔術師の存在を認知しているようだ。

オレが二人の魔術師のことを通報したが、数時間が経ったところで警備員と風紀委員

の双方が二人の搜索を中止した。黄泉川先生に確認したところ、上から通報はイタズラのものだから手を出すなど圧力をかけられたようだ。あの程度の通報でそこまで過敏になるという事は、魔術師二人が学園都市内で活動していることを黙認していると考えて妥当だ。

それに昨日の戦闘でステイルやインデックスの魔術を解析してみたところ、どこか学園都市の能力者の異能と似ている部分があった。

木山春生が以前言っていた『学園都市の上層部は能力に関する重大な何かを隠している』と何か関係があるのかもしれない。おそらくこの前密かに回収したアレも………。

これから行うことには少し慎重に動かないといけないかもしれないな。

おのれ鯖缶娘

幻想御手事件が収束し、インデックス禁書目録の件も一応は片付いて数日が経った頃、ようやく男子寮での生活に戻ることができた（隣人は同居人ができた）オレは改めて夏休みを満喫する。

『とうまあああああああああつー！』

『ぎゃああああー！』

………またか。これで何度目だ。

退院した上条も寮に戻ったが、他の隣人たちに知られてはいろいろマズい居候との同居生活が始まった。

開始早々何度もウニ上条がインデックスになにかやらかしてしまっているようで、隣の部屋からインデックスの怒号と上条の悲鳴が絶えない（というか他の部屋まで聞こえない心配だ）。その都度オレに助けを求めてくるが、面倒臭くなったときは居留守を決めるか外出することになっている。

だつてできる限りは手を貸すとは言ったがほぼ毎日とは一言も言っていないし。

さて、今日は用事を終わらせて帰りに買い物でも『き、清原助けてくれー！』………はあ。

玄関の扉を開くと白い修道女シスターに頭を現在進行形で丸かじりされているウニ頭が立っていた。本当に隠す気があるのだろうかこいつは。

「ウ……上条」

「今ウニつて言いかけたろ!？」

「気のせいだ。今日はインデックスになにやらかしたんだ?」

「なんで全部俺に原因がある前提で聞いてくるんだよ!？」

「がじがじ……ぶはっ、あのねあやと、とうまが突然私の服を脱がしたんだよ」

「上条、悪いことは言わない。自首しろ」

「ちよっ、誤解だ!足を滑らせてその拍子にインデックスの服を掴んじまったんだよ!」

「だが脱がしちやっただら?」

「うう……」

「取り敢えず懺悔したらどうだ?見習いとはいえ一応修道女だし」

「あの、そのアドバイス何度も聞いた気がするのですが……」

「それだけ進歩がない証拠だ」

「なんか最近清原が俺に冷たいんだけど!？」

毎度こゝんなくだりに付き合わさればそうなる。

コイツのラッキースケベについては異能の力じゃないようだが、何の力だろうか?

「とうるか上条、お前今日はいいののか？」

「は？なにが？」

「なにがって、今日は補習の日だろ」

「……………あつ」

忘れてたな。顔を真っ青にした上条はすぐに自分の部屋に戻った。

『や、やべえ！遅刻だ遅刻！インデックス、いい加減離してくれ！』

『まだお仕置きが済んでいないんだよ！ガジガジガジガジ』

『いぎやああああ！不幸だああああああああつ！』

さて、今度こそ出かけるか。

オレの休日の過ごし方はシンプルだ。何故なら自分からは誰に声をかけることもなく一日一日が過ぎていくからだ。つまるところ自業自得孤独なのだ。

だがそれは別にいい。自由ってことだけで満足しているんだ。余計な幸せは願うまい。というより、友人は多ければいいというものではない。最近はその風を考え始めていた。多くの人との繋がりがあればしがらみは増える。それはそれで面倒だ。

例えば友人が入院していたのにオレは一回も見舞いに行かなかつたり…………。

「うーん…………あの清原さん、この文章問題如何やるんですか？」

「そこはこの公式を使えばいい。長文でも一個ずつ噛み砕いていけば内容が理解できる。例えば……」

「あつ、ホントだ！」

「計算をミスればやり直しが大変だから見直しは怠らない方がいい」

「はい」

「清原さんこれって如何やるの？」

「むーちゃん、少しは自分で考えようよ」

幻想御手事件の後に佐天達の見舞いに行かなかったことを初春に怒られ（本人達は気にしていなかったが）、じゃあお詫びにファミレスで何か奢るのと宿題を手伝う事になった。

「……と、言う訳だが、今の説明で分からなかった人は居るか？」

一通りの説明を終え、全員を見渡して聞いたが、全員が首を左右に振った。つまり全員理解したと言う事だ。

「いやあ、この前もですけど清原さん教えるのすごく上手ですね」

「ホントホント！補習で出された宿題もう殆ど終わっちゃったよ！」

「今すぐにも学校の先生になれるんじゃないですか？」

佐天の言葉を皮切りに、他の面々も急に褒めてきた。

「大げさだな。教科書見ながらアドバイスをしてるだけだ」

「いやいや、その割には分かりやすいですし教科書にも載ってないものも教えられたんですけど?」

「たまたま覚えてただけだ」

それに皆別に頭が悪い訳ではないから宿題が進んだだけだ。上条と他の変態二人は救いようがない。

「もう、謙遜が過ぎますよ。あつ、さては褒められて照れくさいんですね?」

さて、見当違いをしている佐天は置いといて……

「それよりあともう少しだからとつとと終わらせるぞ」

「えー」

「ちえー、せつかく息抜き出来てたのに」

「息抜きつて、まだ始まって一時間も経ってないだろ」

「すみません。アケミちゃんとまこちゃんは一時間も集中力が持たなくて」

「………はあ、仕方ない。一旦休憩にするからなにか注文するといい。食べ終わったら残りを終わらせるぞ」

「「「はい清原先生!」」」

「………先生はつけなくていい」

「褒美をやると分かったらテンション高いな。」

「どれにしようかな〜」

「あつ、今週のスペシャルパフェ美味しそう!」

「でもアケミちゃん、それちよつと高くない?」

目をキラキラさせた女子達がメニュー表を見ながらどれにしようかと吟味している間に、オレはコップ片手に席を立つ。

「あれ?清原さんおかわりするんですか?」

「ああ」

「あつ、じゃああたしもおかわりするので一緒に行きましょうか」

そう言って佐天は残りのジュースを飲みほし、ドリンクバーの方へと向かうオレの後に続く。

「やっぱりお昼には鯖缶が一番なわけよ!」

「あんたファミレスまで来て鯖缶ってどうよ。そんなのその辺のスーパーで買えるじゃない、って、ここも鯖弁ないじゃないの」

「どつちもどつちですね。どこでも食べれるなら家で映画でも見ながら食べる方が超有意義です」

「……南西から信号が来てる……」

近くのテーブル席にいた見た目的にも個性的にも派手そうな四人組みの少女達を尻目に通路を進んでドリンクバーに着くと、オレンジやカルピス、メロンソーダ、アイスコーヒーといったジュース類がある。前に自販機でホットおしるこ、黒糖サイダー、きなこ練乳、抹茶ミルク、ヤシの実サイダーといった独特な缶ジュースが売ってあるが、さすがにファミレスには無いな。

オレは無難にアイスコーヒーを選択する。

「あのつ、清原さん」

コップにアイスコーヒーを注いでいると、佐天が横から声をかけてきた。

「どうした？」

「えっと、ありがとうございます。その、皆を助けてくれて」

「いや、オレはなにもしてない。木山を止めたのは御坂で、全員を直接助けたのも初春がやった」

「でも幻想御手の正体に真っ先に気づいたのも清原さんみたいですしやつぱりすごいですよ。名探偵も顔負け、みたいな」

「見破ったあとにその主犯に捕まってしまったけどな」

あの後黄泉川先生に散々弄られたし。

だから特に礼を言われるようなことはしていない。礼を言われるようなことは。

「そういえば気になることがあるんですけど清原さん、御坂さんと何かあったんですか？　なんか最近御坂さんに清原さんが何者なのかすごく問い詰められるんですけど」

「さあな、こつちからはあいつに何もしていない」

御坂の奴、会って数週間しか交流がない相手に聞いたところでたいした情報も得られるわけがないというのに無駄なことを。

幻想御手の一件以来、御坂と街で出くわせばオレと木山の記憶に出てきた老齢の科学者との関係とオレの正体について問い詰めてくる。オレについて語れることは特にないため適当に返して立ち去ろうとするが、あいつはしつこいうえに喧嘩っ早い。何度電気を放たれたことやら。いざとなればウニを差し出すことも考えないと。

「それよりお前はあの後後遺症とかはないか？」

「はい！　色々な検査を受けさせられたうえに経過観察も兼ねてしばらくは入院したんですけど特に問題なかったです。ただ……………」

物寂しそうに佐天は自身の両手を見た。元に戻ったのは健康だけではないようだ。

「名残り惜しいか？」

「あー本当言うとその通りです。あんな目に遭つてもやつぱり能力が使えた時の感動が忘れられなくて…………ワンチャン少しだけ残ってるかなー、って期待しちゃってました。でも…………良いんです。憧れはそう簡単には消せそうにないですけど、ほんの一時だけで

も能力が使えただけラッキーだった、って思うことにします。それに……………」

「能力が使えなくてもあたしには心配してくれる皆がいますから。今なら能力以外にも大切なものが沢山あると思えます」

そう言つて少し晴れやかに佐天は笑う。

オレと違い佐天達は能力者になりたくてこの学園都市に来たのだろう。だが無能力者の烙印を押され、その上御坂や白井のような高位能力者が傍にいて自分は何もできないという無力感に苛まれ、幻想御手の手を出したのは必然だ。そこからいつまでも悲観し続けるばかりでは仕方ないと割り切っている。能力だのレベルだの固執して、振り回されることはもうないだろう。

「今回の件で成長したということか」

「えっ？突然なんですか？」

「いや、気にするなそれとそう無理に諦める必要もないじゃないか？」

「えっ？」

「幻想御手で一度は本来持っていた能力よりも上の力を体験できたんだ。なら、その時の感覚を思い出せばまだ可能性があるんじゃないか？」

「えっと、つまり初春のスカートを何度も捲ればその内能力が向上するということです

か？」

だからその発想はおかしい。

確かに『自分だけの現実』は妄想・思い込みパーソナルリアリティに近く、非常識な現象を現実として理解・把握し、不可能を可能に出来ると信じ込む意志の力とも言われる。だからより具体的なイメージをする事で出力や制御の巧さが変わるのだが……………

「あくまでも可能性だからほどほどにな」

佐天がイメージしやすいなら必要な犠牲か。

「ルイコーそろそろ注文するよー」

「あつ、ごめんごめん今いくー！まこちんたちが待つてるので戻りましょ、うっ!」

佐天が席に戻ろうと動いた時、突然足元がグラリと小さく揺れだした。

「え!?なに!」

「地震!」

店内全体で発生する振動に、席に座っていた人間は反射的にテーブルの下に隠れているのがある。

「わ、わっ」

だが通路で立っていた佐天は突然の揺れでバランスを崩してオレの方へ倒れ込んでくる。

「つと」

避けるのは容易いがそれでは佐天が怪我するため受け止めることにした。それにより抱き合う体勢となる。

約40秒ほど経ってようやく揺れが収まった。

「お、収まった?」

「最近多いね」

店内にそれほど被害はなく、落ち着きを取り戻し始める。

「もう大丈夫みたいだぞ」

「っ……………」

「佐天?」

「ふえっ!?は、はい!」

しばらく固まっていた佐天が今の状況に気づいたようで、慌てて飛び退くように離れた。異性との接触に耐性がないのか耳元まで顔が真っ赤だ。

「えっと、その、すみません、いきなり抱きついてしまつて」

「気にするな。あの状況なら仕方ない」

「そ、そうですか。そ、それじゃあ席に戻りましょうか!」

「大丈夫か?なんかすごい挙動不審なんだが」

「だ、大丈夫ですよ！ほ、ほら！行きましょう！」
「あ、ああ」

その後の勉強は捗り、午後までに早く終わった。なお、しばらくして初春から佐天によるスカート捲りの頻度が増えたことに関する抗議の電話が来たがそれは別の話。

◇ ◆ ◇

勉強会を終え、今日の用事を済ませたオレは近くの食材店で買い物をしていた。学園都市の人口の8割が学生であるため、御坂や白井のようなお嬢様（仮）のような一例を覗いて殆どの学生は自炊をしている。かくいうオレもその一人だ。

かつていた場所では食事もなにもかもが管理され、好きなものを好きなものを自分で作って食べるというのとは縁がなかったため、最初のころは戸惑った。だが幸いにも上条や土御門の妹に大体のことを教わり、一人でこなせるようになった。なお、コーヒ―を淹れ方はさすがの二人も知らなかったためそこは独学で習得した。

買い物籠を持って店内を歩き回る。今朝のインデックスが上条の頭を齧るのを思い出してウニが食べたくなつたが高いため魚で我慢することしよう。

魚コーナーに向かい、脂ののつた鮭の切り身や刺身を、残り2個となっていた鯖缶を2個とも取って籠に入れる。

「…そういえばそろそろコーヒー豆が切れるな」

コーヒー豆の入った袋も籠に入れてレジへ向かった。

「合計2436円となります」

「じゃあ2500円からで」

「はい。64円のお釣りです。ありがとうございますごさいました」

「どうも「ぬわああああ!!」ん？」

支払いをすませたとき、鯖缶があつたコーナーから女子の甲高い叫び声が聞こえた。

鯖缶コーナーの方を見ると、ベレー帽をかぶった小柄な外国人風の金髪少女が嘆いていた。

「申し訳ありません。たった今在庫も全て売り切れまして」

「そんな…売り切れ…」

店員からの言葉に少女はこの世の終わりかのように手と膝をついた。鯖缶がないだけで大げさな。

あつ、こつちの視線に気づいて振り向いた。そしてオレに、正確にはオレが手に持っている袋の中から覗く鯖缶に少女の視線が釘付けになっていた。

ここでオレがとるべき行動は一つ。

「…見なかったことにしよう」

その場を立ち去ろうと外に出ると、同じタイミングで歩き出し追いかけてきた。オレは少し足を速める。

「ちよつとアンター！」

逃げていると思われたのか（実際逃げてるが）追いかけて腕を掴まれる。

「なんだ？」

「その袋の中に鯖缶入ってるでしょ？」

「だとしたら？」

「頂戴！」

直球だな。

「勿論ただでは言わない！定価の10倍で買い取って…あつ、マネーカードしか持つてきてなかった」

どこまで本気なんだこいつ。金銭的取引が成立しないと分かった途端、金髪少女は今度は服の中からぬいぐるみ人形を出してきた。

「じゃ、じゃあ…この衝撃注意なキヌートなドールはどう？」

「いや、オレに人形で遊ぶ趣味はない」

男に人形を勧めるのはどうかと思う。

「な、ならム力つく輩に向けて撃てば超爽快なデンジャラスクラッカーは？」

今度はロケットのような形をしたクラッカーを出してきた。

「そういう騒がしいのも趣味じゃない」

「もう！なにと引き換えならくれるってのよ!？」

貰うの前提か。というか少女が出している人形やら大きなクラッカーはどうやって小柄な体に収納してるんだ？

「そんなに鯖缶が好きなのか？」

「す、好きなんてものじゃないわけよ…長時間摂取しないと動悸が激しくなるし、手足が震えて幻覚も…」

鯖缶に中毒症状を引き起こす成分って入ってたか？それが本当なら知り合いの名医に診てもらったほうがいい。

それより断ったら貰うまでつき纏ってきそうだな。

「…分かった。そこまで言うのなら2つあるうちの1つやる」

「ホント!？」

貰えるのと分かった途端、少女の表情がぱあつと明るくなった。

「後からもう1つねだっても駄目だからな」

「分かっているって。いやーあんた人畜無害でちよろそうだったからガンガン押せばいけるだろうと思ってたんだけど見事的中ってわけよ」

「いらぬいみいだな」

「あー?!冗談だから!」

袋から鯖缶を取り出して少女に渡す。

「んじゃ、早速♪」

「つてこゝで食べるのか」

少女はスカートの中から取り出した白いテープのようなものを缶詰の蓋の端に巻く。そしてそこに金属の棒を差し込んだ途端テープは点火し、

ボウッ!

一気に煙が噴き上がった。

「しまった!火力強いのと間違えた!」

爆竹のように連続的に破裂音を立てて火花を散らしながら中身がロケットのように空中へ打ちあがり、そのまま綺麗な放物線を描いて下降していく。そして路地裏近くに置かれていたピンク色のワゴン車にべちゃつと焦げた中身が墜落した。

「あ……あ……」

「……………じゃあそういうことで」

「ちよ、ちよっと待って！」

鯖缶の無惨な姿に呆然とする少女を置いて立ち去ろうとするもすぐに回り込まれた。

「なんだ」

「い、今のは結局不幸なアクシデントなわけで……！」

「いや、残りの一個は今日の献立に使うがら」

それにさつき「もう1つねだっても駄目だ」と通告した。

「ウウ……ぐすんつ、日本ノヒト冷タイネ」

貰えないとわかったら今度はヨヨヨとウソ泣きを始めた。さつきまで日本語ペラペラだったのに片言になっている。

「ホームシツクヲ故郷ノ味ヲ忘レタイダケナノニ」

「買った鯖缶は国産だが」

「ぐ、ぐぬぬ……細かい事はいいからさつきと寄越すわけよ！」

痺れを切らした少女がうがーと袋に向かって飛び掛かって来たため、オレはひらりと避ける。狙いを外した少女は地面に着地してすぐに態勢を整えて再び飛び掛かってくる。オレはまた避ける。それでもめげずに突進してくる。

傍から見ればまるでスペインの闘牛と闘牛士みみたいだ。

「おいおい、人の車汚しておきながらなにイチャイチャしてやがんだ？ ああ!?!」

「こんな暑い日に見せつけてんじゃねえよ！」

「ん？」

少女の突進を回避しているうちに、路地裏からガラの悪い男達がぞろぞろ出てきてオレ達を取り囲んだ。

「はあ？これのどこがイチヤイチャしているように見えるってわけ？あんた達目が腐ってるんじゃないの？あと車汚したのこイツだから」

「おい、何サラツと人に罪なすりつけようとしてるんだ」

どう見ても不スキルアップ良っぽい連中に少女は物怖じしない。

「外国人の嬢ちゃんは強気だな！」

「俺達相手にそんな態度取ってもいいのか？俺達はあの“ビッグスパイダー”のメンバーだぞ」

聞いてもいないのになんか組織名を名乗りだした。

「ビッグスパイダー？なにそれ？アンタ知ってる？」

「いや、オレも知らん」

「はあっ?!俺達を知らねえってどういうことだよ!?ビッグスパイダーだぞビッグスパイダー!最近ここらで能力者狩りをやってるあの！」

「そんなの知らないわよ」

去年学園都市に来たばかりのオレには武装無能力者集団のことなんか詳しくない。というか今自分達の犯罪を告白したぞ。

「まっ、喧嘩をするくらい自分の名前でやらない奴なんて結局雑魚なわけよ」

「ちよ、そういうことは思っても口にするな」

今すぐに少女の口を塞ぐべきところだが、もう遅かったようだ。全員額に青筋を立てて殺気立っていた。

「~~~~~！テメエ……女だからって付け上がってんじやねえぞ!!」

バットを持った一人が少女に向かってバットをおおきく振り上げてきた。少女はそれに物怖じせず反撃できるような態勢を整えだした。

だが、

「お待ちなさい!」

突然の乱入者の登場で両者ピタリと止まる。

「大勢で女性に暴力を振るおうなどという狼藉、お天道様が許してもこの常盤台のこんじょうみつこ婚后光子が許しませんわよ!」

突然現れたサラサラの長い黒髪の常盤台生が手に持った豪奢な扇子を広げ、昔のドラマのキメ台詞を言う。

「ちっ、能力者かよ」

「なんか知らないけどこれで形勢逆転なわけよ！やっちゃえー」

「おい！あれを使え！」

能力者の登場に不良たちの動きに変化があった。リーダー格らしき男がそう叫ぶと、どこからともなく黒板を爪で引つ掻いたような耳障りな甲高い音が周囲に響き渡る。

「っ!?!」

すると婚后と名乗った常盤台生は急に頭を押さええて蹲ってしまった。

「……………、これは……………?!?!」

「ちよつとアンタどうしたの!?!」

「はっ、残念だったな。能力が使えなきや、常盤台のエリートさんもただのガキよ」

どうやら婚后が苦しんでいるのはこいつらが原因のようだ。

「いろいろと予定が狂っちゃったが、まず先にこいつを痛めつけてやる！」

そう言いつつ、婚后にバットを右手に持った男が近付く。考えるよりも体が動く、そんな文章で良く使われる表現を、オレは体感していた。

男がこれ以上の行動をする前に、袋を地面に置いたオレは地を蹴り肉薄する。

男が彼女に向けて振り上げようとしていた右腕を掴み取り、動きを制限した。

「なっ……………！」

「え……?」

「いつの間に!？」

「アンタ……それでその子になにしようとしていた？」

「あ、っ、っ!いい、痛い痛い!」

周りがオレに戸惑うが、オレは気にせず腕を捻る。男は持っていたバットを落とし、悲鳴を上げながら左手で必死にオレの腕をつかみ剥がそうとする。

「ンの野郎!」

横から他の男が拳を振り上げて迫ってきた。オレは掴んでいた男を向かってくる拳の方へと引き寄せる。

「ぐぼっ!？」

「あつ、す、すまん……」

バットの男を盾にしたことで、見事拳がバットの男の顔に直撃した。「困め困めえ!能力者じゃないならタコ殴りにしろ!」

残りの不良が一齐にかかってくる。しかし、たかだか人間6人では、オレの相手は務まらない。

一人目の頭部を蹴って壁に打ち付けて気絶させる。

二人目の鳩尾を肘で突いて卒倒させる。

三人目はすばやく投げ飛ばし、四人目は裏拳で殴りつけ、壁に強打させる。

「とりゃああー！」

「ぐふっ！」

蹲る婚後を狙った奴がいたが、金髪少女が飛び蹴りで対処した。

「く、くそおっ！」

男達のうちの一人がオレに向かって走り出し、手に持ったナイフを突き出す。刃の先端が腹に届か届かぬかというところで、オレはナイフを握る男の手を払い、同時に身を軽くよじった。ナイフは空を斬り、脇へと素通りする。そして次の瞬間に男の頭に強烈なアッパーカットを叩き込んだ。

「な、なんだよコイツ……………」

「おい逃げるぞー！」

動ける奴は不利と判断したようで、路地裏近くに停めていたワゴン車に乗り込んで逃走した。

「……………流石にやり過ぎたか」

不良全員を倒したあと、オレはため息を吐きそうになっていた。上条たちと一緒にいないというのに、夏休みに入ってから不良と喧嘩になったのはこれで2度目だ。黄泉川先生にまた色々と言われそうだ。

取り敢えず常盤台生に声を掛けた。

「大丈夫か？」

「あ、はい。ありがとうございます……」

あの不快な音が聞こえなくなっただけから頭痛は収まったようだ。きよろきよろと辺りを見回すと、あの鯖缶依存症の金髪少女の姿が見えなかった。

「アイツどこ行った？」

「あの方なら先程袋から缶のようなものを取って立ち去りましたわよ」

あいつ……。今度会ったら絞めるか。

「あ、あの……。何かお礼を……」

「いや、そういうのはいい」

「そ、そういうわけには………！」

「じゃ、代わりに警備員アンチスキルに通報しておいてくれ」

それだけ言って、オレはその場から立ち去った。

なお察について中身を確認したが、炎天下に長い時間いたため刺身が駄目になっていたのは本当に残念だった。

祭に行くと大抵知り合いと出くわす

警備員によりビッグスパイダーなる武装無能力集団ススキルアウトが一斉検挙されたとの情報がネットニュースに挙がった数日後の8月2日。

オレはバスである祭りに向かっていた。

それは学園都市の名門女子中学、常盤台中学の寮祭、盛夏祭である。

常盤台中学は女子限定の学舎の園に存在するが、寮は学舎の園の中と外にあり、同じ風紀委員である白井とその知り合いである御坂がそこに住んでいる。普段は普段は一般には開放されていないが、年に一度外部に開放される文化祭のようなイベントで寮生が招いたゲストの訪れる日とのこと。

なんでこうなったのか、それは隣で座る教え子（仮）のお陰である。

「いやー、楽しみですすね、清原さん」

「……そうだな」

昨夜佐天から、白井から寮祭へのチケットを二人分貰ったから一緒にどうかと誘われた。あっちの用事の方で余裕ができ、特に断る理由が見つからなかった。無理に断ればまた初春から小言を言われるだろう。

「……ちなみに、清原さん」

「何だ？」

「盛夏祭だと、常盤台生はみんなメイド服らしいですよ」

「……それは御坂や白井もか？」

「そうですよ？」

ダメだ想像出来ない。ただでさえ校則で私服も着れないというのに。

「メイド服ってそんなにいいものか？」

「嘘でしょ!? それでも男ですか！」

「どうした急に？」

「メイドって言ったら男の人にとってはロマンでしょ!?? 可愛い女の子がフリフリの制服を着て『お帰りなさいませ、ご主人様♡』って笑顔で出迎えてくれるんですよ!??」

「それはオタク文化のдарろ……」

前に土御門にメイドの良さを教えるとか何とかで一度メイド喫茶に行ったことがあるが、青髪や土御門が騒がしいだけで正直なにも伝わらなかつた。

「今更だが初春と一緒にやなくて良かったのか？」

「……あー、初春はですね……うん」

何かあったのだろうか? もしかしたら、あまり気にしちやいけない所なのかもしれな

い。

そう思った時だ。後ろの席から聴き慣れた甘ったるい声が聞こえてきた。

「呼びました？」

「わっ、う、初春!?!」

「へっへーん、私を甘く見ないで下さい。お嬢様への憧れは佐天さん以上ですよ?」

「それ『私はあなた以上の庶民です』って言われてるだけなんだけど……」

普通に初春が来ていた。

「佐天さんが清原さんを誘っちゃったから、苦労しましたよ。他に招待されてる人を探すの」

「なんて意地汚い真似を……大体、あれは仕事サボった初春の自業自得じゃん」

大体、理解した。

白井が仕事をサボって佐天と遊ぶ初春を見つけ、わざと佐天にだけチケットを渡したのだろう。もう一人連れて行けるので、佐天は自分を誘い、初春は他の招待されている人を探した、というわけだ。

「で、誰に誘ってもらったの?」

「私よ」

そう言うのは、初春の隣に座っていた眼鏡をかけた黒髪セミロングの女子だった。

「あつ、固法先輩！」

「佐天さんも来てたのね。一緒にいるのは…ひよつとして彼氏さん？」

「ち、違いますよ！清原さんとはそういう関係じゃなくて、その、先生と教え子みたいな関係です！」

「えつと……どういう意味かは分からないけど、私の勘違いみたいね」

眼鏡の少女からの質問に佐天が強く否定した。オレとカップルだと思われるのが嫌なようだ。

「私は白井さんと初春さんと同じ支部に所属する固法このりみい美偉よ」

「……清原綾斗だ。よろしく」

「ええ、よろしくね。ひよつとして佐天さんが話してた名探偵ってあなたのこと？」

取り敢えず互いに自己紹介しているとんでもない話を聞いた。

「…どんなことを言っていた？」

「なんでも虚空爆破事件と幻想御手事件の犯人を得意な名推理で突き止めたとか」

「おい佐天、なに適当なこと言いふらしてるんだ」

「ええ？大体合ってるじゃないですか？それに清原さんが実は凄い人だってこと皆にも知ってもらおうかと思ひまして」

「お前な………」

余計なことを。悪意がないだけに質が悪い。

「ふふ、二人共仲がいいわね。あつ、せつかくだし、よかつたら二人共一緒に回らない？」

「あたしは別に構いませんよ」

「右に同じく」

「決まりね」

との事で、四人で回る事になった。

「ここ、ここが常盤台の寮……！」

「すごい大きいですね」

「そうだな……」

バスからオレ達は常盤台中学女子寮の前に立っていた。

「これ、ホントに学生寮？すごいすぎない？」

「さつすが常盤台です！入る前から違いを見せつけてくれますす！」

「本当にすごいわね」

石造りのそれは近代的な街並みには少し合わないが、それを振じ伏せる威厳を誇っていた。白亜の壁は現実味を奪っていくようで、むしろその方が自然だとすら思えてくる。

「ここで待つのも何だし、そろそろ入らない？」

「そうですね。初春ー？行くよー？」

「はーい」

固法が子供ののように喜ぶ初春を呼び、共に荘厳な玄関から中に入る。

「あれ？清原じゃん」

「…どうも」

「あつ、この間の警備員の先生だ」

「その節はどうも」

チケツトを見せて入ると、正面玄関には黄泉川先生と鉄装先生がいた。

「警備員のお仕事ですか？」

「そうじゃんよ。そういう清原はまさか寮祭に参加か？学校じゃいつも三バカと一緒にいるばかりで女子と縁のなさそうなお前が？」

「……まあ成り行きで」

「どんな成り行きじゃん。しかも三人の女子と一緒にで」

「な、夏休みだからって、そういうので浮かれるのはよくないと思いますよ！」

「鉄装先生はなにを勘違いしてるんですか？」

黄泉川先生に真正面から言われると確かにそうだなと思う。もし青髪や土御門にこ

の状況を見られでもしたら異端審問会に突き出されてしまいそうだ。できれば知り合
いとのエンカウントは避けたいものだ。

「あ、あのう、ひよつとして清原さんって黄泉川先生のいる学校の生徒なんですか？」

「お？お前講習にいた…」

「講習？」

「いやあ…実はこの前幻想御手云々で特別講習に受けに行きまして」

そういえば飲み屋に連行された時、黄泉川先生と小萌先生がうちの学校で幻想御手使
用者を対象とした特別講習をやるのか言ってたな。当然佐天達もその講習に参加した
のだろう。

「なんだ清原、お前自分がどこの学校に通ってるのか言ってたのか？」

「言う必要性を感じなかったもので」

主に御坂に対して。

「まったくお前は…」

「えっと、清原さんって学校でもいつもこんな感じなんですか？」

「隣のクラスの生徒だから全部は把握してないがこんな感じじゃん。こういうのに参加
するならもつとクラスの連中と仲良くすればいいのに」

痛いところつくな。人付き合いがまだわからないオレには難しい課題だ。

「あつ、そういえばなんか1年の女子たちの間でやっていたイケメンランキングで5位に入っていたな」

「おー、確かに清原さん顔立ちが良い方ですもんね」

「あつでも根暗そうランキングの上位にもランクインしてたって聞いたじゃん」

「お、おお……」

何だよその、なんとかランキングって。女子の闇は深いな……。

「オレの話は置いといて、そろそろ行つていいですか？」

「おう、楽しんでくるじゃん」

これ以上立ち話を続けるといらんことを言いそうなので、中に入ることにする。

「来年度以降の開催に向けて、なんで私のそんな姿が参考になるの黒子お!!」

先に進むとメイド姿になっていた御坂がいつもの制服姿の白井をしばいていた。いったいどういう状況なんだ。佐天達はその光景が当たり前かのような反応を見せているし。

「いやー相変わらずやってますねー」

「御坂さーん。白井さーん」

固法が声をかけることで二人はオレ達の存在に気付いた。

「ん？あ、固法先輩。佐天さんに初春さんも……って、なんでアンタまでいんのよ」

「佐天に誘われたんだ。言っておくが電撃放ってくるなよ」

「し、しないわよ！ここでやったら寮監に殺されるじゃないの！」

えっ、ここの寮監はレベル5の御坂より強いのか？

「清原さんはともかく、どうやって初春は来れたんですの？よもや非法な手段を

……

「違います！固法先輩に頼んで同伴させてもらったんです」

「なんて意地汚い同僚なんですの」

「もう！白井さんまで佐天さんと同じことを！大体白井さんが私にチケットを渡さな

かったから苦労したんですよ！」

「仕事をサボってパフェで一服していたうえに淑女を脳筋呼びわりした天罰ですの」

そりゃあ誘われないわけだ。

「そういえば白井さんはメイド服着ていませんね」

佐天が話題を変えるために質問をする。

「今日の黒子は盛夏祭の記録係。来年度以降の開催に向けて、カメラで参考写真をとつ

ておりましたの」

「人のスカートの下を撮っていてよくそんなこと言えたものね黒子お」

「いひやいいひやい。お姉さま頬をつねないでくだひやい」

祭りでも白井の御坂に対する変態度は相変わらずらしい。

「さ、さて…皆様、素晴らしい催しがございますのでどうぞ、どうぞ楽しんでくださいな。それではご案内いたしますのでこちらに……」

「ちよつと待てー」

白井が案内しようとするその時、横から聞き覚えのある声の人物に呼び止められた。

「白井ー。ビュツフェの手伝いはどーするつもりだー?」

「舞夏?」

横から声をかけてきたのは、土御門元春の義理の妹、土御門舞夏つちみかどまいかだった。

「おー、清原綾斗も来てたかー」

「清原さんの知り合いですか?」

「……こいつの兄貴とはクラスメイトだからその関係でな」

「ちなみに料理の仕方を教えてやった師匠でもあるのだー」

ちなみに「私が満足するのができたら合格だ」と合格基準がとても高く、味見の度に何度も作り直しをさせられた。

「えーつと……とりあえず紹介するわね。繚乱家政女学校の土御門舞夏。今回の寮祭の料理も彼女の学校に指導してもらったのよ」

「繚乱つて……あのメイドスペシャリストを育成するつてトコですか!？」

「土御門舞夏であるー困ったことがあれば何なりと申すが良いー」

言いながら、舞夏は片足を軽く曲げ、スカートの端を摘み上げて挨拶した。ヨーロツパにおいて『献身』を表す伝統的な挨拶だが、さすがと言おうか、あの変態の義妹ながらとても様になっている。いつも街中でよく見る清掃ロボットに乗ってばかりのためギヤツプが凄い。

「しかし清原綾斗が女子を複数連れてここに来るとは……はっ!まさか清原綾斗にカミジョー属性が付加されたか!？」

「それはない」

カミジョー属性なんてものがついていたらラツキースケベを連発して捕まってしまうはずだ。

「あの…カミジョー属性つてなんですか?」

「佐天達は知らなくていい。それより舞夏は白井に用があるんじゃないか?」

「おーそうだった。さー白井、来るのだ」

「ちよつ、ちよつと……!」

互いに自己紹介を終えると、舞夏はのんびりした口調のまま白井の襟首を引っぱってどこかへ消えていった。

「じゃあ私が案内するわね。どこか行ってみたいトコとか——」

「はい!!はい、はいはいっ!!あります!!行きたいトコ!!あります!!」

白井がいなくなり、代理で案内係になった御坂の言葉を、初春が遮る……というか掻き消すように叫んだ。

バラバラバラバラーツ!!と、黄色いパンフレットが物凄い速さで開かれ、初春はチエツクを入れた場所を指さして御坂に迫る。

「え、えーと……どこかしら?」

「このこと、このこと、あとこのこも!!それからここからここまで!!」

「それ全部じゃん……」

元氣よく発言する初春に佐天が呆れる。

「みなさん。今だけはいつもの初春飾りじゃありません。リミッター解除です!」

何を言ってるんだ。初春の背後には、何故か煌々と燃え盛る炎が見えた、気がする。対照的に、佐天や固法は冷えた苦笑いを浮かべたままだ。

「あはは……まあ順番に回って行きましようか」



砂糖でできた芸術作品、ステッチの体験教室、生け花の展示、美術の絵画作品、寮の

中に何故か存在する巨大図書館などを見て回ったが、お嬢様学校だけにどれもクオリティが高かった。初春が壊れてお嬢様口調になってしまった程。

途中で固法が別行動をとり、オレは現在他の三人と共に食堂に来ていた。

昼食はビュッフェ形式となっており、ファミレスはおろかそこらの飲食店では到底出ない高級料理店に並ぶような食材を存分に使った料理がずらりと並ぶ光景は圧巻の一言だ。

「むむむ……………」

「どうした佐天？取らないのか？」

綺麗に盛り付けられたケーキの前で立ち往生している佐天に声をかける。

「いやー、こんな綺麗なケーキを切るのがなんか勿体なくて」

シUGークラフトをつまみ食いした人間の口から出た言葉とは思えない。

「じゃあ私が……………」

「あーっ！あーっ！あーっ！」

横から初春が割って入って来てケーキをナイフで両断した。そしてかなり大きめのサイズのをトングで取って皿に乗せた。

「そんなに食べられるの？」

「甘い物は別腹って言うじゃないですか」

初春の言う『別腹』とは、1990年代に作られた俗語で「お腹がいつぱいでも好きなものは食べられる」、といった意味がある。実際にオレキシシンというホルモンや味の変化により、これ以上は食べられない満腹状態でも甘いものなら食べられるのは医学的に証明されている。だが満腹状態なのにさらに食べてしまうのをやり過ぎた場合は生活習慣病につながる。

テーブル席の方を見ると既にダウンしているのがいた。

「う、うううう……く、苦しい……」

大量の皿を横に置いた鉄装先生が胃腸のあたりを押さええながら苦しんでいた。どうやら食べ放題にテンションが上がって食べ過ぎたようだ。その様子に向かいに座っていた黄泉川先生が呆れている。

「そんなに沢山取るからじゃん」

「だ、だって……食べ放題なんですよ」

「つたく、生徒には見せられない姿じゃん」

すみません。もう手遅れです。その様子を見ていた初春も皿にのせていたケーキの量を減らし始めている。

「ほら立った立った。仕事に戻るじゃん」

「うぐつ?! 乱暴にすると逆流します〜!」

容赦ない黄泉川先生に引きずられて鉄装先生が食堂から姿を消した。
「頂きます」

食べ過ぎは体に毒だと教えてくれた鉄装先生に感謝を、そして無事（中のものを出さないこと）を祈りながら、まずはをグラタンをスプーンで掬い取り口に運ぶ。

おお……これは美味しい。ファミレスとかで出るのは一線を駕す味だ。他のも美味しい。これほど美味しいのがバイキング形式で食べ放題というのだから驚きだ。
「清原さん美味しそうに食べてますね」

黙々と食べているときまで御坂となにか話していた佐天から声をかけられる。

「そりゃ誰だつて美味しいと思うさ」

「そんなに美味しいですか？」

「一度食べたコンビニ弁当の502、6548倍は美味しい」

「け、結構細かい数字ですね」

「あ、あはは……」

オレの真面目な解答に初春と佐天は若干引いた様子を見せた。

美味しそうに食べるオレを見て、彼女達も腹を空かせたのだろう、自分達が取った料理を口にする。

「んんん美味い！」

「ああ、もう帰りたくありませんっ！」

二人も料理の美味しさにご満悦のようだ。

「そういえば御坂はどうした？」

「なんか午後のステージの準備があるとかで何処かへ行きましたよ」

「ステージってなにかやるのか？」

「さあ？ サプライズみたいなので聞かないことにしました」

「そうか」

おかわりを取りにオレは再び料理の方へ向かう。

そこには涎を滴らし、目を輝かせながら料理の置かれたショーケースを見つめる銀髪の修道女が居た。

「美味しそうなんだよ……！」

「……何やってるんだ？ インデックス」

「うん？ あっ！ あやとっ！」

修道女——禁書目録はオレの存在に気付くと快活な笑顔を浮かべ、ブンブンと手を振る。

「あやとも来てたんだ！ここは凄いいね！美味しそうな料理がたくさん！」

「お前も来てるってことは……ウニの奴も？」

「うん！けど、とうまつたら私が良い匂いにつられていてる間にはぐれて迷子になっちゃったのかも」

「迷子はお前だろ」

まさかの人物に驚く。上条が同行しているということはあいつもこの盛夏祭とやらのチケットを入手していたようだ。おそらく舞夏あたりから貰ったのだろう。

となると、問題がある。上条は不幸体質とラッキースケベを掛け合わせた起爆剤だ。爆発物である御坂と鉢合わせしてしまえば面倒なことになるのは明白だった。

こっちに飛び火する前にあの馬鹿を見つけてお帰り願おう。その前に………

「それ、食べたいか？」

「勿論なんだよ！」

「じゃあ一緒に食べるか。食べ放題だから好きなのを好きなだけ食べればいい」
「ほんとっ?!分かったんだよ!!」

こうしてバイキングに銀髪シスターが参戦する。トングを使って皿に料理を大量に盛り付けると、オレと一緒に佐天達のいる席に向かう。

「あれ？清原さんそのシスターは？」

「常盤台って十字教系の学校でしたっけ？」

「あー……オレのクラスメイトの女友達だ。名前は——」

「禁書目録なんだよ！」

「イ、インデックス？」

「目次？」

「今流行のキラキラネームみたいなものだ。イギリスからこつちに遊びに来たらしい」

イギリスの魔術結社の切り札という点は隠して適当な作り話で誤魔化すことにする。

「それじゃ、よろしくねインデックスちゃん。私は佐天涙子」

「初春飾利です」

「うん！よろしくなんだよ！るいこ！かぎり！一緒にご飯食べていい？」

「勿論いいよ」

「はい」

「わーい！」

いただきますとインデックスは満面の笑顔でがつつき始めた。

のだが……。

「「ええ……」」

佐天と初春も困惑の声をあげる。目の前には回転寿司かと見間違う程の白い皿の山が築かれていた。

その奥では禁書目録が料理を片っ端から食べ……貪っている。

「美味しい！美味し過ぎるんだよ……！」

「……なあ、暴食は修道女にとつて大罪じゃないのか？」

「私は見習いだからいいんだよ！」

「ええ…………！」

明らかにその体格ではとつくに胃袋どころか腹が丸ごと破裂しているであろう量を余すことなくかき込み続けていく。食欲が留まる様子もなく、健啖家とかそういうレベルではない暴食っぷりにオレ達は軽く引いていた。食糧全部食い尽くす勢いに、この光景を見ているメイドたちも青ざめている。

さすがのオレもこの圧巻の光景には驚くしかない。同時に、この暴食っぷりに上条の食糧事情を何となく察し、同情した。今度何か差し入れを持って行こう。

「あ！ やつと見つけたぞインデックス！」

ようやく保護者が来たか。

「あ、とうまー！」

「お前なあ……勝手にいなくなるんじゃないよ。探し回っただろ？」

「ふんっ、とうまがいつまでも家電のセールに食いついていたのが悪いのかも。れいむが居なきや飢え死にしていたんだよ」

「悪かったて……つて清原？何でここに？」

「お前と似たようなもんだ」

「ふんすかと怒る禁書目録に呆れつつも謝っていた上条は同じテーブルにオレが居ること気付くと驚きの声をあげる。

「悪いな。なんかインデックスが迷惑を掛けたみたいで……」

「いや、オレにはなんの迷惑もかかってない」

オレには、だ。

「あの、清原さん。もしかしてこの人が清原さんの……」

「ああ、友達だ」

「あつ、セブンスミストで御坂さんと一緒にいた人ですね」

「えつと、君達は……」

「あつ、初めまして。あたし、清原さんの教え子の佐天涙子と申します！」

「佐天さんの友人の初春飾利です」

「これはご丁寧に。俺は上条当麻。この暴食シスターの保護者をやって清原とは同級生だ」

互いに自己紹介する。そういえばこのメンツが顔を合わせるのは初めてだな。

「…それより上条」

「ん？」

「ここには御坂がいる。鉢合わせする前にさっさと退散した方が良いでしょう」

「えっ!?ま、マジで……!?」

小声での忠告を受け、上条は目に見えて焦り出す。常盤台生なんだから寮にいるのは当然だろ。

「分かった。ほら、行くぞインデックス」

「あ、ま、待って欲しいかも!まだ腹八分目なんだよ!」

「その辺でやめとけよ!」

そう騒ぎながら上条が引きずっていく形で二人は立ち去っていく。白い悪魔がいなくなつたことでメイドたちは安堵の表情を浮かべていた。

「あ、あはは……なんか清原さんの知り合いに会いますね」

「清原さんも変わってますが、あの修道女さんも変わってました」

「言っておくが初春、上条も変人だし、アイツらの中でもオレの方が一番まともだぞ」

「いやいや、清原さんがマトモだなんて冗談でしょ」

どういう意味だ初春。

嵐が過ぎ去った後、腹を満たして食堂を後にしたオレ達は、表の方でやっているオークション会場の近くにて落札したと思しき高級そうなバッグをいくつも手に持った固法を見つけた。

「固法先輩も意外とミーハーなんですね？」

「あ、あなた達……！ふ、普段はこういうものには興味ないのよ？こ、これはそう！チャリティーなの！この収益は全額置き去りチャイルドエヤーの子供たちも寄付されるのよ。風紀委員としては参加しないわけにはいかないわ」

「……先輩、すごく言い訳くさいです」

「大体小学生くらいの置き去りに大人向けのバッグを寄付して違和感ありすぎだろ」
「うっ……」

オレと佐天からの指摘に固法は物凄く視線を泳がせた。

「そ、そうだ！あなた達も参加してみれば？」

「参加ってオークションにか？」

「えー？無理ですよ。あたし達はお小遣い少ないんですから」

「大丈夫よ。最初の額は安く設定されてるから。ほら」

固法に促されてオークション会場の方に耳を傾けてみる。

「さて、次の出品は『きぐるまー』の文具セット！まずは1000円から！」

「2000円！」

「3000円！」

オークションに参加している寮生達が小学生が好きそうな文具セットの価格を上げて言っていた。

「ね？」

「そうですね。じゃあ……」

初春もオークションに参加しようとしたその時

「1万円！」

物凄く聞き覚えのある声で会場が一気に静まり返った。

「あら？あなた達いましたの？」

落札した文具セットを手に、オレたちに気づいて近づいて来たのは、メイド服を着た白井だった。

「なんでいるのよ白井さん……」

「土御門さんが捜してましたよ」

「厨房抜け出して何してるのかと思えば、ただの文具セットに1万円って……」

佐天達は仕事をサボってオークションに参加していた白井に呆れるも、当の本人は全く動じていない。

「いいえ、ただの文具セットではありませんの。何故ならばこれはお姉さまがご出品なさったものなのですから」

御坂のだったんかい。

「この下敷きもノートも言うなればお姉さまの分身……………ああん！黒子の果報者！」

文具セットに頬をスリスリしながら体全体をクネらせている白井。青髪や土御門に引けを取らないぐらいひくくな。

「みなさん、ご機嫌よう」

取り敢えず白井を見つけたことを舞夏に密告しようか考えていると、後ろから誰かがオレたちに声をかけてきた。

「げっ、こ、婚后光子！」

「げっとはなんですの白井さん……………あら、あなたは！」

「?…あっ」

振り返ると、黒い髪の女子が立っていた。しかもなんか巫女服とメイド服が混じったいかにも土御門が好きそうな服を着て。というか、この前ビッグスパイダーとかいう不

良に絡まれていた時に助けにきて即ダウンした女子だった。名前は確か婚后だったか。その後ろには常盤台の制服を着た女子が2人いる。その女子2人は栗毛の髪をした女子と黒髪の女子だがどつかで見たような気がするな。

「こ、この間は助けていた দিয়েありがとうございます」

「あー……あれから体調はどうだ？」

「はい！頭痛はあの時だけでももう大丈夫ですわ！」

「あら？顔見知りでしたの??」

「ええ。この間能力が使えなかったところをこちらの殿方に助けていただきましたのよ」

「ひよつとして………ビッグスバイダーに襲われていた時の事ですの?」

「連中のは自業自得だ。それに最初にオレ達が絡まれてるところをこの子が助けようとしてくれたんだ」

婚后の登場に嫌そうな態度を隠さない白井がじろつとオレの方を見てきたため、連中をボコボコにしたことに関して弁明をしておく。

「……まあ過ぎたことなので取り敢えず事情聴取は後にしますの」

風紀委員にそんな権限はなかったと思うが？

「申し遅れましたわたくしは、婚后光子と言います」

知ってる。

「そしてこちらの2人がわたくしのお友達の湾内絹保わんないきぬほさんと泡浮万彬あわつきまあやさんですの」
婚后が後ろの二人を紹介し、二人は少し赤面しながらお辞儀をした。

向こうが名乗ったのだからオレも名乗ることにする。

「オレは——」

「あの……失礼ですが、清原綾斗様でして？」

「そうだが……」

なんで名前を知ってるんだ。それに様呼びされたの初めてだぞ。

「わあっ！やっぱり！」

二人の少女は揃って顔を輝かせた。

「前に会ったか？」

「覚えてらっしゃいませんか？七月に粗暴な殿方達に取り囲まれておりましたところを清原様達に助けていただいた……」

「ああ。あの時の……」

期末テストでの賭けで上条に飯を奢ってもらった後、彼女らが不良に絡まれているところをオレ達が助けたんだった。1ヶ月前のことをよく覚えていたな。

「その節は本当にお世話になりました」

「お会いできて光栄ですわ」

「は、はあ……」

この2人の気品や落ち着き、纏う雰囲気など、白井や御坂よりもお嬢様らしい。

「へーまさか三人共清原さんに助けられてたんだ」

「凄い偶然ですね」

「はい！それに白井さんはちゃんと約束を果たしてくれたんですね！」

「はい？」

「や、約束？」

湾内の発言に白井も首をかしげていた。

「はい、次に見かけることがあった時に会えるよう取り計らってくれと約束しましたの」

白井とそんな約束してたのか。何回か会うことはあったがそんな話は聞いていないが。白井の方に視線を向けて確認すると。

「えっ………あ、ああ！も、勿論大切な友人の約束を忘れる筈があ、ありませんわ！」

忘れてたな。佐天達も気づいたようで苦笑いしている。まあ幻想御手なんかの事件で大忙しだったようだから仕方ない。なんとか話を合わせると言いたげに白井が目配せをしてくる。

「……まあ、こつちも宿題とかで色々忙しかったからな。早くても今日くらいしか会う時間を作れなかった」

取り敢えず話を合わせることにした。

「そ、その話は置いておいて婚后光子、その格好はなんですか?」

誤魔化すために白井は話題を婚后の方へと逸らした。

「あら、見てわかりませんか? 本日この日のために作らせた、純イギリスの純和風メイド服ですよ!」

どつちなんだ。どう見てもただのコスプレ衣装にしか見えないが。

「ちよつと白井さん。『お帰りなさいませ、お嬢様』と言ってみてくださいる?」

「な!? なぜわたくしがそんなことを!」

「はっ、できませんの? まったく、そんな恰好をしておきながら埒もない」

「ごめんあそばせ? わたくしそういう作法には疎くて。よろしければお手本を見せていただけませんか?」

ひよつとして白井と婚后は仲が悪いのか?

「いいですわ。このメイドオブメイド、婚后光子が伝授してさしあげます。よーくご覧あそばせ!」

すると、婚后がその場でくるくると回転しだし、「お帰りなさいませ、お嬢様♪」とや

はりコスプレ喫茶にいるメイドと同じような感じのノリで言った。

「んん、喉が渴いたので飲み物を人数分お願いしますの」

「かしこまりました、お嬢様っ」

メイドになっていてる婚後は飲み物を取りにその場から離れた。

「扱いやすい女で助かりましたの。あなた達も災難ですわね。あんなのに見込まれてしまつて」

婚後を追い払つた白井は湾内と泡浮に話を振る。

「悪い人ではないんです。実は今日も……」

「盛夏祭に行こうとお誘いくださったのは婚後さんですの。とても楽しみにしていらして、ぜひにと」

「え？皆さんこの寮に住んでいるんじゃないの？」

「佐天、ここに居る人数だと常盤台の在校生が他の学校より少ないことになるぞ」

「あそつか」

「男子寮女子寮と別れてるみたいで常盤台の寮も最低二つはあると考えるのが妥当だろう」

「ええ。清原様の仰る通り、常盤台中学には女子寮が二つありますのよ」

「このことは別に『学び舎の園』の中にも。わたくしと湾内さん、婚後さんはそちらの方に」

「あ、あのステキタウンの中に!?!石を投げればお嬢様に当たる楽園の中に!?!」

お嬢様に対して憧れを持つ初春がよく分からないことを言って興奮しだした。

「それにしても凄いわね清原君」

唐突に固法に称賛された。

「凄いつてなにがだ?」

「この女子寮にいる生徒の人数をある程度把握してないと今の推測には辿り着かないわよ」

「…推測というよりも憶測だ。誰かさんの勧めでこの施設を全部見て回ることになったからな、規模と見かけた生徒の大体の人数から誰でも分かると思うが」

「いやいやいや、普通そこまで注意がいきませんよ……………」

「いったいどういう思考をしますの?」

「まあっ、清原様はとても高い洞察力をお持ちなのですね」

「まるで推理小説に出てくる名探偵のようですわ」

初春と白井の辛辣な反応とは裏腹に、湾内と泡浮は目を輝かせながら感嘆の混じった声でオレを称賛する。

「ほらほら、名探偵ですって名探偵?虚空爆破事件と幻想御手事件の謎を解いた清原さんが名探偵のようですって?」

「何度も名探偵連呼するな佐天」

「まあっ！あの事件を解決したのは清原様なのですね！」

「誤解だ。あの二つは御坂が解決した」

「そ、そうですねよ！全てはわたくしとお姉さまのコンビプレイがあつてのもの」

「でも白井さん、あの時事件が終わった後に現場にきましたよね？」

「初春シャラップ！ですよ！」

「あつ、そういえば御坂様はどちらへ？」

白井の援護で御坂の話題へと変えることができました。

「あつ、午後になにかやるみたいで何処かへ行きましたよ」

「あら………今日のステージ楽しみにしています、とお伝えしたかったのに」

「御坂さん、ステージでなにかやるの？」

「サプライズですよ！サプライズ！」

「はっ!?そうですね。こんなことをしてる場合ではありませんの！良い席を確保してお姉さまのステージをカメラに収めねば！」

白井は御坂がなにをやるか知っているようだ。御坂主催の催しに関して面々が盛り上がつてる中、オレのスマホから着信音が鳴った。

「悪い電話だ」

皆に断りを入れ、少し離れてから電話に出る。

「はい。もしもし」

『あつ悪い清——』

プツ

声を聴いてつい反射的に電話を切ってしまった。そしてすぐに再び着信音が鳴ったため出る。

『いきなり電話切るなよ!』

「悪い上条。それで、電話してきてどうした?」

『それが出ようとしたりとところでインデックスとはぐれちまつて……』

「……………はあ」

『ちよつ!?その重いため息はなんだよ!?』

「いや、人は失敗から学んで成長する生き物って言葉があるが、お前には該当しないなと思ってな」

『最近清原さんから棘のある言葉が飛んでくるのですが!』

まあ、それはさておき……………。

「あのインデックスのことだから食べ物に釣られて食堂あたりにいるんじゃないか?」

『た、確かにあのドカ食いシスターならありえそうだ……………』

「わかったらもう切るぞ」

『あ、ああ悪いな清——』

『ちよつ、なんでアンタがここにいるのよ!?!』

え? 電話の向こうから御坂の声が聞こえてきた。

『げつビリビリ! つてなんだその格好?』

『ビリビリ言うな! なんなのよアンタ! 人の発表を茶化しに来たわけ? 慣れない衣装を笑いに來たわけ?』

『いや、そんな、結構綺麗と思いますが!』

『なつ——!?!』

声から緊張が混じつてる御坂とテンパつて普通言うのが憚れる褒め言葉を言う上条。

『バカ——!?!』

『どわくくくつ!?! 褒めたのに理不尽だあ——!』

上条の冥福を祈りながらオレは電話を切り、皆のところに戻つた。

その後お茶を手を取つて戻つてきた婚後と合流し、ステージに向かう。

催し物は御坂のバイオリンの独奏で、普段からは想像できないような腕でステージだけでなく、女子寮にいる全ての人を惹きつけるような綺麗な音色を奏でていたのだつ

た。

上条？あいつはいい奴だったよ。

乱雑解放編

噂も案外馬鹿にならない

8月上旬。

夏休み期間であるものの、とある高校の1年7組は今日も補習がある。

「おはよう」

「よう、かみやんが遅刻してないとは今日は雪でも降るのかにやー?」

「挨拶の返しにそれはないだろ……」

補習の開始前に教室に入ってきた上条当麻に土御門元春が失礼なことを言う。

「清原から殆ど毎日進歩がないだの小言言われてるからな………頑張つて早起きしたんだよ」

「殆ど毎日つて………」

上条にも非があるため流石の土御門もどう返せばいいか分からず困惑した。

「ま、まあその調子で夏休みの宿題にも取り組んでいけば御の字ぜよ。かみやんの場合始業式の前日によつてないのに気付いて大慌てるだろうにやー」

「ははは、流石の上条さんも宿題を忘れるようなことはしないつて」

地味にフラグっぽい事を言いながらも比較的穏やかに談笑していると、他の生徒も教室に入ってきて教室は段々と騒がしくなっていく。

すると

「んなあつ!？」

窓から外を見ていた青髪ピアスがいきなり机を巻き込みながら倒れこんだ。

なんだ?と思う前に青髪ピアスから告げられた言葉に場は騒然となる。

「き、キヨポンが……………」

キヨポンが女の子と歩いとる!」

「「な、何イイイイイイイ!?!」」

「どっこだ!」

「あ、あそこに……………」

息も絶え絶えに青髪ピアスが指さす方向に他の男子生徒が一斉に目を向けると、確かにキヨポンこと清原綾斗が柵川中学校の制服を着たショートヘアの女子と歩いているのが見て取れる。

「まじだ!」

「ば、馬鹿なっ!」

「あのパツとしない清原が!？」

「なんなんだあれ!？」

「あいつ本当に人間か!？」

ちなみにこのクラスに彼女持ちはいない。一人、また一人と崩れ落ちていく男子生徒達。

「まったくうちの男子どもは……あいつが女子と一緒に歩いてるだけで動揺しすぎでしょ」

「吹寄さん、開いてる教科書逆さまだよ」

「あっ」

女子生徒の中にも一部動揺しているのがいた。

「落ち着けお前ら」

「つつちー?」

そんな彼らに土御門が上条との会話を切り上げ声をかける。だが今の土御門からいつもの様な飄々とした感じが鳴りを潜め、シリアスな雰囲気醸し出したためだけにクラス全員戦慄した。

「お前らよく見る。一見楽しげながら不意に視線を逸らす。会話が途切れている証拠だ。更に互いの歩幅も合っていない。お互いまだ知り合っていない証拠だ」

「おお、確かに」

「凄まじい洞察力だな」

「なんかいつもものつうちーとは別人みたいや」

男子生徒達からおおっと感嘆の聲が上がる。

「以上のことからまだ二人は知り合つて日が浅く、付き合つてはいないと推測される。だが、キヨポンはパツとしないのによく見たら顔はイケメンとっていいほど整つてゐる。一部の女子からは受けがいいに違いない。奴のリア充の仲間入りも時間の問題だろう」

「そんなつ！」

「一体どうすれば！」

「鎮まれっ！」

土御門は騒ぎ出した連中を一括でなだめる。

「奴が被害者を生み出さないために、まずオレたちがなすべきことは分かるな？」

土御門からの問いに浮足立った有象無象は一気に沈静化し、闘志を燃やしていた。彼らの答えは決まっていた。

「それじゃあ行くぜよ」

ただ一言言うだけだったが、教室から去っていく土御門の背中をついていく男子た

ち。

(いつの間にかうちのクラスの男達がアホになってる……………)

傍から見ていたアホの上条は白けた視線と共にそんな事を考えていた。

「あれ？吹寄さんも行くの？」

「あ、あたしはあいづらが馬鹿をやらないか見張りに行くだけよ！」

「は〜い。皆さ〜ん補習を始めますよ、つて!?!男子の皆さんは全員欠席なのですか!?!」

「あの一小萌先生…………上条さんはちゃんとここにいますか」

とある高校の校門の近くまで来ていた清原と女子中学生の前に、土御門が道を阻むように現れた。

「ようキヨポン」

「土御門か。お前補習はどうした？」

「なあキヨポン最近、寒くないか？」

「は？何言ってるんだ？むしろ暑いくらいだぞ」

今は八月、寒いということではなく猛暑の季節だ。土御門の発言の意図がつかめない清

原であった。

「いいや、寒いはずだ。何故だか分かるか？今からお前の春を殺すからだ……！」

「いやお前何言いだしてんだ？」

お前の頭の方が春だろ、と清原が突っ込もうとするよりも先に、土御門の行動の方が早かった。

「お前ら、作戦開始だ！」

「おう！」

「任せろ！」

「イー！」

土御門の声と共に何処に潜んでいたのか、1年7組の男子生徒達がどこからともなく現れて清原を取り囲んでいた。

「さあもう逃げられねえぞキヨポン」

「これはいつたいたいというつもりなんだ？」

「ふっ、なに安心しろ。ちよつとお話をするだけさ」

「この殺気立ってる連中を見て安心できる要素が見当たらないが」

頭が春の土御門に清原は疲労感が溜るのを感じながらも待ったをかける。

「話があるなら少し待ってくれ」

「なんだ？隣のカワイ子ちゃんに遺言でも——」

「この道をまっすぐ行けば駅に着くから」

「「「え……？」」」

「なんかクラスメイトが話があるみたいだから、悪い」

「いえ。途中まで案内してくれてありがとうございますなの」

二人の会話を聞いて殺気立っていた男子高校生達は固まった。

「それじゃあなの」

「……」

「……」

「……」

「……」

女子中学生がその場を去ってからも校門前は沈黙に包まれる。

「なあキヨポン、ひよつとしてさっきの子道を訊いていただけやったん？」

たっぷり三十秒かけ沈黙から解かれた青髪が清原に声をかける。

「？そっすが？」

「……つつちー？これはいったいどういう事や？」

「ぶっ」

土御門は男子高校生の視線が自分に集中するのを感じながらそれでもニヒルに彼は笑って見せ

「いや、カプルの事とかオレに聞かれてもわかんないぜよ」

こんな事をのたまった。

（（何言ってるの？コイツ……））

男子生徒のみならず清原ですら全く同じことを思ったという。

因みに、勝手に補習を抜け出したことで担任に男子生徒達はこっそり絞られ（青髪ピアスはご褒美として喜び）、男子全員補習が夕方まで長引いたのだった。

◇ ◆ ◇

盛夏祭が終わってしばらくたった夏の暑さと太陽の光が鬱陶しい昼下がりのこと。

オレはその日の用事を終え、賑やかな色使いのクレープ屋から少し離れたベンチに座っていた。

携帯にイヤホンを繋ぎ、流れてくる音を聴いて状況を確認する。

「予定通りだ……」

これでやるべきことはほぼ完了した。

必要ならこれから2、3仕掛ける必要があると思っていたが、それは不要らしい。上々の首尾に納得したオレは携帯をポケットにしまつて寮に戻ることを決める。

「あれ？清原さんじゃないですか」

ベンチから立ち上がった時、見覚えのある女子中学生三人に遭遇した。

暑苦しいサマーニットがトレードマークの制服を着込む常盤台の超電磁砲、御坂美琴。

一人は涼しそうな夏服を身にまとつた黒髪の少女、佐天涙子。

そしてもう一人は………

「あつ、キヨポンさんなの」

「キヨポンさん？」

今朝駅までの道を案内した女子中学生だった。

「春上さんコイツと知り合い？」

「うん。今朝道に迷つてたところを助けてくれたの」

「へー凄い偶然」

まさか数日も経たずに会ったばかりの人間に再会するとはな。本当にこの街は広いようで狭いな。

「あつ、紹介しますね。この子は2学期からのうちの学校の転入生で初春の新しいルームメイトの春上衿衣はるうええりいさんです。で、こっちがあたしの先生で名探偵の清原綾斗さん」

「キヨポンさん、先生で名探偵なの?」

「おい佐天適当なことを言うな」

「ところでなんで春上さんは清原さんのことをキヨポンさんって呼んでるの?」

「聞けよ人の話」

オレを置いて佐天と春上で会話を進めていく。

「アロハシャツを着たサングラスの人がキヨポンって呼んでたの」

「な、なんか聞いただけでいかにも不審者っぽい。その人清原さんの友達なんですか?」

「……不本意ながらな」

「あとその人キヨポンさんに『今からお前の春を殺す』とか言ってたの」

「ええ……完全にやばい人じゃん」

そのヤバい奴が盛夏祭で知り合った舞夏の義理の兄貴だというのは黙っておこう。

まあそんなことよりも……

「いつまで睨んでるんだ御坂?」

「そう？ 私はそんなつもりないけど」

御坂が恨みがましい目でオレの方を睨んでいた。

「あ、あはは…御坂さんまだあのことに根に持つてるんですか」

「御坂さん、キヨポンさんと喧嘩してるの？」

「あー違う違う。この前盛夏祭で御坂さんのバイオリン独奏が終わった後、清原さんが音楽室でピアノを弾くことになってそれがすごい上手だったんだ。それで御坂さんのプライドが傷ついちゃったみたいで」

「別にいい、気にしてないわよ」

「？ つけ」

そう。あの催しが終わった後、湾内と泡浮の『そういえば清原様はピアノを習っていたと言っていましたわね』という発言を機に、佐天達が聞いてみたいとせがんできてやむなくあの女子寮に何故かある音楽室のピアノを借りて演奏することになった。

しばらくやっていかなかったため軽く『エリーゼのために』を弾いたつもりだったのだが、皆の反応が思いのほか好評だった。確認したら一般家庭なら普通『きらきら星』とかいうのを習うらしい。あそこは世間とは隔絶されている場所だから認識の差異があるのは仕方ない。

だからオレは悪くない。

「キヨポンさんピアノ弾けるんだ。聞いてみたいの」

「あー……………機会があつたらな」

そんな機会はない方がいいのかもしれない。

すぐに離れようとする佐天がオレの前に立ちふさがり、元氣ハツラツといったように笑顔で声をあげた。

「清原さんも一緒に遊びましょうよ！」

「いや、これから帰るんだが……………」

「なにか予定でもあるんですか？」

「ないが」

「じゃあいいですよね！」

結局その場にとどまることとなった。

「そういえば初春と白井が見当たらないな」

クレープ屋で買ったクレープを食べる三人に、いつも一緒にいるはずの二人について聞いてみる。

「黒子達なら合同会議に出席してるわよ」

「合同？」

「風紀委員と警備員とのよ。なんでも最近の地震について話すって」

「なんで自然災害で合同会議なんか？事件ならいざ知らず」

「へへへ。実はそれに関してホットな噂が」

佐天が説明する。ここ最近原因不明の地震が連続的かつ頻繁に発生しており、震度やマグニチュードはまちまちだが、中には建物の一部が倒壊したり怪我人が出た事例もあるらしい。

「それで、私が最近観ている都市伝説サイトによるとですね…なんでも現在学園都市各地で頻発する地震は実は『乱雑開放』ポルターガイストなんじゃないかって言われてるんですよ」

「ポルター、ガイスト？」

「イエス！ポルターガイスト！」

テンション高めで佐天は語り始める。曰く、今起きてるのはただの地震などではなく、霊的な干渉による怪現象だとか、別次元からの波動だとか、はたまた統括理事会が地下施設で行っている秘密実験だとか、そんな眉唾物の陰謀論をさも有力な説のように主張する佐天に御坂は溜息を吐いていた。

「そういえば、春上さんがいた一九学区ってポルターガイストが多発してたんでしょ？
どうだったの？」

「うーん？」

「こら、そんな事面白おかしく騒いじや駄目でしょ。本当にきたら大変じゃん」

「あ、あはは…すみません。てへっ♪」

「……佐天はこういう話が好きなんだな」

「ええまあ。都市伝説マスターと呼んでくれても良いですよ？フフン」

誇らしげに胸を張る佐天。思えば、彼女が幻想御手を入手したのもそういう噂からだっただか。

「都市伝説も馬鹿には出来ませんよ。幻想御手が実在してましたし、他にもどんな能力も効かない能力を持つ男とか喋るゴールデンレトリバーとか学園都市の外に秘かに存在すると云われるもう一つの超能力開発機関『ホワイトルーム』とか色々——」

「え？」

「ん？ どうかしました？」

「……いや、何でもない」

噂も馬鹿には出来ないな。

◇ ◆ ◇

同時刻、アンチスキル第七学区本部の第一会議室にて、警備員と風紀委員のここ最近

の地震発生に関する合同会議が開かれていた。

『このところ頻発している地震について、判明したことがある』

珍しくスーツを着こなした黄泉川が壇上に立って、マイクを手に説明していた。

『結論からいえば、これは地震ではない。正確にはポルターガイスト現象だ。このポルターガイスト現象を超常現象などと騒ぎ立てる学生が出てこないとも限らないからあらかじめ釘を刺しておく。これは超常現象ではない。ポルターガイストの原因は、『RSPK症候群』の同時多発じゃない』

「……RSPK症候群？」

「なんだそれ？」

聞きなれない単語に席についていた風紀委員の何人かが首をかしげている。

『ここから先は、先進状況救助隊のテレスティーナさんから説明してもらおうじゃん』

黄泉川がそう言うと、一人の女性が舞台に姿を現した。長い茶髪を背中にふわりと流した彼女は、見た目からしてやり手のキャリアウーマンという印象を受ける。

『えー、ただいまご紹介いただきました、先進状況救助隊のテレスティーナです。RSPK症候群とは能力者が一時的に自律を失い、自らの能力を無自覚に暴走させる状態を指します。個々の現象は様々ですが、これが同時に起きた場合、暴走した能力は互いに融合し合い、一律にポルターガイスト現象として発現するというわけです。さらにこのポ

ルターガイスト現象がその規模を拡大した場合、体感的には地震と見分けがつかない状況を呈します。これが今回の地震の正体ということになります。RSPK症候群の同時多発の原因については目下調査中ですが、学生の中にはこの現象を愚にもつかないオカルトと結びつけようとする者も出てくるでしょう。それによって集団ヒステリーなどが起き、被害が拡大することも考えられます。今回風紀委員の皆さんにも集まってもらったのは、一般生徒がこのような噂に踊らされないよう、注意を促してもらいたいからです」

その言葉と共に会議は終わり、風紀委員はネット上の噂への火消しと、パニックを未然に防ぐ注意喚起を割り当てられた。警備員についてはこのRSPK症候群の同時多発が人為的に誘発されたものだった場合に備え、原因の割り出しと容疑者の確保を命じられ、更なる会議を行うことになった。

「思いのほか早く終わりましたね」

「警備員はこの後もミーティングなんですって」

会議場から出てきた風紀委員の中に当然初春と白井、固法もいた。白井と初春が長時間席に着いたことで固まった身体をほぐしているなか、固法は難しい顔をしていた。

「固法先輩、どうかなさいまして?」

「…RSPK症候群の同時多発なんて聞いたことないわ。それに今回の対応……………」

んかひっかかるのよね」

「それをこれから専門家の方々が調べてくださるのでしよう？今、わたくし達が考えても始まりませんわよ」

「そりやそうかもしれないけど…」

小さな違和感を感じつつも、固法はそれがなんなのかはつきりしなかった。

「あ、佐天さん？今どこですか！」

◇ ◆ ◇

「さー春上さん！次は何をやりましょうか！あれなんてどうですか？」

「初春つてば張り切っちゃって」

途中から合流した初春と白井も加えて、6人でガヤガヤとうるさく音が飛び交うゲームセンターへ訪れていた。

「モグラさんピコピコ出てきて可愛いの……」

「そ、そつか。でもさ春上さん、見てるだけじゃなくて叩いてみたら？」

「叩く？可哀そう」

「ええ……」

女子中学生達は楽しそうだ。御坂なんか超電磁砲用に使っていたのと同じコインが

大量に入った小さなバケツを持っている。一応お嬢様なのにコインゲームやりこんでるな。

オレは一人ゲームセンターに備え付けられた休憩室で休んでいた。

キンキンと様々なところから聞こえる電子音にはどうも慣れない。前に上条たちとここに来て遊んだが場に酔ってすぐにリタイアした。

今回は酔う前に避難している。休憩室に設置されている自販機の前に立ち、ブラックコーヒーを購入する。ピツとボタンを押すと音を立てて缶が落ちてくる。

「あれ、清原さんここにいたんですか？」

ガコンと落ちてきた缶コーヒーを取り出していると佐天達がわらわらと休憩室に入ってくる。

「お前たちも休憩か？」

「皆でプリクラ撮ってきたところです」

笑顔でプリクラという加工写真を見せてくる少女たちは先ほどよりも距離が近くがなっているようだ。プリクラでも白井が御坂に抱きついて仲睦まじい。御坂の方は必死に引きはがそうとしているが。

「よく撮れてるな」

「あ、せっかくだから清原さんも撮ります？」

「遠慮する」

「ちえー」

佐天には悪いが、撮ったとしてそれが土御門と青髪ピアスに見られた場合どうなるか目に見えている。

「春上さん？危ないっ！」

本当に撮らないのかと佐天にしつこく聞かれていたが、何かがぶつかつた音で中断された。音の出所に視線を向けると、そこには春上がおでこを抑えてうずくまっていた。その目の前には透明なガラスしかなく、どうやらガラスが見えてなくてぶつかつたようだ。

「大丈夫ですか？」

「あれ……」

初春が春上に近寄り心配していると、春上が何かを指差した。指の先には今日の夜に川辺で行われる花火大会のポスター。

「あー、今日だったっけ」

「ねえ！みんなで行くっか！」

「賛成です！浴衣とかも着ていきます？」

「いいわねそれ。あつ、でも門限を過ぎてる時間帯じゃん」

「寮監にバレないようにこっそり抜け出せばいいのですわ」

「風紀委員とは思えない台詞ですね白井さん」

そのポスターを見ると女子中学生達は楽しそうにきやつきやと話を進めていく。

そういえばこつちに来たのは去年の冬頃だったから、花火大会というのにはまだ行ったことがないな。

せつかくだから行ってみるのも悪くない。

夏祭り

オレは一人で夏祭りの会場に来ていた。

上条は夕方まで補習が長引いた上に、帰りにどこかに財布を落としてしまい探している最中でいいない。奴にはこういうのに興味がありそうな暴食修道女に頭を丸かじりされる未来しか待っていないだろう。

まあ、盛夏祭でのあの暴食っぷりを考えると、奴の頭一つを対価に屋台全ての食材がなくなるのを避けられるなら安いものか。

上条のだけ着信拒否するようにスマホの設定を変えておく。

「…凄い人だからだ」

陽の沈んだ時間帯。夏祭りが行われている川沿いの歩道に多くの屋台が立ち並び、多くの人で賑わっていた。祭りに似つかわしくないものが隅にあるが。

夏祭りについて事前に調べてみたが、日本の夏祭りの多くは、起源的には盂蘭盆会（盆）・七夕・祇園祭などが絡んだものやその周辺のな行事であるものが多かったようだ。したがって、旧暦では6・7月の行事に当たる。また農村社会では夏季の農事による労働の疲れに関わる行事、都市社会では江戸時代以前の夏季の疫病封じ、その死者を弔う

行事を起源とするものが多い傾向にある。

だが時の流れでその起源はあまり認識されず、夏祭りは一般的に厳粛な行事ではなく華やかな行事とされる傾向が強いようだ。おそらくここにいるほとんどの人の認識は華やかな行事くらいだろう。

「あれ？弓箭？」

「え？」

通りを歩いていると、哀愁を漂わせながら歩く弓箭獵虎を見つけた。幻想御手の一件以来

の再会だ。

「き、ききききき清原さん!?ど、どどどうしてここに!?!」

オレだと分かった途端、弓箭はテンパリだった。

「夏祭りに興味があつてな。お前も来ていたか」

「はははは、はい!その、一人で来ました!……はっ!」

しまったと言わんばかりに、弓箭が両手で自身の口を隠す。

「あの、今の聞いちゃいました?」

「……いや」

「いいいいんですよ気を遣わなくて………清原さんはもう知ってるんでしょ。わたく

しがボツチだつて……」

いかん。地雷踏んだか。

立ち消えていく語尾と共に再び俯いていく弓箭。

「……ええそうですよ。どうせわたくしはボツチですよ。学校でも誰からも声をかけてくださいませんよ。仕事一筋の女ですよ。今は夏だからつてリア充たちが夏祭りとかでキャツキャウフフなことをしていると……ふふふふ」

なんかブツブツ言いながらより一層哀愁さが濃くなつた。もしこのまま放置すれば闇が深くなるだけだな。

この前佐天達に付き添つてくれたこともあるから捨て置くわけにはいかない。仕方ない。

「……ところでどんなのがおすすめなんだ？」

「え？」

「いや、去年来たばかりでここの夏祭りのはどんなのがあるか分からなくてな。なににおすすめがないか聞きたいんだ」

「わ、わたくしのですか？」

「ああ、一人で回るだけじゃ退屈だからガイドしてくれると助かる。良かったらいいんだが」

礼もかねてなにか奢ってやらないといけないな。

「そそそそれは世間でいうところのおデートという………ひよつとしてわたくしに懸想してくれてるからそういうお誘いしてくれて………そそそそういうことであればわたくしもやぶさかではないというか………」

さつきより小声でなにかブツブツ言つててよく聞こえない。

「大丈夫か弓箭?」

「はい! わたくしは至つて大丈夫です!」

俯いていた顔は恐るべき勢いで跳ね上がり、弓箭は華のようにほころんだ笑顔を見せた。

「わかりましたそういうことならこのわたくしにお任せくださいあつ、はぐれてしまわないように手をつなぎますか? それだとなんだかわたくしたち他の方たちにカツプルと思われてしまいますねいえ別に嫌ではないのですよむしろウエルカムですけれどわたくしにも心の準備というものが——」

さつきとは打つて変わつて浮かされた態度になる弓箭。ペラペラと早口のトークで何を言っているのかよくわからない。

喜びのあまり興奮してるのか?

「あつ、いたいた。おーい清原さあーん!」

弓箭が喋っている最中に聞き覚えのある声がオレを呼ぶ。声の発生源を探してみると、浴衣姿の佐天達を見つけた。

「あつ、弓箭さんも来てたんですね」

「え？あつ、さ、ささ佐天さん」

「佐天さん知ってる人？」

「はい、幻想御手の時に病院に付き添ってくれたんですよ」

「そうだったんですか。佐天さん達のことありがとうございます」

「い、いいいいえ！と、当然のことをしたまでですはい！」

初春達に礼を言われ、弓箭はさっきの調子に戻った。

なお、互いの自己紹介をしている中、初春が「枝垂桜学園ってあの学び舎の園にあるお嬢様校ですか!？」と興奮したり、御坂の視線が30度下を向いたまま愕然としたり、春上が思わず「大きいの」と呟いたりと反応がバラバラだった。

「ん？ゆみや？」

「どうしたのよ黒子？」

「いえ。3年の先輩に似た名字の方がいたような気が……………」

白井の言葉に弓箭が僅かに反応したのを見逃さなかったが、聞く前に佐天がオレに話しかけてきた。

「折角なので清原さんも一緒にまわりますか？ 弓箭さんもどうですか？」

「弓箭が いい のなら別に構わないが……」

「え、えつと……よ、よろこんど」

佐天からの誘いに弓箭は一瞬躊躇するも受けようとしたところで、メロディが鳴る。

一瞬間まった弓箭はポケットからガラケーを取り出し、パカリと開く。

「……………」

画面に映る発信者の名前を確認した後、弓箭はピッと着信拒否のボタンを速攻で押し、携帯の電源を切ってポケットに戻した。

「失礼しました」

「あ、あの……出なくて良かったんですか？」

「はい、特に大事のものでもないのです」

「そうですか。よしそれじゃあ皆で行きましょう！ あつとところで清原さん。じゃーん

！ どうですか？ 似合ってますか？」

佐天は自身の浴衣姿の感想を聞いてくる。

「いいんじゃないか？」

「……………そこは可愛いとか褒めるところですよ」

無難に答えたが、どうやらお気に召さなかったようだ。

だがもしそんなことをすればナンパ師か「え？この人私に気があるんじゃないの？」とあらぬ誤解を招きかねないため、そういうのをストレートに言うほどの勇氣はオレにはないのだ。

「しまった！わたくしも浴衣で来ていれば……！」

◇ ◆

「あ、あれ？おかしいな」

「どうしたの？」

「いや、弓箭の奴でないですよ。いつもはすぐでるのに」

「珍しいわね。あの子仕事はしっかり受けるのに……ま、サクツと終わる仕事だからいいんじゃない」

◇ ◆

「お祭りっていうのはこういう賑やかな感じなのか？」

屋台を歩き回ってふと気になったことを皆に聞いてみる。

「?ひよつとしてあんた、お祭り自体初めてなの?」

「ああ。ここに来る前にいたところの近所では祭の行事はなかったからな」

?は言つてない。

「じゃあキヨポンさんも私とお仲間なの」

「お前も初めてか」

同じく祭が初めての春上になんか仲間認定された。

「仲間……親友よりも上?それとも下?」

「?どうした弓箭?」

「い、いえなんでもありません」

「それじゃあお祭初心者が二人いますので、今日はうんと楽しみませんとね。あつ、手始めにあれとかやってみます?」

佐天が指差した先には射的屋だった。並べられている景品に菓子類が含まれている。

単純に射的ゲームというものに興味があつたため、試してみてもいいな。

射的の銃が3丁置かれてある台の前まで近付く。

1回のゲームにつき弾が3発渡される。

コルク銃と呼ばれる、コルクを詰めて発射するタイプの玩具らしい。並べられた銃一つ一つは思ったより重厚な作りであることが窺える。しかし弾の方は形も歪で、精密な

射撃ができるか怪しいところだ。

生まれてから今日まで1度も銃を構えたことはない。映画やドラマでのイメージはなんとなくあるが、それが本当に正しいのかは不明だ。

ちようど他に参加している客もいないため手本を見ることができない。仕方なく、こは頭の想像の中、真ん中に置いてある銃を掴んで構えてみる。

一番的の大きいお菓子の詰め合わせを落とすには、大きな重りを撃ち落とす必要がある。

果たしてどれくらいの威力があるのか……ひとまず試してみるか。

1発目を発射する。

ポン、という軽い音と共にコルクの弾が発射され、狙いを定めた重りに近づく。しかしその左脇数センチ横を呆気なく通り抜けてしまった。

感覚的な狙いではピンポイントで当たるはずだったが、弾道は全く異なる軌道を描いた。

なら次はと右に数センチ銃口をソフトさせ、2発目を発射する。

これで軌道は完璧に修正したつもりだったが、今度は右斜め上を通過し外れてしまった。

「難しいな……」

「あれれ〜？あんた射的滅茶苦茶下手ねえ？ピアノは上手かったのに」

カエルのお面を頭につけた御坂の奴、やっぱりこの間のことを引き摺ってのか。

「どれ。この私がお手本見せてやるわよ」

「あつ、じゃああたしも」

3 発目を込めていると、御坂と佐天も参加を始める。

スカツ、スカツ

「あ、あれ？上手く当たらないな」

「こ、このつ」

ところが、銃を発射する二人もオレと同様、狙いを定めるも悪戦苦闘。3 発目で重りに命中し、後ろに押すことに成功するも倒れることはなかった。

「いやー思ってたより難しいですね。あれ、御坂さん？」

「……………」

「お姉さま、気をしっかり持ってください。浴衣に土がつかますわよ」

あれだけ息巻いていたのに惨敗した御坂は両手と両膝をついて項垂れ、白井たちが呼びかける。初春と春上も参加するも弾が全部あさつての方向へと飛んで惨敗。

何かコツがあるのだろうか？と御坂達を観察してたが、それが腕前によるものではなく、それぞれ同じように見えた銃が個別に違う性能を持っているためであることがわ

かった。

製造過程のミリ単位でのズレと、弾のコルクそのものの質。

様々なものが組み合わさって、1発撃つたびに予期しない弾道を描く。

非常に面白い仕組みであると同時に、的を射抜き落とすことの難しさも理解する。

結果的に最後の1発だけは当初狙っていた重りに命中させられたが、簡単に落とせる

はずもなく初めての射的は惨敗に終わる。しかし銃自身が持つ傾向がわかってきた。

あとはコルクの形状から発射時に想定される弾丸の軌道を予測して再挑戦すれば――

―そう思ったが『おひとり様チャレンジ1回のみ』の張り紙に気付いて断念する。

「で、では……つ、次はわたくしも……」

オレの隣で様子を窺っていた弓箭も参加する。

この難易度から、他の奴と同じように景品に当たらないか、当たったとしても倒せな

い………そう思っていた。

「弓箭さん凄いですね。3発全部当ててしまうなんて」

「い、いえ！そ、そんなことは……！」

初春からの賛辞に弓箭は動揺する。彼女の手には、お菓子の詰め合わせが入った紙袋

がぶら下がっていた。

「謙遜が過ぎますの。ライフルの持ち方なんてとても様になってましたわ。部活かなにかでやってましたの?」

「えっ?! あつ、いや、その……ま、まあ……」

弓箭はどういうわけか奥歯に物が挟まった物言いだ。

白井の言う通り、銃を構えた時の彼女は銃の構え方が様になっていた。

足の踏み方、背筋、目線、腕の高さ、息の整え方……弓道の射法に似ている部分が多い。3発当てたのもオレと同じくコルクと銃の組み合わせに気付いたのだろう。加えて、撃つ時の雰囲気とオレ達と歩いているときの脚運び。

ひよつとしてこいつ………

「あれ?」

「どうしました佐天さん?」

「あそこに変な車がある」

佐天は少し遠くに見える屋台の端を指差した。指差した場所には大きな護送車に似

た車が複数台停車しており、その車両の側面には先進状況救助隊、通称MARRの文字

が書かれている。威圧感を発するゴツイ車両は祭りの雰囲気には似合わず、強烈な違

和感を放っている。

「MARのトレーラーですわね」

「例のポルターガイスト対策ですかね」

「ポルターガイスト!?!じゃあ、あの噂マジなんだ!?!」

風紀委員二人の会話に、都市伝説好きの佐天が食いついた。

「こんな人の多い場所で万が一ポルターガイストが起きたら大変ですし」

「それにしても、あんな警備下で花火見物だなんて、風情もへったくれもありませんの」

「あ! だったらいいところありますよ!」

「あ! ほら、また上がりますわよ!」

「お腹にどーんと響きますよね」

「うん、どーんとくるの」

佐天に案内され、オレ達は穴場である高台に着いた。そこから花火が上がる様子がよく見えた。

学園都市の技術によって様々な色や形の花がほんの一瞬だけ咲き誇る。それらが舞い散っては、また新たな花が咲くその様子に、その場にいた全員が心を奪われていた。

「綺麗なの…」

「た〜まや〜!」

「かゝぎや〜!」

「?なんだその掛け声?」

「清原さん知らないんですか? 花火が上がったらこの掛け声を上げるんですよ」

「どういう意味なんだ?」

「え? え、えーと……: どういう意味なんだろう」

「ちよつと待つてろ。調べてみる」

スマホを出し、ネットで検索してみる。

どうやら江戸時代の有名な花火師の屋号の「玉屋」と「鍵屋」が由来といわれているようだ。

両国橋を挟んで、上流では玉屋が、下流では鍵屋がそれぞれ花火を打ち上げて、花火見学に来た観客たちがすばらしいと思つた方の屋号を叫んでいた。

それが、今でも続いている「たまや」、「かぎや」の掛け声の根源。

「……とのことだ」

「へえー」

「私達そういうの気にせずと言ってたんですね……あれ? 春上さん?」

ずつと黙っていた春上に、初春がふと顔を向けた。何か様子がおかしい。

「どうしたんですか?」

「思い出してたの……」

「何を？」

「あのね。昔、私にも初春さんと佐天さんみたいな友達がいて、一緒に花火を見たの……」

「へえ、どんな子ですか？」

「……」

「春上さん？」

「何処……何処なの……」

「春上さん!？」

「ちよっ、どうしたの!？」

初春が声を掛けても春上から返事が返ってこない。それどころか、彼女はなにかブツブツ言いながらふらふらとどこかへ歩き始めた。初春と佐天は彼女の後を追いかける。

「あれ?どこ行くんだらうあの子たち?」

春上達が離れたことに他の面々も気づいたところで、白井の方から着信音が鳴りだした。

「ん、電話ですわ。もしもし固法先輩。どうしましたの?」

「どうやら相手は固法らしい。」

『聞いて聞いて！ポルターガイストの事なんだけど！』

「調べ物もよろしいですけど、少しは息抜きされたら？花火、綺麗ですよ」

『いいから聞いてつてば！RSPK症候群の同時多発の原因は、AIM拡散力場への人為的干渉っていう可能性があるの！』

「AIM拡散力場への……？」

『つまり、一連のポルターガイストは偶発的な事故じゃなくて……』

「誰かが意図的に起こしているということですよ!?!」

へえ……。賢いな。

その時。

突如として、足元がグラリと揺れる。

「これって!」

「まさか……ポルターガイスト!?!」

徐々に揺れは大きくなり、オレたちの足元の地面に亀裂が走っていく。

「弓箭、舌噛むなよ」

「え？はうわっ!?!」

地面が崩れる前に隣にいた弓箭をこっちに引き寄せ、横抱きにする。

その上で、崩れる瓦礫の上に飛び移りながらジャンプして行く。

崩れていない箇所に着地すると、そこには御坂と白井がいた。

「清原さん……貴方、今の跳躍力はいつたい……う？」

「そんなのは今どうでもいいだろ白井。それより佐天達が最優先だ」

「っ！言われなくとも！」

テレポートで白井と御坂の姿が消える。

佐天達が向かった方向を確認すると、三人の姿が視認できた。

佐天とは少し離れた場所に初春と春上が座り込んでいる。瓦礫の落下に巻き込まれてはいなかったが、その二人の上に街灯が倒れ込みかけている。

すぐに街灯を分解しようとプロセスを始めようとするが、突然イカつい鎧が現れ、二人を庇うようにその街灯を受け止めたためやめた。

『間一髪ね。怪我は無い？』

機械音が聞こえ、初春と春上は顔を上げる。駆動鎧のマスクから顔を出したのは、若い女だった。

「あ、MARの隊長さん……！」

「テレスティーナ、で結構よ。風紀委員のお嬢さん」

深まる疑念

花火を鑑賞する絶好のスポットは、一転して事故現場となっていた。

瓦礫を退ける作業は、全て駆動鎧によって行われ、崩れた斜面に何やら機械をかざしている隊員までいる。

MARに警備員よりも資金が流れてるようだな。

そして、その部隊の指揮をしているテレスティーナという女に白井が近寄る。

「先ほどは友人を助けていただき、ありがとうございます」

「怪我してなくてなによりだわ」

「ところで、この場におけるAIM拡散力場を観測していらつしやいますの？MARでは事前に力場の異常を探知出来たりするのでしょうか？その、対応があまりにも迅速でしたので」

「あなた、お名前は……？」

「風紀委員第一七七支部の白井黒子と申しますの」

「……なるほど。一七七支部には優秀な人材が揃っているみたいね。RSPKとAIM拡散力場の関係について、もう把握してるなんて」

「RSPKは何者かによるAIM拡散力場への人為的干渉が原因。その同時多発がポルターガイストを引き起こしている」

「あら、よくわかつているのね」

「合同会議で仰ってくれば、不審人物の割り出しなど、お手伝いする事はできましたのに」

「そういうのは警備員の仕事よ。会議でも言った通り、あなた達風紀委員には風評被害対策や日頃の安全対策に専念して欲しかったのよ」

つまり学生の力はいらないか……こつちとしては都合がいいが。

無事餌に食いついたようだし、長居は無用だ。

白井たちへの視線を外し、初春たちの容態を確認する。

「怪我は無いか?」

「あつ、はい」

「春上さんもMARの人達が言うには寝てるだけです。ただ弓箭さんの方は……」

「……はわわ……お姫様抱っこ……清原さんに……お姫様、抱っこ……えへ、えへへへ……」

「……ある意味重症ですね」

ベンチの上には、眠ってしまった春上と放心状態の弓箭が横たわっていた。

弓箭の方は顔から湯気を出しながらなにやらブツブツ言っている。呼びかけても返事が返ってこない。

「…それほど地震のショックが強かったのか？」

「あついや、多分別のことが原因かと」

「別の原因？」

佐天達はなにか心当たりがあるようだ。

「ほら、あの、あれです。お姫様抱っこ」

「お姫様抱っこ？………あつ」

あれか。

相手を両腕で抱え上げ、体の正面で抱えた状態では、互いの距離が一番近くなる。

弓箭は学び舎の園のお嬢様、異性に対する免疫力が低いというのを考慮すべきだったか。

「あれ全然わかってないみたいですね」

「清原さん変なところで鈍いな………そういえば初春も清原さんにお姫様抱っこされたんだって？」

「ちよっ!?それ誰から聞いたんですか!?!」

初春と佐天がなにか小声で話しているが、女子の内緒話を盗み聞きするのは無粋だ

な。

「オレはもう帰るが、お前たちはどうする？」

「あつ、そうですね。そろそろ帰らないと」

「春上さんは……どうしましょうか？」

「寝てるだけって言うし、今日は寮で寝かせてあげたら？」

「そうですね。でもどうやって運びましょう？」

佐天や初春の力では長距離おんぶしていく事は出来ない。それに弓箭もいる。

テレポートを使える白井が楽に移動できるが………。

「いたいた。いやがったわね！この野郎！」

………はあ。

聞き覚えのある声に思わずため息を溢しそうになるが、堪えて振り返る。

「何の用だ御坂？」

「決まってるじゃない！今こそ話を聞かせてもらおうわよ！」

「話ってなんのだ？」

「とぼけんじじゃないわよ！人一人抱えた状態で瓦礫の上をピョンピョン跳ねてたことについてよ！」

「あー…あれだな。火事場の馬鹿力ってやつ」
「そんなわけあるか！」

事故の後だというのに元気だな。

「…あのな。その話今重要なことか？」

「は？あんたまた誤魔化すつもりじゃ……」

「いや、お前ら門限大丈夫か？」

「えっ？」

「そ、そうですわよお姉様！急いで戻らないと、無断で外出したことが寮監にバレでもしたら……」

「……」

白井に返事をするまでもなく、御坂は顔を真っ青にした。どんだけ怖いんだよ。

「い、急ぐわよ黒子！」

「はい、お姉さま！」

「あつ、ついでもいいから弓箭と春上を寮に………つてもういないか」

弓箭と春上の送迎を頼もうとする前に、二人の常盤台生は消えた。

まいったな。春上は初春のルームメイトのようだから問題ないが、弓箭の方はそうもいかない。スマホで検索してみたら、弓箭が在籍している枝垂桜の寮は、ここから数キ

口先の学び舎の園の中にある。ここからタクシーで向かっても門が締まるまでには間に合わない。

「……仕方ない。佐天、初春、今日だけ弓箭をお前らのところに泊まらせても大丈夫か？」

「問題ないですよ」

「助かる。それじゃあタクシーを呼ぶ」

タクシー会社に連絡して数分後、時間通りに来たタクシーまで二人はオレが運んだ。後のことは佐天と初春に任せ、オレは帰宅した。

◇ ◆ ◇

「清原、これを見てなんとも思わないか？」

「思ってたより無事で何よりだ」

翌朝、お隣の上条が着信拒否したことについて文句を言いに来た。

「これのどこが無事に見えるんだ!?!眼科行け!」

ものすごく不機嫌な上条の身体に、同居人のものと思われる噛み跡がいつも以上に付いていたことを言っているのだろう。

「頭蓋骨や脳にはダメージいってないんだろ？」

「寧ろそのほうが良かった程昨日荒れてたんだぞ」

コイツはゴキブリの親戚かなんかか？

「ま、どっちにしろ夏祭りには行けなくて良かったと思うぞ。昨日地震で高台が崩落したし」

「まじで?」

ニユース見てないのかコイツ。

「もし不幸体質のお前がそこにいれば、瓦礫の下敷きになる可能性は大いにあったわけだ。そのことを考えれば、それですんだだけマシだと思うだろ?」

「ぐっ、ひ、否定できねえ」

「……………まあ、行けなかったのは流石に可哀想だからな。インデックスにこれを渡すところ」

昨日の射的でゲットした菓子袋の一部を上条に手渡す。

「満腹とまではいかないが、少しは気が晴れるだろう」

「お、おう。そうだな。サンキューな清原! 恩に着る!」

菓子を受取った上条は急いで自分の部屋に戻る。

『おいインデックス! 清原の奴が昨日の祭りの祭りのお菓子をくれ——うわっ!』

一分も経たない内にバタツと転倒したような音と女子特有の甲高い悲鳴が聞こえた。

『当麻ああああ!』

『ちよつ、わざとじゃないってぎやあああ!不幸だああ!!』

噛み傷の数が増えたみたいだな。

名指しでオレに助けを求める声が聞こえたが無視し、部屋を出て廊下の階段を降りる。

一階に到達したとき、見知った顔が入り口付近でうろろうろしていた。

「弓箭?」

「き、きききよ、清原さん!」

「もう大丈夫なのか?」

「は、はひィ、き、昨日はご迷惑をおかけしました!」

以前と同じように、弓箭は直立した状態からオレに向かって90°の角度まで頭を下げる。

「いや、あの程度迷惑の範囲には入らない。オレの方こそ悪いな。急に抱きかかえたりして。嫌だったろ」

「い、いえそんな!!危ないところを助けていただきましたし、むしろお姫様抱つことかご褒美といえますか、思わず天に召されたような心地でゴニョゴニョ」

「ん?後半辺りがよく聞こえなかったか?」

「い、いえなにも…そ、それより助けて頂いたのでなにかお礼を」

「いや、そういうのは別にいいが」

「そ、そういうわけには！せ、せめてタクシー代くらい」

「だからいいって」

なかなか引き下がらないな。男子寮の前長居していると他の連中に見られて面倒なことになる。

「そういうことなら少し付き合っってほしいんだが」

「へ？」

「最近人気のカフェがあるんだが一緒に行かないか？利用客が女の子ばかりでな。男子禁制って感じがして一人で行く勇気がない」

カフェに行きたいのは？ではない。上条達を誘おうとも考えたが、店の雰囲気はあいづらの趣味に合いそうになかったしな。

向こうで少し世間話でもしながらどうやってオレの住所を突き止めたか聞いてみよう。

「付き合う…付き合う…お付き合い…ひよ、ひよつとして、友達を通り越して男女交際の申し立て?!リア充の仲間入りに、ま、まだ心の準備があ…」

両手で口を塞ぎ驚いた表情で、なにか小声でブツブツ言っている弓箭。

ひよつとして嫌だったか？

「嫌なら別にいいが」

「い、いえ…行きます！ぜ、是非！わたくしでよければ！」

「そうか。なんか顔が真っ赤だが、大丈夫か？」

「に、日射に焼けたのかもかもしれませんね！さあさあ行きましょう！善は急げです！」

「いや、オレはどこのかはまだ言っていないぞ」

「し、失礼しました」

なにやらテンパってる様子の弓箭を連れて男子寮から離れる。

流石に誰も見ていないだろ。

「ど、どういうことぜよ…き、キヨボンが女子と…!?しかもあいつは確か——」

(※思いつきり土御門に見られてた。)

しばらく歩き、オレたちは例のカフェに入る。

カジュアルさをメインとしたダイニングカフェで、大きなガラス窓でオープンエアの解放感が溢れており、テーブル席やカウンター席が完備されている。メニューもコー

ヒー系だけでなく紅茶系もある。

今日も中にいる客の多くが女子で、常盤台生が何人かいる。休みの日も制服着用だと目印になってわかりやすいな。

「す、すごい人数ですね」

「夏休みだからな。弓箭も初めて来たか？」

「はい……わたくし、こういうところ一人で入る勇気がなくて」

「あつ、スマン」

しまった。弓箭の地雷を踏んだようで、彼女の目からハイライトが消えた。

「あそこの席が空いてるぞ」

「あつ、そ、そうですね」

弓箭の目に光が戻り、入り口付近にあった本日のメニューリストに目を通す。

「オレはエスプレッソにする」

「で、ではわたくしも同じのを」

何を注文するか決まり、奥のカウンターまで向かっていると………。

「あら？清原様？」

「ん？」

声をかけられて振り返ると、湾内と泡浮がいた。

「まあ、やっぱり清原様でしたか」

「お久しぶりです」

「ああ、久しぶり」

久しぶりと言うには、寮祭からまだそんなに経っていないはずなんだが……。

「あの清原様、こちらの方は……その、彼女でしたり？」

「か!?か、かかかかの、かの……」

このくだり夏休み前にもあつた気がするな。

「いや、友達だ。初めて入るところだから、無理言つて一緒に来てもらった」

「まあ、そうでしたの」

オレと弓箭との関係を聞いてきた湾内が安堵する。なんで？

「むう……」

弓箭の方も友達認定したというのに少し不満そうな顔をしていた。女心がわからな
い。

「初めまして。常盤台中学1年湾内絹保と申します」

「同じく1年の泡浮万彬です」

「は、初めまして。枝垂桜学園3年の弓箭獵虎と申します」

「まあ、枝垂桜学園と言えば同じ学び舎の園の？」

「きつとどこかで会っていたのかもしれないわね」

「そ、そうですわね」

互いに自己紹介をして打ち解けているようだ。

「二人はここによく来るのか？」

「いえ、わたくし達も今日初めて来まして……………あの、もし清原様たちがよろしければお紅茶を……一緒にいかがでしょうか？」

「ん？」

「あら、良いですわね」

お紅茶なんて丁寧語実際に聞いたの初めてだぞ。ナチュラルに育ちの違いをつきつけられるな。

「あの、駄目……………でしょうか？」

湾内の上目遣いに、オレはノーと答えるほどの勇気はなかった。

カウンターでエスプレッソ二つを受け取り、二人のいるテーブル席にお邪魔する。そこで、一つ気になることがあった。

「…：そういえば、婚后は一緒じゃないのか？」

「あの、実は婚后さんは……………その、入院しております」

「入院？なにかの病気か？」

「いえ、この前学び舎の園の方で地震が起こった後、寮の部屋でポルターガイスト現象に遭遇しまして……」

ポルターガイスト現象か。AIM拡散力場への人為的干渉が原因だが、余計不安にさせるから伝える必要は無いな。

「幸い怪我はなかったのですが、MARの方々に連れていかれたきり戻らなくて」

「MARの連中が？」

「昨日お祭りでいましたね」

ポルターガイスト現象に遭遇したレアサンプルとして検査するためか。

「検査で時間がかかるという理由で面会も謝絶されまして……」

「大丈夫でしょうか……」

婚後の身の安否を心配する二人は不安げな表情を浮かべる。

……取り敢えずフォローしておくか。

「怪我とかがないのなら婚後は大丈夫だ。MARの連中も常盤台生を長期も監禁するほど馬鹿じゃないはずだ。いずれ解放せざるおえなくなる」

それにそうかからないうちにMARという組織そのものは消える。

「もししなかつたら、学校側から正式に抗議すればいい」

「なるほど。その手がありましたか」

「さすが名探偵の清原様ですわ」

「いや、だから名探偵じゃないって。オレはそんな大層なものじゃないぞ」

「ご謙遜を」

「そうですわ。この前の寮祭での清原様が奏でられたピアノの旋律、音楽室に飾られてる絵から御本人が飛び出してきたのではないのかと錯覚してしまうほどの美しさでしたわ」

「大げさな」

第一、オレとあの楽聖は全然似てないだろ。

どうもこの二人のオレに対するリスペクト度が寮祭の時より上がってる気がする。様呼びを全然やめてくれないし。

頼むから、キラキラと輝かせた目でこっち見ないでくれ。

反比例するかのように弓箭の目からどんどんハイライトが消えていつてるから。

それから学び舎の園にはどんな店があるのか、コーヒー派か紅茶派かなど他愛ない話をして時間が過ぎていった。

◇ ◆

「ええ、自然公園？春上さんと二人で？ずる、いい！」

同時刻。風紀委員の活動支部の一つである一七七支部に遊びに来ていた佐天はその場にいなかつた初春に連絡を取っていた。

「なんで誘つてくれなかつたのよ。大体非番だつて聞いてなかつたし」

『はあ、はあ、すいません……………たまにはマイナスイオンを吸うのもいいかなつて……………』

「つていうか吸い過ぎじゃない？息、荒いよ？」

『え？荒いですか？そんなことないです……………よ』

電話の向こうでは、初春が自然公園の小さな湖の上でボートを漕いでいた。

「あ……………あんまり無理しないでね。初春体力ないんだし」

『無理してません……………よ』

息も絶え絶えの初春との通話が終わり、「あーあ、せっかく遊びに来たのに振られちゃつた」と呟いていると固法から「ここは遊びに来るところじゃないんだけどね」とつつこまれる。

「……………ところで固法先輩、御坂さん達は何やってるんですか？」

「んー？あーなんか書庫で調べ物ですつて」

「調べ物？」

佐天がパソコンがあるところに行くと、御坂と白井がパソコンのモニターと睨めつこ

していた。

「うーん……………おかしいわね」

「どうしたんですか二人共？」

「あつ、佐天さん」

「あれ。それ清原さんのデータですか？」

モニターに映し出されている清原綾斗の顔写真が佐天の目に入る。

「顔写真もポーカーフェイス……………なんで清原さんのデータを？」

「実は…昨日地震が起こった時に彼が常人じゃありえないような動きを披露しまして」

「幻想御手事件の時にはもあいつ初春さんを抱えながら階段を数秒で駆け上がったし

……………フィジカル系の能力者じゃないかって思ったんだけど……………」

「へえ…でも書庫には無能力者って書かれてますよ？」

そう。佐天の言う通り、書庫にある記録には、清原綾斗は無能力者としか書かれていなかった。

「えつとなになに……………学園都市に来たのは去年の10月ごろ、かなり遅い時期ですね」

「ええ、このあたりから時間割を受けてもすぐに能力が発現するとは思えませんわ」

「だとしても、あれの説明がつかないわよ。『原石』の類か学園都市に来る前から能力開

発を受けていたのなら話は別だけど……」

「御坂の頭の中に能力を打ち消すツンツン頭の男子高校生がふと浮かぶが、頭をブンブン振ってかき消す。」

「ふむ………学園都市に来る前から能力開発を受けていた、ですか」

「佐天さん？」

「……ひよつとして清原さん、ホワイトルームにいたんじゃ」

「ホワイトルーム？なんですかのそれ？」

「学園都市にある都市伝説の一つですよ」

「また都市伝説ですか？」

「佐天さん本当に好きね」

白井と御坂が呆れるが、佐天の話は進む。

「学園都市の外に秘密裏に建てられた超能力研究施設の名称で、なんでも内部の部屋は名前通り真つ白らしいんですよ」

「そんな施設があるなんて聞いたことないわよ」

「だから秘密裏なんですよ。ブログの口コミによると、その施設を探っていた記者達が次々と消息不明という形で消されたとか、あまりにもハードすぎる時間割に施設の子供の殆どが廃人になって出てくるとか、良くても感情に障害が残ったままとか、第二学区

のある研究機関と共同研究をしていたとか」

「聞くからに物騒なところね」

「聞かされた他の都市伝説よりもかなりブラックな内容ですわ」

「ですよ。名前はホワイトなのに」

「上手くありませんわよ」

軽いジョークを言う佐天に白井は呆れてしまう。

「都市伝説ブログの内容を真に受けるのは良くありませんわよ」

「ロマンがないなあ……この前見つけた幻想御手は実在してたじゃないですか?」

「それはたまたまですの。もしそんな施設があるのなら倫理的な問題で即解体になるでしょうし、そもそも探っていた人間が消されたのが事実なら、ブログに書いた方やそれを見た佐天さんも生きていないでしょう?」

「ああ、確かにそうですね……」

自分が後ろからスドンされる瞬間を想像して、佐天は嫌そうな顔をする。

(そう言えばあいつ……昨日ホワイトルームっていう単語に反応してたような)

「お姉様、こっちはいくら調べても出ないようで春上さんの方を」

「……………」

「お姉さま?」

「えっ、あ、うんっそうね」

「え?なんで春上さんのことも調べるんですか?」

首を傾げる佐天に御坂が事情を説明する。

「昨日の地震の直前、春上さんの様子がおかしかったでしょ?急に遠い目をしたと思ったら『ど!ど!……………ど!ど!この……………』って眩きながら歩き出して……………」

「ああ……………そういえばあの後、気絶しちゃうしで大変でした……………って、ひよっとして春上さんが地震を引き起こした犯人だと思ってるんですか?」

「そう思いたくはないですけど、春上さんへの疑念を打ち消すためにも確認をしませんと」

御坂の電気操作で画面が春上の記録に切り替わる。が、目新しい事は何も書かれていない。能力は精神感応のレベル2ということだけ。

「異能力者……………つてことはまだほとんどの実用の域にない」

「よかつた〜春上さんはポルターガイストとは関係ないつてことですね!」

御坂と佐天が安堵する中、

「お姉さま、これ……………!」

「え?」

白井が指差す特記事項には、「特定波長下においては、例外的に能力以上の力を発揮することもある」と書かれていた。

「これって……………」

春上に対する疑念が深まっていく中、突然足元がグラリと揺れだした。

「えっ!?!」

「地震!!?!」

「またですよ!!?!」

◇ ◆ ◇

「最近地震が多いですね」

「先程のは震度6近くはありましたわ」

先程の地震で幸い怪我人は出なかったものの、余震を警戒してカフェは少し早めに閉店となり、オレたちは店を出た。携帯に送られてきた地震速報では、震源が第21学区の自然公園で怪我人が大勢出たという情報が来た。

「今日はもう寮に戻った方がいいぞ」

「そうですね」

「もう少しお話したかったのですが、仕方ありません」

これ以上話のネタは持ち合わせていないから勘弁して欲しい。

「それじゃあ、気を付けて帰れよ」

「あ、あの！お待ちを清原様」

その場で解散しようとしたら湾内に呼び止められた。

「なんだ？」

「あの、よろしければ連絡先交換できませんか？」

「いいですわね。いつでもお話ができますわ」

「……まあ、別に構わないが」

「あ、あの！それならわたくしも！」

特に断る理由がないため了承すると、弓箭も連絡先を交換しようとして携帯を出す。

パカッと携帯を開き、電源を入れた弓箭は突如顔を青褪めた。

「どうした？」

「い、いえ!!な、なにも問題ありません！まったく！」

「そ、そうか」

連絡先を交換し終えた後、弓箭は失礼しますと猛ダツシユで立ち去った。

「どうしたのでしょうか？」

「さあ……」

結局どうやって寮の場所を突き止めたか聞き出せなかったな。

湾内と泡浮とも別れて寮まで向かっていると、スマホからメールの着信音が鳴った。オレはすぐに取り出し、メールの内容に目を通す。

——思った通りだ。

◇ ◆ ◇

「むふ、むふふふ……」

ああ、にやけが止まりません。

パシリからくる仕事タイムング悪くきてクラスメイトと仲良くなる機会を逃して
るわたくしの携帯の連絡先が一気に3つも追加されました。

これって最早ぼつちから脱却したと言っても過言ではないのでは？

これも清原さんのおかげなのでしょう。

ケヤキモールで生徒手帳を拾ってもらい、その後公園で、昨日の祭りとお会いでき

たうえ、お姫様抱っこして貰えるというハプニング。

あまりのことに脳のキャパがオーバーライドして不覚にも気を失ってしまったため、その時に覚えた清原さんの匂いを頼りに寮のところまで向かいました。

入口のところまで来たところで、初めて男子寮に入るとなると緊張してしまつてうろろしている、タイミング良く清原さんが降りてきてなんとお茶に誘つてくれました。

ですがそこで清原さんの知り合いと思しき女子達と相席することに。

いや、お話ができたので良かったとは思いますが……。

あのお二人が清原さんを褒めたりした時、なんだか胸の奥がもやつとしました。

つまりそういうことなのでしょうか？

もしそういうあれなら……

「ふふふ……」

おっと、そろそろアジトに着きますね。

昨日と今日連絡がつかなかった言い訳を考えて謝りませんと。